

三つの童話集

目次

チイちゃんと象のプルル

03

ポランのたんてい団

73

カラスの死

151

チイちゃんと象のプルル

チイちゃん・・・

チイちゃん・・・

夢の中でお母さんの声がします。

「チイちゃん、起きてごらん。庭にいいものがあるよ」

夢ではありませんでした。お母さんが枕もとに立って話しかけていたのです。チイちゃんはフトンからぬけ出すと、ねむけを足もとにからまるシーツのように引きずりながら、目をこすりこすりえんがわに行ってみました。お母さんがえんがわに立って、笑いながら庭の中を指さしています。チイちゃんもお母さんから指さされた方を見ると、ポチの犬小屋の中に何か大きなものがうずくまっています。チイちゃんが目を大きく開けてよく見ると、何とそれは象だったのです！

「お母さん、ポチは？ポチはどこ？」

かわいがっているポチのことが気になって、チイちゃんはお母さんにききました。すると、お尻はんぶん犬小屋に隠れている象の背中の上に「クウーン」と鼻を鳴らしてポチの顔がのぞきました。ポチも、この見知らぬ侵入者に家をせんきよされてとまどっているよ

うすです。何しろ小屋から出ようにも出られなくなってしまったのですから。

ポチの顔を見てホッとしたチイちゃんは、あらためて象をながめてみました。まだ子ども象です。前足を折って地面に腹ばいになり、大きな目をクルクル回しながら、イタズラっぽくチイちゃんを見ています。

「動物園から逃げてきたんだらうかねえ」

お母さんが腕ぐみをしたまま言いました。お母さんの声には、こまったというよりもけさのハプニングを楽しんでいるふんいきが感じられます。

「動物園に電話して、引き取ってもらうしかないかねえ」

それを聞いたチイちゃんは、思わず

「お母さん、この象飼ってもいい？」

と叫んでいました。

(象を飼うって・・・そんなことできるのかしら・・・)

チイちゃんは自分で自分の言ったことにびっくりしてしまいました。子象はお母さんの言ったことが分かったのか、長い鼻を左右に振ってイヤイヤをしています。

「象を飼うっていったって、象はおお食らいだって言うからねえ・・・ウチにはそんなよゆうはないし・・・。ねえ、チイ。一日だけ飼ってみて、あした動物園にもどしてやったら？」

「ウン!!」

自分でもびつくりするくらい大きな声でチイちゃんは答えていました。すると、二人のやりとりに聞き耳を立てていた子象がムックリ体を起こすと、ゆつく犬小屋の中から出てきたのです。しつぽまで出終わると、子象はブルブルツと体をふるわせました。みるみるうちに子象の体はフーセンのようにふくらみ始め、とうとうお父さんが日曜大工で作ったポチの小屋よりも大きくなってしまいました。今ではチイちゃんの背たけくらいはあるでしょう。

「ワア、プルルだ!プルルだ!」

チイちゃんは手をたたいて喜びました。ポチも小屋の中からおおずとおおずと出てくると、不思議そうな顔で子象を見上げています。

「お母さん、この象、プルルって呼ぼうね」

チイちゃんがそう言うと、子象も長い鼻をグルグル回し、大きな耳をバタバタさせてチイちゃんに答えたのでした。

「おまえ、どこから来たの?やっぱり動物園から?」

プルルを連れて学校に向かいながら、チイちゃんはきいてみました。プルルは何も答え

ないで長い鼻をゆすりながらノッシ、ノッシと歩いて行きます。

「おまえのお父さんやお母さんは？」

チイちゃんがまたきいた時、プルルの目に悲しそうなかげが走りましたが、すぐにまたもとのイタズラっぽい目つきにもどりました。

「ゴメンネ、もうきかないよ」

チイちゃんはプルルと並んで黙って歩いて行きました。

(学校で、みんな、プルルを見たらおどろくだろうなあ)

チイちゃんはプルルを連れて教室に入った時のことを想像してみました。胸がワクワクしてきました。みんなきつと「この象どうしたの？」ってききながら、プルルの体にさわりに来るでしょう。そんな光景をアレコレ想像して楽しんでいたチイちゃんは、フト、みょうなことに気がつきました。通りを歩いている人が誰もいないのです。もともとは静かな住宅地で人通りは少ないのですが、それにしても朝のこの時間には、チイちゃんのように学校に行く子どもたちや、職場へ急ぐサラリーマンの人達の姿を見かけるものなのですが・・・。今日は広い通りを一人も歩いていません。チイちゃんは少し不安になってきました。

(チコクしちやったのかしら?)

いいえ、そんなことはないでしょう。けさもいつものように、お母さんに見送られて家

を出てきたのですから。お母さんは、チイちゃんが学校に行ったあと、食事のかたづけをしてからとなり町のかんづめ工場に働きに行きます。中学生のお兄ちゃんは、毎朝サツカー部の練習があるからと言って、いつも一番先に家を出ていました。

「プルル、チョット急ごうか」

チイちゃんはプルルのお尻を軽くたたきました。プルルはチイちゃんの心配など気にもとめないようすで、あいかわらずノツシ、ノツシと歩いて行きます。住宅地の中を通るこの道路はやがて下り坂になり、坂の下で児童公園とぶつかっています。チイちゃんは手をかざして公園の方を見ました。いつもならそこには、幼稚園のそうげいバスを待っている子どもたちやお母さんの姿が何人か見えるのですが、今日は誰もいません。チイちゃんはますます心配になってきました。その時、児童公園の向こうから学校の鐘の音が聞こえてきました。

（あ、始まりのベルだ！）

児童公園の木立の向こうに学校の建物が顔をのぞかせています。今からかけていけば間に合いそうに見えますが、校門は公園とは反対側にあつて、道路をグルッと回って行かなければいけないのです。どんなに急いでもここから五分はかかるでしょう。それに今日はプルルも連れているのです。

(アーア、チコクしちゃった)

チイちゃんはタメ息をつきました。小学校に入学してから今まで、チイちゃんは一度も学校を休んだりチコクしたことがありませんでした。今日が初めてなのです。担任の北野先生の顔が浮かんできました。先生は若くてやさしい先生なのですが、おこるととってもこわいのです。

(どうしよう・・・)

「プルル、急いで」

だめだろうなどは思いながらも、チイちゃんはプルルのお尻をピチャピチャたたいてせきたてました。プルルはそんなチイちゃんをイタズラっぽい目で見返すと、あいかわらずノロノロと歩いて行きます。

(先生は分かってくれるだろうか)

チイちゃんは心の中でたずねました。けさもいつもどおりに家を出てきたのです。きっとプルルといっしょだったので遅くなってしまったのでしょうか。

(ア、プルルを連れて行ったことでおこられてしまうかもしれない・・・でも・・・)

そうです。先生は、みんなが家で生まれた子ネコや子イヌを学校に持って行っても、決しておこったりはしませんでした。それにチイちゃんのクラスでは、ウサギを教室で飼っ

ているのです。そのウサギも子どもたちの一人が家から持ってきたものでした。動物好きな先生でなければ、そんなことは許されなかったでしょう。今ではクラスのみんなで、毎日順番にウサギ当番にあたっていました。だから――

（先生はきつと許してくれるだろう。もしかしたら逆に、ほめられるかもしれない。だってみんな、象にさわったり二オイをかいだりする機会なんてそうメツタにないんだもの）

チイちゃんはそう思いなおすと、校庭を囲むコンクリートのへいにそってプルルといっしょに歩いて行きました。心もち、前より早足になっていました。

校門を通ってグラランドに入ると、そこにも誰もいませんでした。もう一時間目の授業が始まっているはずです。今日は、一時間目にグラランドを使うクラスがないのでしょうか？学校の中は、きみようなほど静まりかえっていました。いつもなら一階の一、二年生の教室から、にぎやかな話し声が聞こえてくるのですが……。チイちゃんは一瞬、全校で遠足にでも出かけちゃったのかなと思つて不安になりましたが、そんなことはありません。よく見ると、グラランドに面した教室の窓には小さな頭がいくつもぎょうぎよく並んでいました。チイちゃんはホッと胸をなでおろすと、グラランドのすみを通つて校舎に入つて行きました。

チイちゃんたち二年二組の教室は、げた箱を入つてすぐのところにあります。チイちゃんはおぼきにはきかえると、静かにろうかを歩いて行きました。後ろからついてくるプル

ルが床を踏むたびに、メキツ、メキツと大きな音がします。その音が、静まりかえった枚舎の中にひびきわたるようでした。教室の前まで来ると、チイちゃんは一度大きく深呼吸をしてからドアを開けました。

マスクです！チイちゃんの目に飛びこんできたのは、三十数個のマスクだったのです。クラスメートのみんなが白いマスクをして黒板に向かっていました。思いがけない光景にボーゼンとしてしまったチイちゃんは、ボンヤリと黒板の方に目をやりました。担任の北野先生が、白いチョークで黒板に何か書いています。先生もマスクをしていました。チイちゃんが教室に入って来たのに気づいたのか、先生はチラッと横目でチイちゃんを見ました。その目を見てチイちゃんは、思わず背中がゾクゾクツツとしてしまいました。北野先生の目が、見るからに冷たいキツネ目にならなりました。先生はすぐに黒板に向きなると、またチョークで書き始めました。チイちゃんは胸がしめつけられるように感じて、みんなの方を見ました。みんな熱心にノートをとっています。誰もチイちゃんに気づいてないようです。チイちゃんは、窓側の列の一番後ろの席の机の上に、ウサギのカゴが置いてあるのに気がつきました。チイちゃんの席です。いつもならウサギのカゴは、教室の後ろの床に置いてあるのですが……。今日は、カゴの中はカラッポでした。

チイちゃんは必死になつて目でタエちゃんをさがしました。タエちゃんというのは、クラ

スでただ一人チイちゃんが心を開いて話せる友だちなのです。タエちゃんは、教たくの前の席にすわっていました。やはりマスクをして一生けんめいノートをとっています。チイちゃんが目であいずを送ると、タエちゃんはそれに気づいたのか、何度も激しく首を横に振りましました。今にも泣きだしそうな顔です。それを見たチイちゃんは、黙ってドアを閉めると教室から出て行きました。ろうかで待っていたプルルには、誰も気づかなかったようです。

チイちゃんは悲しくなりました。今日ほど学校で居場所がないのを感じたことはありません。ふだんからチイちゃんは、男の子たちにイジメられていました。「チイ、チイ、ヒラメのチイ！」とはやしたてられていたのです。チイちゃんの顔は大きく目は小さいので、ヒラメに似ていなくもありません。それに、チイちゃんは生まれつき動作が少しニブイところがありました。ヒラメはいつも海の底でじっとしていますが、何かあるとパツと砂から出て泳ぎだします。チイちゃんもそのヒラメのように、男の子からかわれても最初はイスでじつとガマンしているのですが、急に泣きだして立ち上がると、男の子たちを追いかけるのです。そんなところからも、あるいは「ヒラメ」というあだ名がついたのかもしれない。

教室を出たチイちゃんの足は、自然と調理場に向かっていました。中根のおばさんに会いに行こうと思ったのです。中根のおばさんというのは、お母さんの高校時代の同級生で

した。短大を出て給食のおばさんになってからずっと、チイちゃんの小学校に勤めていたのです。チイちゃんは休み時間になっても遊び相手がないので、いつもポツンと一人教室にとり残されていました。とくに去年お父さんが事故で亡くなってからは、ますますふさぎこむようになっていました。そんなチイちゃんの話し相手になつてくれたのが、タエちゃんと中根のおばさんだったのです。タエちゃんはお父さんとお母さんが離婚して、今ではお母さんと二人で住んでいます。タエちゃんは明るい性格なのでみんなから好かれています。時々一人で寂しそうにしているチイちゃんにも声をかけてくれるのでした。

昼休み、給食を食べ終えるとチイちゃんは、ほとんど毎日のように調理場の中根のおばさんのところへ遊びに行っていました。おばさんは調理用具の後かたづけをしながら、それでも手を休めずに

「どう、今日の給食おいしかった？」

とチイちゃんにきいてくるのです。

「ウン、おいしかったよ」

とチイちゃんが答えると、おばさんはとつてもうれしそうな顔をするのでした。

チイちゃんは長いろうかを音をたてないように気をつけながら歩いて行きました。プルルは床に目を落としたまま、ゆっくり後をついてきます。校舎の中は静まりかえっています。

した。聞こえてくるものといえば、先生が黒板にチョークで書く音と、子どもたちがそれをノートに写すサラサラという音だけです。教室のドアはどれもみんな閉まっています。が、チイちゃんは背のびをして教室の一つをのぞいてみました。やはり子どもたちはみんな白いマスクをかけていました。マスクが制服になったのでしょうか？いいえ、そんなことは考えられません。きのうまで、そうじの時間にはマスクをつけることになっていましたが、授業中にマスクをする子どもなど一人もいなかったのですから。それとも急に悪いカゼがはやりだったのでしょうか？それも考えにくいことです。三月のこの時期は季節の変わりめとはいえ、みんながみんなカゼにかかるなんて考えられません。いったいどうしたのでしょうか。

（中根のおばさんにきいてみよう。おばさんなら分かるだろう）

チイちゃんは頭がこんがらがったままろうかを出しました。調理場は渡りろうかを曲がってすぐのところにあります。チイちゃんは、プルルをおばさんに見せてこれからどうしたらいいかきこうと思っていました。渡りろうかの角にある水飲み場まで来た時、急に思いなおしてプルルをそこに置いていくことにしました。何か予感のようなものがしたので。チイちゃんはプルルの大きな耳に口を寄せると

「いいかい、プルル、ここでおとなしくしてるんだよ。すぐにもどってくるからね」

とささやいて、プルルの頭をなでてやりました。プルルは頭をたれたまま聞いていました。調理場のドアは開け放たれて、中ではモウモウと湯気が立ちこめていました。もうこの時間から、おばさんたちは昼の給食の準備をしているのです。チイちゃんは、おばさんたちのめいわくにならないようにドアのかげから顔だけのぞかせて、目で中根のおばさんを見ました。ほんとうは

「中根のおばさん！」

と、いつものように声をかけて中に入って行きたかったのですが

「アラ、チイちゃん。こんな時間にどうしたの？」

とおばさんにきかれたら、何も言わずに泣きながらおばさんの胸に飛びこんで行ってしまふような気がして、チイちゃんはドアのところで自分を押さえたのです。

調理場の中では、野菜の皮むきをしている人、湯気の立つ大ナベをひしゃくでかき回している人、食器を運んでいる人など、みんないそがしそうに働いていました。おばさんたちは誰もマスクをしていません。チイちゃんはそれを見て安心しましたが、ここでは熱くてとてもマスクなどしてられないでしょう。

中根のおばさんは奥に一人で立っていました。いつもは調理用具が置かれているところなのですが、今日はなぜか体育館から持ってきた卓球台が置かれていました。おばさんは

その卓球台に手をついて、しきりに体を前後に動かしています。何か洗いものでもしているようです。今まで見たことのないしんけんなおばさんの表情にとまどいを感じながらも、チイちゃんが一步調理場の中へ足を踏み入れようとした時、チイちゃんはアツ、と言ったまま棒立ちになってしまいました。それは、なにげなく入口の壁にかかっている黒板を見たチイちゃんの目に、次のような文字が飛びこんできたからです。

きょう
こんだて
今日の献立

とくべつ
特別メニュー

こぞう
子象（プルル）のシチュー

注意：象の肉は固いので、アクを取りながら気長に煮ること

この小さな黒板にはその日のこんだてが書いてあるので、休み時間になると給食が楽し

みな子どもたちがよくのぞきに來るのです。ポーツとしてしまったチイちゃんの目に、中根のおばさんの姿が映りました。おばさんは両手で卓球台の上から何かを持ち上げました。立ち上る湯気の向こうに光ったのは、何と丸太をひくような大きなノコギリだったのです！チイちゃんは足がふるえてきました。さつき教室でタエちゃんがあんなに激しく首を横に振ったのは、このことをチイちゃんに教えるためだったのでしょうか？チイちゃんはおばさんたちに後ろ姿を見られないように気をつけながら、水飲み場のプルルのところまでもどりました。さいわいそこは死角になっていて、調理場からは見えません。チイちゃんはプルルの耳に顔を寄せると、ふるえる声で

「プルル、早くここから逃げよう。食べられちゃうよ」

とささやきました。プルルは足もとのスノコに目を落としていました。

チイちゃんとプルルはろうかを通らずに、校舎の外を回ってげた箱にもどりました。そこで靴をはきかえたチイちゃんは、プルルを連れてグラウンドではなく、ゴミ焼き場や古い机・イス置き場のある校舎の北側を通って裏門から外に出ました。お母さんはもう勤めに出ています。それにとても一人では心細くて家にはいられないでしょう。チイちゃんが学校にいないことが分かれば、あの人たちはきつと大ナタやノコギリを振りかざしながら家まで押しかけてくるにちがいありません。何しろチイちゃんが子象を連れていることだけ

でなく、その名前がプルルということまで知られているのですから。いつこくも早く安全なところまで逃げなければなりません。頭の中でアレコレ逃げ場所を思いめぐらしていたチイちゃんは

(そうだ、杉本先生の教会に行こう)
と思いました。

杉本先生の教会というのは、去年お父さんが亡くなってから、お母さんが知り合いの人にしようかいされて通い始めた教会のことです。毎週日曜日、中学生のお兄ちゃんはサッカーの試合や練習があるからと言って一度も行ったことはありませんでしたが、お母さんに手を引かれてチイちゃんも礼拝に出席していました。杉本先生のお説教はまだチイちゃんにはむずかしくありませんでしたが、杉本先生や奥さん、それに礼拝に来る信者の人たちがみんなやさしくて、チイちゃんをとともかわいがってくれたのです。礼拝の終わった後、チイちゃんは大きいお柿さんやお兄さんと教会の中庭で遊んでいましたが、お母さんは礼拝堂に残ってよく杉本先生と話をしていました。お母さんが目がしらを押しえている光景も何度か見られました。

チイちゃんは教会まで、団地の裏を通って行くことにしました。一度坂の下の児童公園までもどった方が近いのですが、まんいちのことを考えて遠回りすることにしました。

団地の裏には用水路が流れていて、用水路にそって並木道が続いていました。タエちゃんがその団地に住んでいたのも、チイちゃんはタエちゃんの家遊びに行くのに何度かその並木道を通ったことがあります。人通りの少ない道でした。

さいわい今日も誰もその道を歩いていませんでした。プルルを連れて並木道を通りぬけたチイちゃんは、大きなバス通りに出ました。そこから教会まではこの通りを歩いて行かなければなりません。通りの両側には畑が広がり、ところどころに家が建ち始めていました。教会は向こうに見える丘の中ふくにあります。バス通りはいつもならひっきりなしに車が走っているのですが、今日は一台も見えません。歩道を歩いている人もいません。チイちゃん不思議に思いながらも、足ばやに教会に向かって歩いて行きました。

教会はバス通りから少し入って、階段を十数段上ったところにあります。チイちゃんにとってこの階段は歩はばが合わないの上りづらい階段でしたが、どうやらプルルにとってもそのようでした。ようやく階段を上りきったチイちゃんは、玄関のドアにはり紙がしてあるのに気がつきました。白い画用紙に海賊船の旗のようなドクロマークが黒くかかれていたのです。教会の窓という窓にも同じ絵がはってありました。チイちゃんはイヤな予感がしました。ドアのノブに手をやってそと回してみました。開きません。中からカギがかかっているようです。誰もいないのでしょうか。チイちゃんは礼拝堂のわきに回っ

てみました。天井の明かりがついています。それに中からは、ヒソヒソ話し合う声も聞こえてきました。いつもの開放的な教会とはまったくふんいきがちがいます。チイちゃんが部屋の中に向かって声をかけようか迷っていると、後ろからプルルが鼻でチイちゃんの肩をたたきました。チイちゃんが振り返ってみると、プルルが前足を折ってひざをつき、しきりに鼻先を上に向けています。どうやら、プルルの背中に乗って窓の上の方から中をのぞいてみるということのようでした。チイちゃんの背の高さの窓にはあのドクロの絵がはってあって、中が見えなかったのです。

（プルル、ありがとう）

心の中でそう言うと、チイちゃんはランドセルを肩からはずしてプルルの背中に上りました。前足を折っていたプルルが立ち上がっていくにつれて、礼拝堂の中が少しずつ見えってきました。杉本先生がいます。奥さんもいます。それに田畑さん夫妻や、いつもチイちゃんの遊び相手になってくれる白井青年と玲子さん、そのほか四、五人の人たちが輪になって床にすわっています。チイちゃんはみんなの服装を見て思わず吹き出しそうになってしまいました。それは、杉本先生をはじめみんながみんな黒マントをはおり、おまけに頭には黒のダンボール紙を丸めて作ったエントツのような帽子をかぶっていたからです。帽子の正面には、白い絵の具でドクロマークがかいてありました。マントも帽子もチイちゃ

んには見覚えがありました。去年のクリスマスの際に、教会の子ども会で「キリストの復活」という劇を上演したさい、みんなで作った衣しようなのです。チイちゃんも手伝いました。黒マントと黒帽子は、荒野で祈るイエスをゆうわくする悪魔と、イエスをはくがいで十字架にかけるパリサイ人たちの衣しようにした。

「プルルとチイは今ごろ学校を出て家に向かっているだろう・・・」

杉本先生の声が聞こえてきました。いつものやさしい声とちがつてダミ声です。みんなしんけんな表情でうなずきました。くるま座の輪の中に、もぞう紙が一枚広げてありました。マジックで絵地図がかいてあります。教会の十字架は黒くぬりつぶされてきました。チイちゃんの家は赤で、学校は青くぬられています。学校とチイちゃんの家を結ぶ道路の上に、チイちゃんとプルルのにが絵の切りぬきが置いてありました。絵の得意な白井青年が描いたものでしょうか。チイちゃんの顔は、ヒラメそっくりに描いてありました。

「学校から家までの道はこことここしかないから・・・」

田畑さんがチイちゃんとプルルの切りぬきを指さしながら言うと、手に持っていた黒いふだを何枚かその周りに置きました。黒いふだは凸の形をしていたので、チイちゃんは何だかテレビの時代劇の戦国武将の陣中会議を見ているような気になりました。

「どうやって逃さないでつかまえられるかしら・・・」

玲子さんが腕ぐみをしながら言いました。みんなはもぞう紙の上に体を乗り出すようにして議論を始めました。くぐもった声なので、もうチイちゃんの耳には聞こえてきませんでした。

チイちゃんは足から力がぬけていくようでした。「下ろして」とプルルに言おうとした時、プルルがしゃがみ始めました。少しずつチイちゃんの目から礼拝堂の中が消えていく最後の瞬間に、チイちゃんは奥の壁に十字架が立ってかけてあるのを見ました。その十字架も劇で使った小道具なのですが、たしか一本だったはずです。それが今日は二本置いてありました。

「プルル、どうしよう」

チイちゃんは地面に下りると、プルルの首を抱くようにしてささやきました。教会の窓という窓にはられたドクロマークが二人を見下ろしています。もうどこにも行くところはないのです。チイちゃんの胸は悲しみでいっぱいになりました。その時プルルが背を向けると、教会の階段を下り始めました。チイちゃんもあわててランドセルを肩にかついで、プルルの後を追いました。

「プルル、どこへ行くの?」

急な階段を下りきったところでチイちゃんはプルルにたずねました。プルルは何も答えないで、鼻を高く持ち上げたままノッシ、ノッシと歩いて行きます。まるで「オレについてこい」と言わんばかりです。そんなプルルの姿を見て、チイちゃんは何となく安心して

きました。ダイジョウブ。プルルについて行けば、どこか安全なところに隠れられる——そんな気がしてきたのです。

バス通りに出ると、プルルは右へ曲がりました。左へ折れると、坂の下の児童公園に出ます。プルルはもと来た道を引き返すのでしょうか？そんなチイちゃんの心配をよそに、プルルはズンズン歩いて行きました。前とはくらべものにならない速さです。チイちゃんはプルルの後を小走りについていきました。

団地の裏の並木道へ入る小道を過ぎてしばらく行ったところで、プルルは右に折れました。ジャリ道を歩いて行くと、やがてゆうし鉄線で囲まれたあき地が見えてきました。ここは市の下水道工事のしざい置き場でした。大きなコンクリートの下水管が何本も並び、砂やレンガが山積みになっています。近くで下水工事が始まったということでしたが、ここは一年以上もこうやって放ちされたままになっていました。子どもたちにとってはかっこうの遊び場です。放課後になると、男の子たちがやって来てはよくオニごっこをして遊んでいました。チイちゃんも、学校の帰りに遠回りをしてタエちゃんと何回か来たことがあります。男の子たちのように走り回るわけではありませんが、下水管のふちに腰を下ろしてその日学校であったことなどを話すのです。チイちゃんが胸につかえているようなことをボソボソ話すと、タエちゃんは一生けんめい聞いてくれて、時々あいづちもうつてくれました。

危険 立入禁止 危ないから
ここで遊んではいけません

こんなふだがかかっていたのですが、ゆうし鉄線はあちこちで破られていました。プルルはそこからあき地の中に入って行きました。ここで隠れる場所といえは下水管の中くらいなものです。プルルはその下水管置き場に向かって進んで行きました。

(ここで夕方まで隠れて、お母さんが帰ってくるころになつたら家にもどろう。それからお母さんと話して、あしたプルルを動物園に帰してやるかどうか決めよう)

チイちゃんがそんなことを考えていた時、先に下水管の前に着いたプルルがチイちゃんを振り返りました。けさ初めてプルルを見た時のようなイタズラっぽい目をしています。プルルは鼻を持ち上げて、二、三回鼻先を下水管の中へ入れるしぐさをしました。チイちゃんが「わかったよ」というようにうなずくと、プルルは下水管の中に入って行きました。チイちゃんも後に続きました。

下水管の中に一歩足を踏み入れたチイちゃんは、びっくりしてしまいました。中が明る

いのです。まるで向こうから日がさしているようでした。いつもはうす暗くてとても中へ入る気にはなれないのですが・・・。プルルはドンドン奥へ進んで行きます。チイちゃんはオヤ、と思いました。下水管はこんな長くなかったはずです。それに何本もつぎたしたように、ところどころで曲がっているのです。

「プルル、どこまで行くの？」

チイちゃんは不安になつてプルルのしつぽをつかみました。プルルはそれでもズンズン進んで行きます。チイちゃんは何だか迷路の中を歩いているような気になってきました。もう何十本の下水管の中を通ったことでしょう。チイちゃんは足がつかれてきたのでプルルに「止まって」と言おうとした時、プルルが立ち止まりました。チイちゃんはプルルのわきをぬけて前に出てみました。

岩のとびらが立ちはだかつていました。たしかにとびらのようなのですが、ノブも引き手もどこにも見あたりません。チイちゃんがどうしようか迷っていると、後ろからプルルの鼻がのびてきて、トントンとドアをたたきました。プルルはしんみような顔をしてドアを見つめています。岩のとびらがゆっくりと向こう側に開いていきました。

「やあ、チイ、よく来たね」

中から声がしました。忘れもしなないお父さんの声です！しきいの向こうに男の人が

立っていました。チイちゃんは目をこらして見ましたが、向こう側はうす暗くてよく見えません。チイちゃんの前に立っていた人は、髪を長くのばし、肩からすねまである長い服を着ていました。腰のところを縄のようなもので結んでいます。お父さんでしょうか、それとも別の人でしょうか？チイちゃんは、あんなに夢にまで見たお父さんが今目の前に立っているかもしれないのに、なぜか足が動きませんでした。「お父さん、チイ、会いたかったの」と言つて、お父さんの胸に飛びこんで行けませんでした。それは、チイちゃんの頭の片すみにお父さんは死んでもうこの世にはいないんだという思いがあつたのと、「その人」にはどこか近寄りがたいふんいきがあつたためです。そんなチイちゃんの心を見すかしたように、「その人」は「こわがらなくてもいいんだよ」と言うと、一歩前に出て身をかがめてきました。髪は肩までのびプシヨウひげも生やしていましたが、チイちゃんの肩に手を置いて見つめているのは、まぎれもなくお父さんの顔でした。二つの目は澄んできました。チイちゃんは「わかつた」というようにコックリうなずきました。

「それじゃあ、下へおりて行こう」

お父さんはそう言つて立ち上がると、チイちゃんの手をとりました。チイちゃんもお父さんと並んで歩いて行きました。お父さんの手は冷たくも温かくもありませんでした。プ
ルルが後に続きました。

とびらの向こうは小さな踊り場になっていました。チイちゃんの前に、うす暗い褐色の世界が現れました。何だかアラビヤの街にでも来たようです。泥を固めて作った家や土べいがふくざつに入りこんで広がっていました。死んだように静かな世界でした。お父さんはチイちゃんの手を離すと、階段を下り始めました。チイちゃんもお父さんの後に続きました。土でできた階段です。その時初めてチイちゃんは、前を行くお父さんの足首にボーリングの玉のようなものが鎖でゆわえつけられているのに気がつきました。その玉はどう見ても鉄でできていて重そうなのですが、土の階段をこわすこともなくお父さんの足に引きずられていきます。チイちゃんがお父さんに痛くないかどうかきこうとした時、前からお父さんが

「ああ、これはね、体には痛くないんだよ。心の痛みでね、重い・・・」
と答えました。

階段を十数段おりて下に着きました。チイちゃんは周りを見まわして、アツとおどろきました。上の踊り場から見た時には誰もいないと思ったのですが、下に来てみると、数えきれない人たちが棒くいのように立っていました。いいえ、その人たちはみな立ちつくしていたわけではありません。時々、思い出したように棒くいの中の何本かが機械人形のようにぎこちない動作で動くのでした。動いたと思っただけにまた止まってしまいます。

「ここはね、生きられなかった人が来る世界なんだよ」

お父さんがチイちゃんに説明するように言いました。チイちゃんはかわいた褐色の土を踏みしめながら、棒立ちになった人たちの間を歩いて行きました。どの人もどの人もうつろな目をしてうつ向いています。みんな一人のカラに閉じこめられてしまったようです。お父さんと同じように、足首に鉄の玉をゆわえつけられている人もいました。腰や首に鉄の輪を下げている人もいます。なかには、見るからに重そうなゴルフバックを肩にかついでいる人もいました。棒くいの間から一瞬、ランドセルを背負った子どもの姿が見えました。女の子か男の子か分かりませんが、チイちゃんはあの子も重い胸の痛みをかかえているのだと思うと、胸がしめつけられるようでした。

「さあ、着いたよ」

前を歩いていたお父さんが言いました。棒くいになった人たちの間をぬけると、土べいで囲まれた小さな広場が現れました。ところどころに円柱形の石がベンチのように層いています。ここには誰もいませんでした。奥の方に、大きな石がついたてのように立っていました。お父さんはそこに向かって歩いて行きます。チイちゃんもお父さんの後についていきました。

「今日はね、おまえといっしょにビデオを見ようと思ってプルルに呼んできてもらったんだよ」

ついたての前に立ったお父さんが振り向いて言いました。

「これはね、ビデオ・プロジェクターのスクリーンなんだ。ここにビデオが映るんだよ。何のビデオかって言うとね、仁吉じんきちじいさん—おまえに話したことがあるかな—戦争で死んだおまえのおじいさんが残していつてくれたビデオをおまえと見ようと思つてね。おまえもそこに腰かけなさい」

お父さんはそう言うのと、ついたてのわきの石に腰を下ろしました。チイちゃんも、お父さんから指さされたスクリーンの前の石のベンチにすわりました。ランドセルは肩からはずして足もとに置きました。プルルもチイちゃんのそばに足を折ってしゃがみこみました。

(仁吉おじいさん・・・)

名前だけは聞いたような覚えがあります。お父さんのお父さんという人でした。

「お父さんは死ぬ前にね、ここへ来れば仁吉じいさんに会えると思つていたんだ・・・。でも会えなかった。その代わりにおじいさんは、ビデオを残してくれたんだよ」

お父さんは言葉を切ると、ついたてのふちを指で二、三度はじきながらスクリーンの方向に目をやりました。スクリーンには何も映っていません。褐色の幕のようなものが下ろされたままです。チイちゃんは学校の視聴覚室で、こんな大きなスクリーンでビデオを見たことがあるのを思い出しました。理科の授業でした。星の世界を映したもので、星空の中

を宇宙船が静かに進んで行きました。

「ここはね、さつきも言ったように、生きられなかった人が来るところなんだよ。ここでは少しづつ少しづつ時間をかけて、自分の心を見つめるように求められるんだ。なぜ生きられなかったのか、ということだね。そうやって自分の心を振り返っていくと、このスクリーンに画面が現れてくるんだ。でもそれは自分の生きてきた姿じゃなくてね、誰かほかの人が残していつてくれたビデオのシーンなんだよ。お父さんにとってそれが、仁吉じいさんだったっていうわけさ。

ここへ送られて一年近く。お父さんも始めはさつき歩いていた人たちのように、うつろな目をして立ち止まり立ち止まりしながら歩いていったんだよ。残してきたものへの愛着があまりに強かったからね。おまえやお兄ちゃんやお母さんや……。それは誰でもそうなんだけれど。それから少しづつ少しづつ自分の心を振り返り始めた。そうしたらこのスクリーンに絵が流れ始めたんだ。始めは何の絵か分からなかったよ。見たこともない場面が映し出されていたからね。後になって、それが仁吉じいさんのビデオだったということが分かったんだ。

この一年間、お父さんは少しずつ少しずつ仁吉じいさんのビデオを復元してきて、今日がその最後の日なんだ。それでどうしてもおまえといっしょに見たくて、プルルに連れて

きてもらったんだよ。チイ、いっしょに見てくれるかい？」

チイちゃんは、わきにうずくまっているプルルに目をやりました。プルルはそれに答えるかのように、鼻先をチョット持ち上げてみせました。ウン、というようにチイちゃんはコックリうなずきました。お父さんもうれしそうにうなずくと

「じゃあ、最初からかけるからね」

と言って、ついたての裏から小さな平べったい石のようなものを取り出しました。お父さんはそれを左手に持つてスクリーンに向けると、右手の指先で軽くふれました。スクリーンが光つてザーザーという音とともに粒子の波が現れました。どうやらお父さんが手に持つているのはリモコンのようでした。褐色のうす暗い世界で、スクリーンの前だけが明るく照らし出されました。やがて画面が安定してきました。

山の上です。大きな松の木が一本生えていました。山の上は広場のように地面がむき出しになっていて、周りをカヤが取り囲んでいます。広場のはじめに松の木がそびえています。少しづつ松の木が大写しになってきました。根もとに動物が一匹すわっています。画面が変わって、松の木の根もとが正面から映し出されました。猫でした。チイちゃんはそれを思わず吹き出しそうになってしまいました。その猫が、お兄ちゃんが家に持ち帰ってくるマンガの『じゃリン子チエ』の小鉄にそっくりだったからです。お母さんも時々台

所で『チエ』のマンガを読んでいた。

画面では、お年寄りがかけるような円ぶちメガネをした猫が松の木にもたれて何か書いていました。右手にはナイフでけずったチビたえんぴつを持ち、左手にはどうやらハガキを持つているようです。えんぴつをなめなめ少しずつ書いているようですが、すぐに行きづまるとえんぴつを置いて足もとに咲いているナンバンギセルの花を一本折り、口にくわえていっぷくふかします。しばらくするとまたえんぴつを取り上げて書き始めるのですが、なかなかはかどりません。画面の下の方に「なめとこ山の猫」という字が出ました。どうやらこの猫は、猫は猫でも山猫のようです。山猫はようやく書き終えたのか、えんぴつを下に置くと両手でハガキを持って、ためつすがめつ見えています。山猫を映す角度が少しづつ変わって、松の木の後ろから山猫の肩ごしにハガキの文面を大きく映し出しました。それにはただたどしいカナクギ文字でこう書いてありました。

仁吉様

九月二十三日の秋分の日の夜に

なめとこ山の

なめとこ広場で

生きとし生けるものの

輪廻りんねの祭りを開きますので

来てくれど

持ち物

竹のハシ

竹の皮でくるんだにぎりメシ

ニワトリの尾羽根一本

クルミのカラ数個

なめとこ山の猫・拝

チイちゃんはその手紙を読んで、何だか楽しくなってきました。『じゃリン子チエ』の世界にいるような気がしてきたのです。

「なめとこ山っていうのは、じっさいにお父さんのイナカにあるんだよ。なめとこ山の一本松って言うてね。お父さんは登ったことはないけど。仁吉じいさんは子どもころ、なめとこ山の猫にしようたいされて行ったんだね」

お父さんがそこまで言った時、画面が一転して暗くなりました。それから中央に赤い火が映りました。夜です。たき火をたいているようです。パチパチと竹のはぜる音がします。火の上に何かかかっているようです。ナベのようにも見えますし、洗面器のようにも見えます。お湯がふつと湧いているのでしょう。モウモウと湯気が立ち上っています。たき火の周りが少しずつ明るくなってきました。始めは何も見えなかったのですが、火に照らして出されて、動物たちの顔が壁のように浮かび上がってきました。サルもいます。ヒヒもいます。シカ、イノシシ、キツネ、タヌキ、カモシカ、ムササビ、リス、テンなどがグルツとたき火の周りを囲んでいます。小さな動物たちは大きな獣たちの頭や肩の上に乗っています。みんな無言で火を見つめていました。動物たちの壁の谷間に、子どもが一人すわっています。あれが仁吉じいさんなのでしょう。松の木を背に、しんみような顔をしてあぐらをかいてすわっています。その時、松の木の上方から

ホウ

ホウ

とフクロウが鳴きました。仁吉が見上げていると、画面が変わって、たき火の向こうに立っている山猫を映し出していました。山猫はしんみような顔で湯気を立てているナベに向かつて三度おじぎをすると、うやうやしく両手で何かを差し上げました。クマザサです。いきなり山猫はそのクマザサをナベの中に突っこむと、すぐ取り出して正面に向かつてしずくを払いました。仁吉のすわっている方向です。動物たちの壁がドツとくずれて熱いしずくをよけました。山猫は左右と後ろ正面の三方向にも同じことを行いました。そのたびに壁がくずれてはまたもとにもどっていきます。動物たちは、体についたしずくは振り落とさないでなめ合っていました。仁吉のとなりにしゃがみこんでいた母ザルが、子ザルに「いいかい、これはゴリヤクがあるんだからね」と言い聞かせていた時

ホウ

ホウ

ホウ

ホウ

とフクロウがまた鳴きました。するとたき火の向こうに、今度は弓矢を手にした山猫が映し出されていました。山猫は正面に向かってまた三度おじぎをすると、弓に矢をつがえて射るしぐさをしました。弓矢といっても細竹で作った子どものおもちゃのようなものです。それからじっさいに山猫は正面に向かって矢を放ちました。矢は仁吉の頭上の松の木の枝の方に飛んで来ました。鳥のはばたきがいつせいにしました。松の枝にとまっている鳥たちが矢をよけたのでしょう。山猫はあとの三方向にも同じように矢を射ました。

仁吉、よく見ておくんだよ

女の人の声が画面に流れました。仁吉にもその声が聞こえたらしく、しきりに暗い夜空を見上げています。そこでまた画面が変わりました。たき火の上のナベはかたづけられ、たき火の向こうにリングの木箱がさかさに置かれていました。その上に欠けた植木鉢が置いてあります。何だか祭だんのふんいきです。ヒヒが一頭現れました。堂々たるヒヒです。祭だんに向かって三度おじぎをすると、うやうやしく植木鉢を手にとりました。ヒヒは片手を鉢の中につっこむと、中の物をわしづかみにして放り投げました。

ありがたや
ありがたや

動物たちの声がいつせいにして、我さきに地面に落ちた物を拾い始めました。仁吉の足もとにも二つばかりころがってきました。アメとせんべいでした。仁吉が手をのぼそうとすると、となりの子ザルがす早くつかんで口にほおばりました。子ザルたちはキヤッキヤ、キヤッキヤ言って取り合いをしています。その時ドツと笑い声が起りました。ひよつとこが現れて、ヒヒにちよつかいを始めたのです。

ひよつとこは、ヒヒがおじぎをしたり植木鉢の中のお菓子を投げようとするたびに、木の枝でヒヒをつついたりしてじゃまをしています。ヒヒがおこつてこらしめようとすると、ひよつとこは面をかきかき逃げて行くのですが、すぐにもどってきてまた悪さを始めるのでした。誰がひよつとこの面をつけているのでしょうか。そのズングリした体とハンテーンもようからみて、どうやらさきほどから姿の见えない山猫のようです。ヒヒと山猫のこのユーモラスな光景に、なめとこ山のなめとこ広場はなごやかなふんいきに包まれてきました。動物たちはみんな笑っています。仁吉も笑っていました。もう投げるお菓子がなくなつたのでしょうか。ヒヒがまたうやうやしく植木鉢をリンゴ箱の上にもどした時

ホウ
ホウ

ホウ
ホウ

ホウ
ホウ

とフクロウがまた鳴きました。すると、たき火の向こう側の動物たちの壁が大きく割れてヒヒと山猫が一瞬のうちに姿を消し、そこからお面をかぶった動物たちが一匹ずつ登場してきました。最初は翁おきなです。つけているのはサルです。次は爺じいです。ノツソリ、ノツソリ歩いて、大きなクマです。その後ろからシカが烏天狗からすてんぐの面をつけてゆうがに入ってきました。それから布袋ほていです。鼻の上にチョココンと面をのせています。タヌキに似ていますが、しっぽのシマもようからみてアライグマでしょう。その後、見るからにおそろしい異形いせいようの面をつけてヒヒがノツシ、ノツシと入って来ました。ヒヒはやはりかんろくがあります。

最後がおかめでしたが、おかしなことに穴のあいたザルをさかさにして腹にゆわえつけています。きつとタヌキにちがいありません。

最後のタヌキが太鼓腹のザルの底をポンポンたたきながら入って来ると、お面をつけた動物たちはたき火の周りを踊り始めました。動物たちの壁もくずれてみんな踊り出しました。母ザルたちは太鼓腹のタヌキのところへ行って、しきりに腹をこすりつけています。その時松の木から鳥がいつせいに飛び立つと、鳴きながら広場の上をまわり始めました。空には満天の星が輝いています。それがあいずだつたのでしょうか。踊っている動物たちもそれぞれに叫び出しました。広場を囲むカヤのしげみからは、虫たちの鳴く声も聞こえてきました。鳥の鳴き声と獣の叫びと虫の音ねと——秋の夜の一大交響楽でした。

仁吉

お母さんはいつもね

こういう世界に

いるんだよ

女の人の声がまた聞こえました。仁吉は星空を見上げて大きくくうなずくと、立ち上がり

ました。踊りたくてウズウズしているようです。その時仁吉の前に、赤い顔をした山猫がフラフラした足どりで現れました。

「仁吉、よく来てくれたぞ」

山猫はそう言うと、ムンズと仁吉の手をつかみました。山猫のツメがあたったのでしようか。仁吉はちよつとしかめつつらをしましたが、山猫はそんなことはおかまいなしに「これ飲んでくれど」と言いながら、仁吉にさかずきのようなものをさし出しました。夏ミカンを半分^に切つて中をくりぬいたものです。仁吉はちよつとちゅうちよしましたが、山猫からさかずきを受け取るといっきに飲みほしました。「フー」と飲み終わつて肩で大きく息をついたとたん、仁吉は意識を失つてその場にへたりこんでしまいました。

画面が変わつて朝のなめとこ広場を映していました。昨夜の宴^{うたげ}がウソのように広場は静まりかえっています。広場の中央、たき火がたかれていたあたりには、曼珠沙華^{まんじゅしゃげ}が咲きみだれていました。向こうの山の端から、朝日が上り始めました。日の光は、一直線に曼珠沙華の花と松の木にさしてきました。松の木の根もとに子どもが一人つつぷしていました。仁吉です。仁吉の顔が大写しになりました。朝日に照らされたほおに、涙が光っていました。画面はまた上る朝日を映し出しました。

「仁吉じいさんは、子どもの時にお母さんを亡くしていたんだね・・・」

遠くからお父さんの声がしました。その声でチイちゃんは、なめとこ広場からスクリーンの前に引きもどされました。お父さんがついたてのわきで、足を組んだしせいでチイちゃんを見つめていました。

「仁吉じいさんのお母さんがなんで死んじゃったのか、お父さんも知らないんだよ。おばあちゃんからもそのことは聞かなかったし・・・」

お父さんの声には、チイちゃんを気づかっているようすがうかがえます。

「チイ、お父さんはね、生まれた時にはもうお父さんがいなかったんだ。仁吉じいさんは戦争で死んで、お父さんは戦争が終わってから生まれたんだよ。おばあちゃんもたいへんだっつたらうなあ。あの食糧難の時代に、女手一つでお父さんを育てなければならなかったんだからね・・・。お父さんが三つになった時、おばあちゃんは再婚したんだよ。相手は町の商家のダンナさんだった。新しいお父さんはお父さんに冷たくあたるようなことはなかったけれど、お父さんはどうしてもなじめなかったなあ・・・。お父さんは家ではないつも寂しかった。仁吉じいさんさえ生きてればって、ずっと思ってたよ。なんで戦争なんかで死んじゃったんだ！って、ずっとうらんでたんだ・・・。でも今はちがうよ。お父さんは仁吉じいさんを誇りに思うね」

お父さんはそう言うと、リモコンをスクリーンに向けて指でボタンを押しました。画面

が変わって、うつそうとしたジャングルが映し出されました。

「仁吉じいさんはおばあちゃんと結婚して一月後に兵隊にとられて、南洋のパラオというところに送られたんだよ。小さな島の守備隊にね」

画面の下の方に「パラオ」という字が出ました。

「もうそのころには日本も負け戦で、島の守備隊もジャングルの中でアメリカ軍にほういされてしまったんだよ。そこで仁吉じいさんは水汲みにやらされて、戦死してしまったんだ。ホラ、くぼ地が見えるだろう。あそこでね」

なるほど、お父さんから指さされた画面の中央は、地面がくぼんでいました。あそこに水がわいているかたまっているのでしょうか。チイちゃんはそれは分かりましたが、さきほどから画面にボーツとクモの巣のようなものがかかっているのが気になっていました。すると、ジャングルの絵が少しずつポケてきて、クモの巣のようなものに焦点が移ったのです。それは機関銃の照準器でした。鉄カブトがわきからのぞいて兵隊の横顔が映りました。ガムをかんだアメリカ兵でした。画面の焦点は、またジャングルにもどっていききました。

「守備隊は食糧も水もとぼしくなってきた。それで下級兵士から順に一人ずつ水汲みにやらされたんだよ。あそこしか水場がなかったんだ。もちろんアメリカ軍にもそれは分かっていたから、機関銃をすえつけて待ちかまえていた。夜はこうこうとサーチライトで照ら

してね。まるでフクロのネズミさ。水汲みにはそれに、食糧の口べらしの意味もあったんだよ。日本軍がどうしてこうふくしなかつたかというと、敵の捕りよになるよりはギョクサイして死ぬようにって教えられていたんだね。あの当時は、死ぬことが美德だったんだよ。それに人を殺すことも……。仁吉じいさんは、その水汲みに自分から志願して最初に死んでいったんだ」

くぼ地のふちに生えているサトイモのような草の葉が大きくゆれました。葉のかげから、五分刈り頭の日本兵の顔がのぞきました。仁吉じいさんなのでしょう。じつとこちらをうかがっています。それから物音をたてないようにしながら出てくると、くぼ地の底へ下り始めました。手にはバケツを持っていました。

その時、バリバリバリ・・・と生木なまきをさくようなかわいた音がしたかと思うと、仁吉じいさんははじき飛ばされてくぼ地の斜面にたたきつけられました。一、二度体がけいれんした後、動かなくなりました。口を開け、目をむいています。やがて、ハチの巣のように銃弾を撃ちこまれた胸から、血がにじみ出てきました。画面には姿の见えないアメリカ兵たちがペチャクチャしゃべっています。笑い声も聞こえます。チイちゃんは、仁吉じいさんの死体に目がクギづけになってしまいました。サトイモのような草のかげから仁吉じいさんが現れて撃たれて死ぬまで、ほんの一瞬のようにも思えましたし、限らない時間が流

れているようにも思えました。お父さんが口を開きました。涙声でした。

「仁吉じいさんがどうして自分から死ぬと分かってる旅に出たのか、お父さんは理解できなかった。それでこの場面をくり返しくり返し見たんだよ。そうしたら、死ぬ時の仁吉じいさんがうれしそうな顔をしているのに気づいたんだ。チイ、よく見るんだよ。コマ送りでもう一度映してみるからね」

お父さんはそう言うと、リモコンをそうさしました。絵が巻きもどされて止まりました。仁吉じいさんが機銃そうしやをあびた場面が大写しになりました。仁吉じいさんの顔は苦痛でゆがんでいましたが、次のコマでは、晴れやかな顔つきに変わっていました。その表情を浮かべたまま仁吉じいさんの体は泳ぐようにして倒れ、それから顔は無表情になりました。

「仁吉じいさんは、とつてもやさしい人だったんだね……」

お父さんが静かに語りかけてきました。

「お父さんが子どものころ、おばあちゃんからよく『おまえのお父さんは、戦争へ行っても銃の引きがねが引けるような人じゃなかった』って聞かされてたけれど、お父さんもそう思うな。仁吉じいさんは、目をつぶりながら敵兵に向かって銃を撃っていたのかも知れないね……。きつと、お母さんの待つてるなめとこ広場に一日でも早く行きたかったんだらうね……。子どものころのお父さんは、仁吉じいさんのそのやさしさが理解でき

なかったんだ。ここに来て初めて分かったんだよ……。チイ、おまえも強い人よりは、やさしい人になるんだよ」

チイちゃんは、言葉がつまって何も言えませんでした。お父さんはそつと涙をぬぐっているようでした。

「さあ、次に移ろう」

お父さんが言いました。

海です。画面いっぱい海が映りました。こい青色をしています。チイちゃんはこんな澄みわたった海を見ることがありませんでした。画面の中央に、海の底からボーツと黒いものが浮かび上がってきました。始めは何だかよく分からなかったのですが、海面まで浮き上がったのを見ると、ウミガメでした。緑色のこうらをしたアオウミガメです。ウミガメは一度海面に顔を出してプーツと息をはくと、手足を動かして泳ぎ始めました。青い海原をウミガメはゆうゆうと泳いで行きます。海の色が少しずつ変わってきました。ぐんじょう色からコバルト・ブルーへ、そして今では透明な水になって、海底のサンゴしようが手に取るように分かります。海岸近くになったのでしょうか。岸に寄せる波の音も聞こえてきました。

画面が変わって、広い砂浜が映し出されました。波打ちぎわに静かに波が寄せては返し

ています。砂浜の奥にはヤシの木がしげり、うっそうとしたジャングルが続いていました。画面に大きくウミガメが映りました。さきほどのアオウミガメなのでしょう。カメは浜に上らずに、波打ちぎわで止まってしまいました。カメのこうらを波が洗っています。カメは目をつぶりました。

「仁吉じいさんは戦死して、白木しらぎの箱になつて帰つてきた。骨箱こつばこと言つてね、ふつうは死んだ人の骨や髪の毛が入ってるものなだけけど、仁吉じいさんの箱には小石しか入ってなかった、つておばあちゃんが言つてたよ。仁吉じいさんの骨は、今もパラオのジャングルの中に埋もれているんだね」

お父さんの話を聞きながらチイちゃんは、このウミガメが仁吉じいさんの魂をむかえに来たのではないかと思いました。すると、画面からカメが消えました。静かな海辺です。画面をみつめていたチイちゃんは、波打ちぎわに何か動くものを見ました。ヤドカリでした。動いては止まり、動いては止まりしています。ヤドカリに気づくと、ほかの小さな生き物たちの姿がいつせいに目に入つてきました。カニがハサミを振っています。二枚貝が砂の中からモゾモゾ出て来ました。波打ちぎわだけではありません。ヤシの木の根もとには、ヤシガニたちが群れています。ジャングルのへりの下草の葉の裏では、ナナフシが風にゆれていました。数えきれないほどの生命いのちです。遠く、遠く、音楽おんがくが聞こえてきました。

静かにうち寄せる波の音と重なるようにして、ひそやかに流れています。チイちゃんはなめとこ広場の祭りの夜を思い出しました。あの時は、鳥と獣と虫たちの合唱でした。今は、そよ風のように静かな調べです。

「戦争は——」

お父さんがスクリーンを見ながら静かに語り始めました。画面では、浜辺のシーンとBGMのように流れるひそやかな音楽が続いています。

「人類にとつて必要悪だと言った人がいる。人口の増加を押さえるためにね。でもそんなことはゼツタイにないんだよ。どんな生命いのちも、与えられた生をまっとうしなければいけないんだ。お父さんはここに来て初めて分かったよ。人間にとつて、ほんとうに自分の生命をいつくしむことが、ほかの人も自分と同じようにたいせつにすることになるんだね……。仁吉じいさんは死んでからここへ送られて、苦しみに苦しみぬいたと思うよ。生を生ききれなかったからね……。お父さんもここへ来て一年。少しずつ少しずつ自分の心を見つめてきて今日が最後の日なんだ。仁吉じいさんのビデオの最後のシーンを見たら、別の世界に旅立つて行くんだよ……。その前におまえにね、お父さんのことを話しておきたいんだ。これは初めて話すことだと思うけど、チイ、聞いてくれるかい？」

お父さんは身を乗り出すようにしてチイちゃんを見つめていました。チイちゃんはウン、

というようにうなずきました。お父さんも一、二度うなずき返してから話を続けました。

「戦争が終わってお父さんは生まれた。さつきも話したけれど、お父さんが三つの時おばあちゃんは再婚して子どもを二人産んだんだ。二人とも女の子だった。お父さんの妹——おまえにとってはおばさんにあたる人だね。新しいお父さんはお父さんに冷たくあたるようなことはなかったけれど、お父さんはどうしてもなじめなかった。おばあちゃんは新しいとつぎ先でいつもえんりよがちにしていた。代々続いた商人の家でね、おしゅうとめさんも口やかましかったし……。おばあちゃんは三人の子どもを分けへだてなく愛情をそそいでたと思うけれど、子どものころのお父さんには、おばあちゃんが二人の妹だけかわいがっているように見えただ。家ではいつもね、居場所がないように感じていた。自分がいなくなればみんな喜ぶだろうってね、ずっと思っていた。それで、中学を卒業するとすぐ家を出て働き始めたんだよ。こっちに來て町工場に勤めた。十五の時にね。」

それからお父さんはずっと働いてきたなあ。いくつか町工場を転々としながら、夜は工業高校の夜学に通ってたんだよ。昼つかれた体を運んでいくんだからタイヘンだったけれど、お父さんはそこでね、機械関係の技術を身につけてもつとイイとここで働きたかったんだ。何とか四年で高校を卒業すると、運よく造船会社に就職できた。当時は大型のタンカーを何せきも造ってて、造船会社では人手がたりなかったんだ。お父さんはそこで二十年以

上働いた。お母さんと知り合ったのもその職場でね、お母さんは事務員をしてたんだよ。お父さんとお母さんは結婚した。おまえとお兄ちゃんが生まれた。二人ともじょうぶに育ってくれた。お父さんは会社からお金を借りて、せまいながらもマイホームを建てた。おまえが生まれる前はね、お父さんたち三人はとなり町のアパートに住んでたんだよ。何もかもうまく行ってるように見えた。お父さんには何の不満もなかったし……。

その時造船会社をフキヨウが襲ったんだよ。フキヨウって言うのはね、仕事がなくなることなんだ。船が造れなくなっただよ。今度は人があまってしまった。たくさんの人が会社をやめていった。お父さんはね、造船とはオカドちがいの自動車工場に回された。それでも昔の仲間からは『おまえはまだいいよ。仕事があるからな』って言われたけどね。

お父さんが行ったところは、自動車工場といっても自動車の部品を作る下うけ工場だった。でも、お父さんが中学を出て町工場で働いていた時とはずいぶんようすがちがってね——あのころは一人一人センバンを回してたもんだよ——今では大型のプレス機械が次々に製品を作ってくんだよ。だからお父さんたちはそれを見て、時々調子が悪くなったら機械を止めて調べてみるだけでよかったんだ。

お父さんはいろんな不安におそわれた。はたしてこの仕事がいつまで続くんだろう、またもとの造船会社にもどれるんだろうかってね。慣れない仕事で、職場の人間関係も一か

ら作らなければならなかったし、なにしろ給料が減っちゃったからねえ。家のローンもまだまだ残っていたし、それにおまえたち、チイちゃんとお兄ちゃんが中学生と小学生でこれからいろいろお金がかかるっていう時だったからね……。プレス機械がものすごい音をたてて上下に動きながら製品を作っていくのをボンヤリ見つめながら、お父さんはよくそんな物思いにとらわれてしまったんだよ。そんな時事故にまきこまれちゃったんだ。プレス機を止めて調べようとした時、機械のそうさをあやまってはさまれてしまった。内臓はれつでお父さんは即死だった……」

チイちゃんは、お父さんの遺体が家に帰ってきた時のことを思い出しました。お母さんがひつぎのフタを開けると、一目見て泣きくずれてしまいました。お兄ちゃんとチイちゃんには会わせてもらえませんでした。それほどお父さんの遺体がくずれていたのでしょうか。告別式が終わって焼き場に向かう前、チイちゃんはお父さんと最後の別れをすることができましたが、その時にはお父さんの体はいちめんの菊の花に埋まっていました――

「お父さんはくやんでもくやみきれなかったよ。おまえたち二人がこれからだっていう時に死んじゃったんだからね……。ここへ送られてきても、お父さん、最初の数ヶ月は棒立ちだった。それから自分で自分をはげますようにして、少しずつ自分の心を振り返り始めたんだ。そうしたらスクリーンに仁吉じいさんの姿が映り始めた。そのビデオを見な

がらね、お父さんは、自分を苦しめていたのがお金とかそういう現実的な不安だけじゃなかったことに気がついたんだよ。もちろんその方が大きかったけれど。

お父さんを苦しめていたのはね——いろいろおまえたちのこれからのことを考えていた時に、二人が大きくなつていく、その時お父さんはチイちゃんとお兄ちゃんに何が贈れるんだらうって思い始めたんだよ。なんとか大学まで行かしてやるとか家を残してやるとかそういうことじゃなくてね、もつとたいせつなもの、二人の心に何がやれるんだらうかって思い始めたんだ。そうしたら、何もないんじゃないかって気がしてきたんだよ。

お父さんは中学を出てからずっと働きづめだった。それは自分でも誇りに思ってるよ。でも、何か欠けていたんだ。お父さんはね、仁吉じいさんから何かたいせつなものを手渡されないでできてしまったんだよ。それでおまえたち二人に何もやれるものがなかったんだね。もちろんお父さんが生まれた時には仁吉じいさんは死んでいたからじっさいに何かを受けとることなんかできなかつたけれど、でも、お父さんが望みさえすればそれはいつでも手の届くところにあつたんじゃないかって思うと、居ても立ってもいらなくなっておばあちゃんに会いに行ったんだよ。おととしの冬、みんなでおばあちゃんのとこへ帰省しただろう。おまえたちにとつては初めてだったと思うけど、お父さんにしても結婚して以来だったんだよ。お父さんはね、あまりイナカには帰りたくなかつたんだ……。

あの時はじつはA子おばさんからね、おばあちゃんがガンでこの先もう長くないから死ぬ前に一目会つといたらつて電話が入つてたんだ。それでおまえたちも連れてつたんだけど、お父さんはおばあちゃんから仁吉じいさんのことをいろいろ聞きたかつたんだよ。お父さんが子どものころ、おばあちゃんはほとんど話してくれなかつたからね」

チイちゃんは、床にふせつていたおばあちゃんの姿を思い出しました。おばあちゃんは枯れ木のようにやせ細り、うつろな目を向けていました。もう人の区別がつかないのか、お父さんが枕もとにすわると

「仁吉、よく帰つてきたねえ」

と言いながら、骨と皮になった手でお父さんの髪なでしていました。それから二ヶ月後です。おばあちゃんが亡くなったのは――

「お父さんはくやんでもくやみきれなかつたよ。おばあちゃんからは何も教えてもらえず、おまえたちには何も残してやれないで死んじやつたからね、そのあと事故で……。でもね、ここへ来れば仁吉じいさんに会えるんじゃないかって気がしてたんだ。それがゆいいつのなぐさめだった。おじいちゃんもお父さんも、生ききれなかつた人の一人だからね。でもここへ来てみると、仁吉じいさんはもう別の世界へ旅立つた後だったんだよ。お父さんは一時はゼツボーじょうたいになってしまった。それから少しずつ少しずつおじい

さんの残してくれたビデオを復元してきたんだよ。一年かけて。

前置きが少し長くなっちゃったかな。じゃあ、最後のシーンを映すからね。お父さんもまだ見てないんだよ」

お父さんはスクリーンの方を向くと、リモコンのボタンを押しました。チイちゃんは心なしか、悲しくなってきました。画面全体に緑のモヤのようなものが映し出されました。中央の部分だけ明るい黄緑色をしています。焦点が合っていないようです。やさしい声が画面から流れてきました。

待っていたのよ

一年間も

たとえ二、三週間の

短い生命いのちでも

この日が来るのを

画面が赤いモヤに変わりました。今度は少しずつ焦点が合ってきました。海の上に今のぼつてきた朝日でした。空と海を燃える炎でそめながら、少しずつ姿をあらわしてきます。

海の上に、一条の光の道ができました。

画面がまた緑のモヤにもどりました。画面全体が明るく輝いています。焦点が合ってきました。それは、緑の葉に囲まれたツバキのつぼみだったのです。上る朝日の光を受けて、ツバキのつぼみが輝いています。やがて一枚一枚花びらが開いてきました。静かな音楽も聞こえてきました。波の音でした。花が咲き終わると、ズームレンズを通して見るようにツバキの花が少しずつ小さくなって、背景が見えてきました。

断がいの上に一面、ツバキの花が群れ咲いていました。断がいの下には波がうち寄せて白い波しぶきを上げています。断がいの中ふくに、白い着物を着た人を背負った人間が立っていました。カメラがその人に近づいていって、断がいの下の岩場の方から映し出しました。白しようぞくに身を包んだおばあちゃんを背負ったお父さんだったのです。

思わずチイちゃんはついたてのわきにすわっているお父さんの方を見ました。お父さんは身じろぎもしないで画面を見えています。スクリーンに映し出されたお父さんは、今日のように髪も長くなくブショウひげも生やしていませんでした。亡くなる前によくはいたベージュのスラックスとベージュのYシャツという服装です。お父さんにしよわれているおばあちゃんは、おととしの冬みんなで帰省きせいした時にチイちゃんが目にしたように、枯れ木のようにやせ細り髪はのびほうだいでしたが、目は澄んでいて遠くを見つめています。

た。おばあちゃんの耳の上にはツバキの花が一輪さしてありました。海風に、おばあちゃんの髪の毛と白しようぞくのすそがゆれています。お父さんも、おばあちゃんと同じ澄んだ目をして遠くを見つめていました。

仁吉！

いま

行ぐどー

いきなりおばあちゃんがあらん限りの声で海に向かって叫ぶと、髪にさしていたツバキの花を手にとって海に投げました。ツバキの花は舞うようにして落ちていきます。岩の間の白い波しぶきを上げている海面に落ちようとした瞬間、海の中から白い手が現れてツバキの花をつかみました。その手は、ツバキの花を受けとったことを示すかのように一度にぎったこぶしをつき出すと、すぐに海の中に没してしまいました。一瞬のできごとでした。

断がいの中ふくに立つお父さんの姿が映し出されました。白しようぞくのおばあちゃんはお地蔵さんに変わっていたのです。胸に赤い前だれをかけていました。足もとの岩場の方を見下ろしていたお父さんは、顔を上げると朝日を見つめました。日に照らし出され

たお父さんの顔は明るく、ひきしまっていました。お父さんは確かな足どりで断がいを上り始めました。一歩ずつ足もとをたしかめるようにして、ツバキの群らくの方に向かって行きます。またズームレンズで見えるように、お父さんの姿が小さくなっていきました。うち寄せる波、岩場、断がいの、ツバキの群れ・・・お地藏さんを背負ったお父さんは、もう小さな点になっていました。

画面は変わって、ぬけるような青空に輝く太陽を映し出しました。二人ともしばらく無言でした。それからお父さんが口を開きました。明るい声でした。

「チイちゃん、ありがとう。おまえが今日いっしょに見てくれたおかげで、お父さん、これから歩いて行く道が分かったよ。仁吉じいさんは、おばあちゃんからツバキの花を受けとって別の世界へ旅立って行ったんだらうね。この世界に送られてきた人たちはみんな、そうして旅を続けていくんだ・・・。お父さんも仁吉じいさんからツバキの花を手渡されて、それをまた誰かほかの人に伝えていく・・・。そうやって一つの輪のように、どこまでも続いていくんだらうね・・・。チイ、ありがとう」

お父さんはそう言うと、プルルの方に向きなおりました。

「プルル、おまえにも礼を言わないといけないね。よくチイちゃんを連れてきてくれたよ。チイ、覚えているかい？去年、ホラ、よくポチを連れて動物園へ行っただらう。あの時生

まれていた子象がプルルなんだよ。プルルはおまえを覚えていてくれたんだ」

チイちゃんは思い出しました。お父さんが亡くなる前、よく日曜日にはポチの散歩がてらに近くの市立動物園へ行つたものでした。たしかに生まれたばかりの子象を一、二度見たきおくがありますが、子象は母親のかげに隠れていてよく見えなかったのです。お父さんが死んでからはここ一年、動物園へは一度も行つてませんでした。日曜日にはお母さんに連れられて教会に行くようになったのです。それでもポチの散歩は、学校から帰つたチイちゃんが一人でしていました。

「ほんとうに今日、お父さんが旅立つという日に、プルルがおまえを連れてきてくれて……おまえと話せるのは今日しかなかつたんだからね……。プルル、ありがとう」

チイちゃんもほんとうにプルルに感謝したくなって、足もとにねそべっているプルルの頭をなでてやりました。プルルはチョット鼻先を持ち上げてみせました。

「さあ、チイ、おまえももう帰らなさい。お母さんが心配するといけないから」

お父さんは立ち上がると、リモコンをそうさしてビデオを消しました。スクリーンには、また褐色の幕のようなものがかけられました。チイちゃんは腰を上げずにグズグズしていました。これがお父さんと会う最後でしょう。その別れの気持ちと、もう行かなければいけないんだという思いが入りみだれていたのです。お父さんがチイちゃんのかたわらに立つて

「さあ、おまえたちを送って行くよ」

と言うと、チイちゃんの背中に手をやりました。温かな手でした。チイちゃんは体ぜんたいでそれを感じると、石のベンチから立ち上がりました。それを見てプルルもゆっくり体を起こしました。

広場を出て、来た時と同じように棒くいになった人たちの間を通りぬけて行きました。チイちゃんは、この人たちもみんなツバキの花を受けとって明るい世界へ旅立てますように、と願わずにはいられませんでした。

階段のところに来ました。前に行くお父さんの足に鎖でつながれた鉄の玉が、フーセンのように浮いているのです。それを見てチイちゃんはホッとしました。階段を上りきって踊り場に立つと、岩のとびらが向こう側に開いていきました。

とびらの向こうに現れたのは、下水管の通路ではありませんでした。切り立ったがけが左右からせまっついていて、その間を細い道が続いていました。チイちゃんはお父さんの後についていきました。人ひとりがやっ通れるようなせまい道です。プルルは岩に体をこすりつけながらなんとか歩いてきます。見上げると、遠くに一すじの空が見えていました。ぐんじょう色をしています。足もとはボンヤリと分かるていどの明るさでした。

岩はだをぬうようにして歩いて行くと、視界がいつきに開けて海に出ました。星のない

空の下に海がひろがっています。海と分かったのは、さきほどから潮のかおりがただよっていたからです。海には波一つたつていません。遠く、水平線の一点が真珠のように輝いていました。そこからチイちゃんたちが立っている岸へきまで、一すじの光の道ができていました。お父さんが振り返って言いました。

「チイ、おまえはお父さんが死んでからふさぎがちだけど―」

（お父さんは何でも知ってるんだ！）

チイちゃんはハツとしました。

「お父さんはいつもおまえのそばにいるからね・・・おまえの胸の中に・・・。さあ、あれに乗って行きなさい」

お父さんが岸へきの下を指さしました。岸へきから海に石段がおりていて、そこに大きな円形をした島が浮かんでいました。島かと思っていると、海の中からニュツと顔をつき出しました。ウミガメだったのです。プルルは石段を下りてウミガメに乗りこみました。カメの背中には六角形のもんようがあつて、すべる心配はないのです。お父さんが、チイちゃんをうながすように温かい手でチイちゃんの背中にふれました。チイちゃんも石段を下りてウミガメの背に乗りこみました。

「プルル、頼んだぞ！」

背中でお父さんの声が出て、プルルが鼻を持ち上げました。チイちゃんが振り返ると、そこにはもうお父さんの姿は見えませんでした。切り立ったがけが一つになって、チイちゃんたちの歩いてきた道もなくなっていました。カメが岸を離れました。その時初めてチイちゃんは、お父さんとひと言も言葉をかわさなかったことに気づきました。

(お父さん、さようなら)

心の中で叫びながら、チイちゃんはお父さんに手を振りました。

ウミガメは、遠くの輝く島からさしている光の道にそって力強く泳いで行きました。静かな世界です。ウミガメが水を切って進む音しか聞こえません。カメのつくる波は、この広い海のどこまでも伝わっていくようでした。

カメが島に近づくにつれて、空の色が変わってきました。お父さんと別れた時は星のない暗い夜空でしたが、だんだんとルリ色になり、今ではぬけるような青空がひろがっていました。島が近づきました。近くから見ると、太陽のように目をそらさなければいけないほど輝いているわけではありませんでした。真珠が海に浮いたようなのです。ウミガメが、ザツ、ザツという音をたてて砂浜に乗り上げました。海の色は、最後まで暗い色をしていました。

チイちゃんもプルルの後について砂浜に下りました。砂を手にとってみると、特別な砂のように見えません。白い砂でした。それが数多く集まると、光り輝いて見えるのでしょ

う。この島は、白い砂がたい積して砂丘のように盛り上がっているのです。チイちゃんにはにぎりこぶしを作って指の間から砂を落としながら、フト、タエちゃんにこの砂を持ってやってやら喜ぶだろうなあ、と思いました。ランドセルの中に給食用のコップが入っています。あれにつめてけば持ち帰れます。そう思っただけで肩に手をやったチイちゃんは、ランドセルがないことに初めて気がつきました。

きおくの糸をたぐり寄せてみました。家を出る時はもちろんランドセルをしょって出ました。学校では下ろしていません。ああ、そうです。教会で窓をのぞいた時に肩から下ろしましたが、またちゃんとしよいました。そうすると、お父さんに会ってからでしょうか。チイちゃんは思い出しました。スクリーンの前のベンチに腰かけた時、ランドセルを肩からはずして足もとに置いたまま忘れてきてしまったのです。ランドセルの中には、教科書やノート、ふで箱が入っています。でもチイちゃんは、少しも惜しいとは思いませんでした。教科書は先生に言えばもらえるでしょう。ノートやえんぴつはお金を出せば買えます。今日は、それよりもっとたいせつなことをお父さんから教えてもらったのです。この砂はこの島の上にあるから光り輝くのでしょう。チイちゃんはそう思いなおして、砂を持ち帰るのをやめました。

(タエちゃんには、帰ってからおみやげ話をしてあげよう)

その時プルルが鼻先で軽くチイちゃんの肩をたたきました。チイちゃんが振り返ると、プルルは鼻を高く空に向けてしきりに前足を持ち上げています。プルルは何をしているんだろうとチイちゃんがいぶかしく思っていると、プルルが階段を上り始めました。とうめいな階段が空に通じているようです。チイちゃんもあわててプルルの後について上り始めました。

始めは前を行くプルルの足もとを見て一段ずつけんとうをつけて踏んでいきましたが、そのうちにチイちゃんは、足を下ろしたところが階段の踏み板になることに気がつきました。砂浜から十数段上ったあたりでしょうか。チイちゃんはカメのことが気になって、立ち止まって下を見てみました。ウミガメは波打ちぎわから砂浜に上がり、卵を産んでいました。大きな白い卵が二つ、お尻のところに見えました。チイちゃんは思わず目をつぶって胸の前で手を合わせました。

目を開けると、プルルが振り返ってチイちゃんを待っていました。チイちゃんはまたプルルの後について上り始めました。どこまでも澄みわたった空が続いています。風はありません。物音一つない静寂せいじやくの世界でした。どれくらい階段を上ってきたことでしょうか。チイちゃんは足がつかれてきたので立ち止まりました。プルルに「とまって」と言おうとした時、プルルも立ち止まりました。階段に腰を下ろしたチイちゃんの耳に、遠く、遠く、ひそやかな音楽が聞こえてきました。チイちゃんはあたりを見回しましたが、その音楽は

空全体から聞こえてくるようです。同じメロディーがくり返されています。チイちゃんは、どこかで聞いたことのある曲だな、と思いました。そうです。バラオの海辺を映した画面で、BGMとして流れていた曲です。チイちゃんがそれに気づいた時、音楽に合わせて歌声が聞こえてきました。それはこんな歌を歌っていました。

一、ツバキの花が咲く時には

その花びらを数えてごらん

一枚また一枚と

人は生まれ

人は生きる

二、ツバキの花が咲く時には

蜜を求めて小鳥がつどう

一羽また一羽

鳥は歌い

鳥は踊る

三、ツバキの花が散る時には

風に吹かれて海に落ちる

一輪また一輪と

人は帰る

海の中へ

何回かくり返し歌われたので、チイちゃんはすぐに歌詞を覚えてしまいました。歌いやすいメロディーでやさしく包みこむような声だったので、チイちゃんもいっしょに歌いたくなりました。プルルの方を見ると、階段にしゃがみこんでいたプルルは、イタズラっぽい目を向けてタクトを振るように鼻をゆり動かしています。前奏が始まりました。チイちゃんも声を合わせて歌いました。プルルが指揮をとりました。

チイちゃんが（一人で歌えるかしら）と思った時、歌声はやんで音楽だけになりました。チイちゃんは伴奏に合わせて二度歌いました。もうダイジョウブです。家でお母さんにも聞かせてあげられます。チイちゃんがそう思った時、音楽がピタリとやみました。とつぜん向こうの方に白い雲のかたまりが現れました。ズンズン、ズンズンこちらに向かつて進んできます。だんだん大きくなってきました。ワタ菓子のような雲です。チイちゃんどプ

プルルがすわっている空の階段の直前まで来て二人を飲みこもうとした時、雲はわきにそれていきました。チイちゃんはうずまく雲の中に、お父さんとお母さん、それにお兄ちゃんとチイちゃんの四人がチャップ台を囲んで食事をしているのを見ました。みんな楽しそうに笑っていました。その光景も一瞬で、すぐにうずまきの中に飲みこまれると、雲のかたまりはあつという間に遠ざかって見えなくなってしまうました。チイちゃんは悲哀で胸がいつぱいになりました。いつまでも雲の消えた方を見ていました。

プルルが立ち上がるけはいがしたのでチイちゃんが振り向くと、いつの間にかチイちゃんの顔のすぐ横にランプが下がっていました。ランプはつりひももなくそこに下がっていたのです。上の階段からプルルが鼻をつき出して、チイちゃんの顔にフツ、フツと息を吹きかけました。二つの耳をバタバタさせています。チイちゃんがランプとプルルを見くらべて

「プルル、ランプを消すの？」

と言うと、プルルがニッコリして頭を下げました。はじめランプはともってないと思っただのですが、チイちゃんが顔を近づけてよく見ると、小さな炎が燃えていました。この抜けるような青空では、気をつけて見ないと分からないのです。チイちゃんはランプを手にするのが初めてなので、どうやって消したらいいか知りませんでした。スイッチをさがしましたが、それらしいものはありません。ガラスのつつにさわってみると熱くなかったの

で、持ち上げてみました。ランプのしんがむき出しになったので、チイちゃんは大きく息を吸いこむと、フツと息を吹きかけました。

ランプの炎が消えるのと同時にランプもなくなってしまいました。ハスの花が内から開いていくように青空がすべり落ちて、夜の星空が現れてきました。チイちゃんは体がフワツと浮くのを感じたので、あわててプルルのしつぽをつかみました。プルルは鼻を前方に向け、二つの耳をゆっくり動かしながら泳いでいきます。見まわすと、チイちゃんとプルルは星が無数に輝く宇宙の中いたのでした。遠く、赤いオビをしめたように見えるのは木星でしょうか。そのとなりの土星は、ムギワラ帽子のつばのようなリングをしています。天の川も見えました。ミルクを流したような色をしていました。チイちゃんはこの光景に目をうばわれていました。その時後ろの方から星が近づいてくるのを感じました。チイちゃんが振り返ると、地球がゆっくり回転しながら近づいてきたのです。青い海と白い雲——たしかに理科の授業で見た地球です。地球はチイちゃんの体のそばまで来ていました。チイちゃんは手をのばして地球にさわろうとしました。とてもいとおしく感じられたのです。チイちゃんの指先が地球にふれようとした瞬間、じしゃくのNとNを近づけた時のように地球は反ばつしていきよに遠ざかってしまいました。そして今までえがいていたのはちがう軌道の上をまた回り始めました。チイちゃんはとてもいけないことをしてしまっ

たように感じて悲しくなりました。すると急に寂しさにおそわれました。前に行くプルルは、チイちゃんのことなど知らぬ顔顔で泳いでいきます。この広い宇宙の中で、チイちゃんは一人ぼっちでした。チイちゃんの心を分かってくれる人など誰もいないのです。チイちゃんは寂しさと悲しさで胸がいっぱいになって、タメ息のように「ツバキの花の歌」の一節を口ずさんでいました。さきほど、青空の世界で覚えた歌です。

するとどうでしょう。チイちゃんのつぶやきが、この宇宙全体にひびきわたって聞こえたのです。大きな歌声となってはんきょうしたわけではありません。小さな口ずさみそのままに、宇宙のはてまで届いたようなのです。チイちゃんはうれしくなって、もう一度一番の最初の二節を歌ってみました。近くのオリオンやおおぐま、カシオペアだけではなく、はるかかなたのアンドロメダ星雲までチイちゃんの歌声に耳をかたむけているようなのです。チイちゃんは最初から歌いなおしました。三番までとおして歌いました。歌いながらチイちゃんは、この宇宙の星たちがチイちゃんといっしょになって歌っているのを感じました。声には出さないけれども、星たちもみんなチイちゃんに合わせて歌っていたのです。チイちゃんはそう感じると、オンチだと思っていた自分の歌声がどこまでも澄んだものに聞こえてきました。チイちゃんは歌がヘタで、音楽の授業はニガテだったはずですが……。

歌い終わりました。チイちゃんは何だか、大きな人の胸の中で歌ってたような気がしてきました。その時、オリオンの足もとにうずくまっていたウサギの上に、大きなツバキの花が一輪現れました。ツバキの花はチイちゃんに向かってグングン近づいてきます。近づくとつれてだんだん小さくなり、チイちゃんの胸もとまで来た時はふつうの大きさになっていました。チイちゃんは両手でツバキの花を受けとると、胸にそっと押しあてました。ツバキの花は胸の中に入っていききました。

(お父さん)

目を閉じるとお父さんが笑顔で笑っていました。急に体のバランスがくずれたので、チイちゃんは目を開けてプルルのしっぽをつかもうとしました。するとプルルも星空も消えていて、チイちゃんは光り輝くまるいスクリーンの前に立っていました。そのスクリーンは、輪の中を光の粒子が後から後から滝のように流れ落ちているので、一枚の幕のように見えるのです。チイちゃんはその幕の向こうに、プルルのお尻としっぽが消えていくのを見たように思いました。後ろを振り返ることもせず迷わずに、チイちゃんは光の中に足を踏み入れました。

動物園の象のオリの前にチイちゃんは立っていました。オリといっても鉄ごうしのはまったものではありません。むしろ広場と言ったほうがいいでしょう。ぐるっと低いコンクリートベいで囲まれた広場が象の遊び場になっていて、池があつたりヤシの木が植わっているのです。へいの下には深いみぞが掘られていて、象がぬけ出せないようになっていました。いつもなら二、三頭の象がお客にあいきょうを振りまいていますが、今日は一頭もいません。それにお客も一人もいません。チイちゃんは、すぐわきに小さなたてふだが立っているのに気がつきました。それにはこう書いてありました。

ほんじつ
本日は都合により
ひろば
ゾウの広場は中止します
ちゆうし

園長

チイちゃんはそれを読み終わると、へいを回って象の小屋の方に歩いて行きました。夜は象たちはそこで寝るのです。プルルにも会えるでしょう。小屋の裏では、ちようどクマ

デとポリバケツを持った飼育係のおじさんがドアを閉めて出てくる所でした。チイちゃんは急いでかけて行くと

「おじさん、プルルは？」

とたずねました。飼育係のおじさんは、一瞬キョトンとした顔をしたあと答えてくれました。「プルル？今日はね、ゾウの広場は中止なんだよ。けさ子ゾウが死んで、母親がエサを食べようとしななんだ」

（プルルが死んだ！）

チイちゃんは目をつぶりました。広い草原を、プルルがお父さん象・お母さん象といっしょに歩いて行きます。ほかの何頭かの象もいっしょです。チイちゃんが立っているのに気がついたプルルは、チイちゃんの方に歩いて来ました。イタズラっぽい目で笑いかけながら、鼻を振って近づいてきます。チイちゃんの前まで来ると、鼻の先をチイちゃんにさし出しました。ツバキの花が一輪くわえられています。チイちゃんは両手でツバキの花を受けとると、そっと胸に押しあてました。ツバキの花はチイちゃんの胸の中に入っていました。

（プルル、ありがとう）

「おじさん、ありがとう」

チイちゃんはピヨコンと頭を下げるとかけ出しました。もう三月の陽も暮れかけています。お母さんが家で待っているでしょう。心配しているかもしれない。それにおなかも少しへってきました。

（ツバキの花二輪。一輪はお母さん、一輪はお兄ちゃんに）

チイちゃんは心の中でくり返しながら、門に向かつてかけて行きました。体が踊るようです。動物園の中は、もう数えるほどしかお客がいませんでした。門の手前のジャリのかれた広場に出ました。その時向こうから、犬が一匹いきおいよくチイちゃんに向かつてかけて来ました。ポチです。ポチは、子犬の時にお父さんが前の職場の回りようの人からもらってたいせつに育てていました。チイちゃんはお父さんの言葉を思い出しました。

「お父さんはいつもおまえのそばにいるよ。おまえの胸の中に・・・」

チイちゃんの胸にポチが飛びこんできました。

ポランのたんてい団

金曜日、いつものようにボクは幼稚園から帰つてくると、カバンを玄関に置いてかけた。タケシくんとノゾミちゃんをさそつて鈴木のおばあちゃん家へ遊びに行くんだ。タケシくんもノゾミちゃんも家が近くで、同じ幼稚園に通つてるんだよ。金曜日は共同購入の配送の日。配送係の野崎のおじさんが農家の山田さんのところから持つてきた野菜を、鈴木のおばあちゃん家で仕分けをするんだ。ボクたち、その手伝いに行くんだよ。鈴木のおばあちゃんの家はまえ農家をしてたから庭が広いし、山田さんの家があるとなり町にも近いから、仕分けをするのにベンリなんだよね。いつものように鈴木のおばあちゃん家の屋根が見える路地まで来ると、ボクたち横に並んで

イチ、ニー、ノー、サン！

で、かけだした。鈴木のおばあちゃん家まで競争だ！勝つたらね、ほかの二人からオヤツを少し余分にもらえるんだよ。オヤツ？そう、ほんとのことを言うとな、ボクたち、鈴木のおばあちゃんが出してくれるオヤツがめあてで野菜の仕分けの手伝いに行ってるんだ。おばあちゃんはね、共同購入の野菜なんかを使って、とつてもおいしいオヤツを作ってくれるんだよ。ボクが好きなのはキャラメルプリンとヨモギの草もち。今日はどんなオヤツが出てくるのかな。そんな期待で胸がいっぱいで、ボクは一生けんめい腕を振つてかけて行つたんだ。

ワァー

かん声を上げながら、ボクたちは鈴木さん家の裏庭にかけこんだ。今日もタケシくんがイチバンだった。

鈴木さん家の庭ではね、いつものようにコンテナを並べた上にコンパネをしいて、会員の人たちがその周りで仕分け作業をしていた。でも、いつもとちヨットふんい気がちがってたんだ。何て言うのかな、みんなの手が止まってたんだよね。いつもなら

「ボクがイチバン、だ！ボクがイチバン、だ！カズオくんとノゾミちゃんから、オヤツ、余分にもらう、よ」

って得意そうに言うタケシくんも、黙って立ったままだった。ボクとノゾミちゃんも、肩で息をしながらタケシくんの後ろに立っていた。どうしたらいいか分からなかったんだ。そうしたら恵子姉さんがボクたちの方を向いて

「あら、いらっしやい」

って声をかけてくれたんだ。恵子姉さんは、ノゾミちゃんのお母さんの妹さんにあたる人。いつも仕分けの手伝いに来てるんだよ。恵子姉さんの声で、みんながボクたちの方に顔を向けてニツコリ笑ってくれた。みんなと言っても四、五人だけだね。でもボクたち、モジモジしちゃって、顔を見合わせながらその場にしゃがみこんじゃったんだ。何となく

その場のふんい気がね、こわばって感じられたんだもん。

「やあ、来たかい」

って言うように野崎のおじさんがチラッとボクたちの方に目をやると、またみんなの方を向いて

「やっぱりおかしい。数が合わないんだよなー」

って言ったんだ。ボクたちが来る前の話の続きらしかった。

「数えまちがいつて、ないかしら」

村上のおばさんが、サツマイモを入れたビニール袋の口を手でゆっくり結びながら言った。作業台の上を見ると、今日の野菜はサツマイモと長ネギ、ホーレン草、それにミズナのようにだった。あの泥まみれの長いのはゴボウかな？みんなはコンテナを裏返してイスがわりに使って、サツマイモはハカリではかってビニール袋に入れ、葉ものの野菜は一軒分ずつ新聞紙にくるんでワラでしばっていたようだけど、今はその手が止まってたんだ。配送用のワゴン車の横には、まだ仕分けの終わっていない野菜の入ったコンテナがいくつも積んであった。ボクはそれを見て、今日これから配送して間に合うんだろうかって、心配になっちゃった。

「イヤー、そんなことはないだろ。二回続けてだからね。オレも今日は向こうで山田さ

んと、伝票と照らし合わせながら一つ一つチェックしてきたんだよ。それがこっちに着いたら、たりないときてやがる」

「途中、どこかに寄ったの?」

手ぬぐいで姉さんかぶりをした久保のおばさんが、ゆっくりとたずねた。このおばさん、もう大学生の子どもがいるんだけど、いつもピツタリしたジーンズをはいて若づくりにしてるんだ。「そりゃあ信号待ちで二、三回止まったけどさー、トンネルのあたりでー」

野崎のおじさんが頭をかかえながら言った。

「その間に抜きとられるなんて、考えられないもんね」

恵子姉さんが野崎のおじさんの言葉を引きとるようにして言うと、腕ぐみをして考えこんじゃったんだ。ボクたちにもようやくジジョウがのみこめてきた。今日は来ない方がよかったのかなってタケシくんと言おうとした時、鈴木のおばあちゃんの姿がえんがわにのぞいたんだ。おばあちゃんは遠くを見る人のように片手をひたいにあてがうと

おいで

おいで

をするように、手まねきを始めたんだ。おばあちゃんね、もう八十を過ぎて腰が曲がっちゃってるけど、でもとっても元気なんだよ。ボクたち、それがオヤツの合図だなんて分かつ

たけど、どうしていいか分からなくて、顔を見合わせたままモジモジしてたんだ。だって何にも手伝いしないでオヤツをもらうの、悪いような気がしたし、それに、その場のふん気がオヤツを食べるようなふんい気じゃなかったんだもん。そうしたら恵子姉さんが

「あら、オヤツじゃないかしら」

って、おばあちゃんとボクたちをかわるがわる見ながら言ってくれたんだ。野崎のおじさんも

「子どもたち、行ってきたな」

って、いつものようにブッキラボーだけど温かみのある声で言ってくれたから、ボクたち、やっと腰を上げることができたんだよ。でもホントのことを言うとね、ボクは今日のオヤツは何かなっていうことで頭がいっぱいで、早くえんがわの方に行きたくて足がウズウズしてたんだ。

「まさか、タヌキにばかされてんじゃないでしょうねえ」

えんがわに向かって歩いて行くボクたちの後ろで、鈴木木の若奥さんの声がした。みんなは「マサカー」って言って笑ってたけど、野崎のおじさんが

「んじやまあ、もう少しようすを見ようか。今日は遅くなっちゃったし」

って言うのと、みんなまた作業にとりかかったようだった

「まあまあ、よく来たねえ」

鈴木のおばあちゃんが、お盆にオヤツをのせてニコニコ笑いながらボクたちを迎えてくれた。ボクたち、靴をぬいでえんがわに上ったんだ。

「今日はね、大学イモだよ。けさ、山田さんここで掘ったばかりだって言うから、おいしいよ。みんなも大きくなったらよく勉強して、大学へ入ってリツパな人になるんだよ」お盆の上にはね、べっこうアメをぬったように光っているサツマイモがのってんだ。黒ゴマがふりかけてあってね。ボク、家ではお父さんが作ってくれるイモの煮っころがしなんて食べたことはあるけど、大学イモっていうのは初めてだったんだ。ボクが右手にとつてながめていると

「ワァー、おいしいー！」

先にひとくち食べたノゾミちゃんがかん声を上げた。いつもなら

「ボクがかけっこに勝ったから、少し余分に、もらう、よ」

って言うタケシくんも、何にも言わないでモグモグ口を動かしてた。それでボクもひとくち口に入れてみたんだ。甘くておしよゆの味がして、それにゴマの香りも……。とってもおいしかったよ。みんなムシヤムシヤ食べ続けた。そんなボクたちを、鈴木のおばあちゃんはいわの寄った額でニコニコ笑いながら見てたんだ。

オヤツを食べ終わったボクたちがおばあちゃんとスゴロクをして遊んでいると、野菜の仕分けも終わって野崎のおじさんがワゴン車で配送に出かけたようだった。ボクたち、恵子姉さんたちがお茶にするのになって思ってたえんがわから下りただけ、恵子姉さんたちは遅くなったから帰るって言うんで、ボクたちもいっしょに帰ることにしたんだ。

帰り道、ボクがお父さんに家でも大学イモを作ってもらおうって考えてたら、並んで歩いてたタケシくんがいきなり

「あした、たんていごっこ、やらな、い？」

って言ったんだ。ノゾミちゃんはずぐに

「やろう、やろう」

って言った。ボクは少し不安になってきいてみた。

「やるって、どこで？」

そしたらタケシくんは

「トンネルのあたり、さ。ボクは、あのトンネルのあたりがあやしいと思うん、だ」

って答えたんだ。ボクが分からなくてキョトンとしていて、ノゾミちゃんが

「野菜ドロボーでしょ」

って言ったんだ。タケシくんは「ウン」って言うてうなずいた。ボクはビックリしちゃっ

た。だってそんなこと、子どものボクたちにできるのかな・・・。

「ワァー、おもしろそう。やろう、やろう」

ノゾミちゃんが手をたたいてた。ボクたちの幼稚園でも、ノゾミちゃんはボクなんかよりずっとカッパツな女の子なんだ。

「タケシくん、だいじょうぶかい。そんなことをして」

「ヘイキ、ヘイキ、ダイジョーブだ、よ。ピストル持って追いかけるわけじゃないから、さ。トンネルの上を、歩いてみるだけだ、よ」

それを聞いてボクはホツとしちゃった。だってトンネルの上はハイキングコースになっていて、ボクも幼稚園の遠足で歩いたことがあるんだもん。あそこならアブナイことはないだろう・・・。

家に帰って晩ごはんを食べながら、ボクはいつものようにお父さんにその日いちにちのことを話してた。鈴木のおばあちゃん家で聞いた、共同購入の野菜が途中でなくなっていることを話すと、お父さんは

「不思議なこともあるもんだねえ」

つてうなずきながら聞いていた。それからボクが

「あした、ノゾミちゃんとタケシくんと三人で、となり町まで電車で行って、そこから

山道を歩いて帰ってきてもいい？」

「つてきくと、お父さんはハシを休めて

「ああ、いいよ、行つておいで。でも遅くならないうちに帰つて来るんだよ。山は今は、モミジがきれいだろうねえ。お母さんの方では、もう散つちやつているかなあ……」
つて、遠くを見るような目で言つたんだ。

夜、ボクはフトンの中で天井を見ながら、ボクたちへポランのたんてい団だなつて思った。ポランていうのはお父さんたちの共同購入の会の名前「ポランの広場」からとつたんだけど、もともとはね、ミヤザワケンジという人の童話なんだつて。ボクのお母さんが、名づけ親なんだ。あしたはボクたちの初仕事。タケシくんが団長で、ノゾミちゃんは……つて考えてたら、いつの間にかウトウトしてきて眠っちゃった。たんてい団のことはお父さんには話さなかつたよ。あした帰つて来てから話して、お父さんをビックリさせてやるんだ……。

土曜日、ボクは幼稚園から帰ると、お父さんの作つておいてくれたお弁当を台所で食べた。土曜日は幼稚園の給食がないから、いつもお父さんがお弁当を作つておいてくれるんだ。それからテーブルの上にお父さんが出しておいてくれた百円玉を三つオサイフにしまつと、駅までかけて行つたんだ。タケシくんとノゾミちゃんとはね、駅で待ち合わせをしたんだよ。

となり町は、電車で駅一つだった。トンネルを越えると、もうそこはとなり町だったんだ。農家の山田さんは駅から海に向かって歩いて行ったところにあるんだけど、ボクたちはそれとは反対の山側に向かって歩き始めた。バス通りの信号を渡って、小学校を右手に見ながら家の間を歩いて行くと、すぐにハイキングコースの入口に着いたんだ。タケシくんが先頭に立って、そのあとからノゾミちゃん・ボクの順に入って行った。

山はもう赤や黄のモミジにおおわれていた。ハイキングコースにはね、落ち葉がたくさん積もってて、ボクたちはその上をカサカサ音をたてながら歩いて行ったんだ。タケシくんが何か手がかりになるものが落ちてるかもしれないって言うから、ボクたちは足もとを見ながら歩いて行ったんだけど、でもボクは時々ね、木の枝から落ちてくる日の光にさわられるようにして顔を上げたんだ。おだやかな日で、空には雲ひとつなかったよ。見上げると木の枝からはね、赤や黄の光がキラキラ降りそそいできたんだ。ボクは何だか、お父さんと時々行く教会の礼拝堂の中にいるような気になっちゃった。だって礼拝堂にはステンドグラスがあつてね、そのステンドグラスごしに日の光をあびてるようだったんだもん。ボクの通ってる幼稚園は教会の付属幼稚園で、お父さんはクリスマスチャンじゃないけど、ボクを連れて時々日曜日の礼拝に出てるんだ。

ボクたち話もしないで一生けんめい見て行ったんだけど、それらしいものは何にも落ち

てなかったんだ。ゴミなんかはたくさん捨ててあったけどね。それでボクたちタイクツしちゃって、おしゃべりを始めたんだ。来る時電車の中でタケシくんが

「ボク、夏休みに、ブルートレインに乗ったんだ。夏に、ブルートレインで、旅行に行っ
たんだ、よ」

って話してたから、ノゾミちゃんがこのまえ幼稚園で見た「銀河鉄道の夜」っていう影絵のことを話したんだ。ボクたちの幼稚園ではね、春には人形劇、秋には影絵を先生たちが見せてくれるんだよ。その影絵にね、ブルートレインが出てきたんだ。先生たちがダンボール紙を切りぬいて作った手作りのブルートレインだったけど、星空の中をね、流れるように進んで行ったんだ。

「あのサソリの目も、きれいだったわねえ」

ノゾミちゃんが思い出したように言った。サソリっていうのも影絵で出てきたんだけど、そのサソリ、イタチに食べられそうになって逃げて井戸の中に落ちて死んじゃうんだけど、どうせ死ぬならひどいイタチに食べられてあげればよかったって泣いたら、死んで空のお星さまになったんだって。影絵のスクリーンにザリガニのオバケのようなのが出てきた時、ボクたちみんなビククリしちゃったよ。だってサソリの目が——豆電球を使っていたかなあ——赤くチカチカ光ってたんだもん。

「ボクのお父さん、サソリは毒もってるから、イタチは食べないはずだって、言ってた、よ」
タケシくんがノゾミちゃんに言ってるのが聞こえた。ボクは影絵を見た夜のことを思い出してた。ボクは家でお父さんにきいてみたんだ。

「お父さん、サソリって、ほんとうに今でも夜空で赤く光ってるの？」

「ウン、サソリ座っていう星はあるよ。でも、どうかなあ。今の季節、見えるかなあ。お父さんがあした、星座表っていうのを買ってきてあげるよ」

って言うってくれたんだ。

次の日の夜、ボクはお父さんの買ってきてくれた星座表と懐中電灯を持って、お父さんと庭に出てみた。星は出てたけど、赤く光る星は見えなかったんだ。懐中電灯で星座表を照らしていたお父さんが

「サソリは、秋には見えないようだね。春の星だな。でも、どうかなあ。ここは空気が汚れてるから、見えるかなあ。お母さんの方なら、空が澄んでて、夏、天の川も見えたけどね」
ってつぶやいたんだ。ボクのお母さん。お母さんは今夜もあのテラスに立って星を見てるんだろうか……。ボクは急に悲しくなってお父さんの手をにぎると、お父さんにきいてみたんだ。

「お父さん、人間も死んだら、空に上ってお星さまになって輝くの？」

「さあ、どうかなあ」

お父さんはボクの手をにぎりなおすと、星空を見上げながら答えてくれたんだ。

「人が死んだら、流れ星が流れるって言うけどね……。でも、どうしたんだい。急にそんなことを言いだして」――

「ウン」

って言ったまま、ノゾミちゃんは黙りこんじゃったんだ。ボクは二人の間をとりもとう
と思つて

「もうすぐ、トンネルの上だね」

って言おうとした時、タケシくんの前いきなりアオキの木がおおいかぶさってきたんだ。ボク、名前はすぐに分かったよ。だって、ボクん家のトイレのわきにもアオキの木が生えてんだもん。アオキの木はね、倒れるようにして道をふさいじゃったんだ。

「何だ、こいつ、ジャマだ、な。抜いちゃ、え」

タケシくんがおこったように言うと、アオキの木に手をかけたんだ。ボクはチョットかわいそうになっちゃった。だってアオキの木には、たくさん青い実がついてたんだもん。でも黙ってた。タケシくんはアオキの根もとに両手をかけてウンウンうなってたけど、手がすべってペタン、って尻もちをついちゃったんだ。ノゾミちゃんは手をたたいておもしろ

ろがってた。ボクもおかしくて笑いだしそうになったけど、ケシくんが尻もちをついたままこわい目でボクをにらんで

「カズオくんも、手伝って、よ」

って言ったから、あわててタケシくんを助け起こすと、いっしょにアオキの木に手をかけて
イツ、セー、ノー、セー！

で引いたんだ。そしたらあっけなく抜けちゃって、ボクたち二人ともペタン、って尻もちをついちゃったんだ。ノゾミちゃんはもう、涙が出るくらい笑ってたよ。ボクも何だかおかしくなって、尻もちをついたまま笑っちゃったんだ。タケシくんも笑いだして、三人でしばらくそうやって笑ってた。それからタケシくんが起き上がってアオキの木を下の方に投げ捨てると

「尻もちついたら、オシッコ、したくなっちゃった、よ」

って、オチンチンのとこに手をやって言ったんだ。ノゾミちゃんはクスツツて笑ったけど、ボクも何だかオシッコがしたくなってきた。イイとこはないかなってさがしたら、近くに小さなミゾが流れてたんだ。ミゾって言ってもコンクリートのドブじゃなくてね、岩の間をチョロチョロ水が流れてたんだよ。ボクとタケシくんはそこへ行って並んでオシッコをした。ボクたちのオシッコはね、ミゾのふちに生えてたオオバコの葉っぱにかかるよ、

黄色いすじになってミゾの中に流れて行つたんだ。ノゾミちゃんは、つて頭を回したら、ノゾミちゃんもやつぱり向こうの方でしゃがんでオシッコをしたよ。

三人ともオシッコがすんで、タケシくんが指についたオシッコを半パンになすりつけながら「じゃあ、行こう、か」

つて声をかけた時、いきなりボクたちの後ろの方から強い風が吹きつけてきたんだ。ボクはもうビックリしちゃった。だって、もう少してボクの体が風に飛ばされそうになっちゃつたんだもん。風はね、落ち葉をまき上げながらボクたちの間を吹きぬけると、ボクたちの前でタツマキのようにグルグル輪を描いてから、ピタツつてやんじゃつたんだ。風がやむと、落ち葉がハラハラ地面に落ちてきた。ボクたち三人とも、アッ！つて声を上げちゃつた。だってタツマキのあつたところに、小さなホコラが建つてたんだもん。ほんとに小さなホコラだったよ。おイナリさんにあるようなね。

「テングだ、よ」

すぐにかけて寄つたタケシくんが指さしながら言った。ホコラのとびらにはね、赤いテングのお面がかかつてたんだ。ボクはひとめ見てゾクツとしちゃつた。だってテングの目が、ボクたちをにらみつけるようだったんだもん。

「何が入ってるのか、な」

とびらの向こうをのぞきこむようにしてタケシくんが言った。ノゾミちゃんはテングの鼻をなでてた。

「開けてみよう、か」

タケシくんがふりむいて言ったんだ。

「いけないわ、そんなこと」

ノゾミちゃんが言った。ボクも不安になってきた。何だかいけないことのように思えたんだ。

「タケシくん、やめといた方がいいんじゃないかい。何だかあの――」

「ヘイキ、ヘイキ、ダイジョープだ、よ」

タケシくんはボクの言葉をさえぎると、ホコラの観音びらきに手をかけて、ギーって音をたてながら開けたんだ。

「何だかあのテングのお面が――」

ってボクは言おうとしたんだけど、テングのお面はノゾミちゃんの差し出した両手をすりぬけると、ボクの足もとに落ちてきたんだ。ボクが手にとってみると、それは赤いカエデの葉っぱに変わってたんだよ。ボクが不思議そうに葉っぱを見ると

「ワァー、何これ？」

ってノゾミちゃんの声がした。ボクはあわてて顔を起こすと、ズボンのポケットに葉っ

ばをしまいこんだんだ。

ホコラの中にはね、ホントにへんなのが入ってたんだよ。何て言ったらいいのかな、ヤマイモのオバケのようなのがデン！とかまえてたんだ。形はカブの形をしてたけどヤマイモそっくりで、お父さんの足のスネ毛のようなヒゲ根がね、いちめん生えてたんだ。

「何かな、これ？」

ってタケシくんが下の方を指さした。ノゾミちゃんがクスツツて笑った。下の方にはね、タテに大きな割れ目がついてたんだ。ボクも何かなって思ってたら、タケシくんがその割れ目に指をつつこんだんだ。そうしたらいきなり白い煙がプシューって吹き出してきて、ボクはイシキを失っちゃったんだよ。

気がつくと、ボクは満月の光に照らされて、木の円イスに腰かけてたんだ。ボクのとなりにタケシくん、そのとなりにノゾミちゃんがすわってた。二人とも、不思議そうにあたりを見回してた。ボクたちの前にはね、リング箱をさかさにして作った階段のようなのが置いてあったんだ。正面に三段、向かって左に二段、右手に一段。その一段のリング箱のわきに、タヌキが立ってたんだよ！ボク、ビックリしちゃった。だってそのタヌキ、人間

のように二本足で立ってたんどもん。タヌキはじつとボクたちを見つめてた。見回すと、ボクたちの周りをタヌキのかきねが二重にとりまいてたんだ。二本足で立ったタヌキたちの前にね——子タヌキたちなのかな——小さなタヌキがひざをかかえてぎょうぎよくすわってたんだ。タヌキたちの目はね、満月の光を受けて豆電球のように光ってたよ。ボクは何だか幼稚園で見た影絵の世界にいるような気になってきた。だってボクたちの上にはルリ色の夜空が広がってね——星は一つも見えなかつたけれど——そこに黄色のアップリケをまるく切りぬいてはりつけたようなお月さまが浮かんでたんだもん。ボクたち三人がこの不思議な世界に見とれてると、右手のリング箱のわきに立ってたタヌキがいきなり「キリッ！」

って号令をかけたんだ。周りのタヌキたちが立ち上がったので、ボクたちも思わず腰を上げてた。いつも幼稚園でする朝のごあいさつの時のようにね。そうしたら右手の方からタヌキが二匹現れてきたんだ。一匹はやせてヒョロヒョロしたタヌキだったけれど、もう一匹の方を見てボクは吹き出しそうになっちゃった。だってそのタヌキ、大太鼓のようなおなかをかかえて、頭にはハンチング、背中にはマントのいでたち、おまけに鼻の上にはおばあさんがかけるような円ぶちメガネをチョコンとのせてたんだもん。二匹のタヌキはボクたちの前まで歩いて来ると、やせた方が左手の二段のリング箱の上、太った方が正面

のリングゴ箱の上に立ったんだ。そうしたらさっきのタヌキがまた

「レイー！」

って号令をかけたんだ。周りのタヌキたちがみんな頭を下げてたから、ボクたちも頭を下げた。誰に向かつて頭を下げるのか分かんなかったけれどね。次は「チャクセキ」かなってボクが思っていると、子タヌキたちが号令を待たずにしゃがみ始めたから、ボクたちもイスにすわったんだ。

「コホン」

って正面のタヌキがせきばらいをした。ボクはこれから何が始まるんだろうって、胸がワクワクしてきちゃった。

「ではこれから裁判を始めよう。被告たちは、△△町に住むカズオ、タケシ、ノゾミの三名じゃな」

ボクが思わず「ハイ」って答えそうになっちゃった時、タケシくんが

「裁判でナーニ？ボクたち、何にも悪いこと、してない、よ」

って言ったんだ、足をブラブラさせながら。ボクも、そうだ、ボクたち悪いことなんかしてないんだって思いなおしたんだ。そうしたら正面のタヌキは円ぶちメガネをチヨット持ち上げて

「フム、おまえたちはまだ気づいておらんのか。それでは検事に起訴状を読みあげてもらおう」
つて言うのと、左手にすわったやせたタヌキの方を向いたんだ。「検事」つて呼ばれたタヌキは「ハイ、裁判長」つて言つてうなずくと、立ち上がつて手に持った紙きれを読み始めたんだ。

「被告人カズオ、タケシ、ノゾミの三名は、本日午後、となり町から△△町へぬけるハイキングコースを歩行中、道ばたに生えていたアオキ一本を『こいつ、ジャマだな』と言つて抜き去り、死にいたらしめました。よつて当法廷において、タマシイへのイケイの念をなくした罪」によつて起訴されております」

そう言うのと、検事タヌキはまたリングゴ箱の上に腰を下ろしたんだ。ボクは「タマシイ」つていうコトバが気になつたけど、でもアオキの木を抜いちやつたことでおこられてるんだなつて分かつてホツとしちやつた。だつてそんなこと……

「おまえたちは、この罪を認めるかな」

裁判長タヌキが身を乗り出すようにしてきいてきた。ボクたち三人は顔を見合わせると、タケシくんが代表して

「それくらい、みんな、やってる、よ」

つて答えたんだ。ボクとノゾミちゃんもうなずいてみせた。そうしたら検事タヌキがい

きなり立ち上がって

「さ、さいばん長！」

って叫んだんだ。ボクたちみんな、そのハクリヨクにあっとうされちゃったよ。検事タヌキは体をブルブル震わせていた。

「私はただ今の被告たちの発言に、フンマンやるかたありません。何のいわれもなく被告たちに抜かれて殺されたアオキのくやしさを思うと、私は涙が出て止まりません」

そう言うと、検事タヌキはほんとうに目からポロポロ涙をこぼしたんだ。ボクたちチヨット、ばつが悪くなつてモジモジしちゃった。

「検事、少し落ち着きなさい」

裁判長タヌキがそう言つてなぐさめると、検事タヌキはようやく手で涙をぬぐってから続けたんだ。

「私は当法廷に、できればアオキ本人を証人として呼びたかったのですが、それもできません。アオキの木いっばんが殺されることによって、どれほどのタマシイが滅びてしまったことか……。そのことにムトンジヤクな被告たちの態度は、まさに被告たち自身が申しましたように『みんなやつてる』こと——人間全体のヤマイなのでありましょう。そのような心ない態度が今どれほどの事態をまねいているのか。私は当法廷でそれを明らかに

するために、裁判長に証人を呼んでいただきたいと思います。〃△△町のうら山のすみかを追われたタヌキA〃です」

「ウム、そうじゃな、それがよいじゃろ。書記、今の証人を呼んできなさい」

裁判長タヌキはうなずくと、右手の一段のリングゴ箱の上にすわってタヌキに向かつて命じたんだ。書記〃って言ったってそのタヌキ、何にもしないでただリングゴ箱の上にすわってただけなんだけどね。ボクは、何だか雲行きがあやしくなってきたゾ、△△町ってボクたちの住んでる町だけどそのうら山ってどこだろうって考えてたら、書記タヌキに支えられるようにしてガリガリにやせ細ったタヌキが現れたんだ。そのタヌキの姿を見てボクは吹き出しそうになっちゃったけど、あわてて笑っちゃいけないんだって思っただけを口を押さえた。だってそのタヌキ、手足は枯れ枝のようにやせ細っているのに、おなかだけは太太鼓のようにふくれてたんだもん。裁判長タヌキの太鼓腹なんかくらべものにならないくらいね。ボクが笑っちゃいけないって思っただけは、このまえ教会のバザーで見たアフリカなみんなの子どもの写真を思い出したからなんだ。あの子たちも、このタヌキのように、食べる物がなくてガリガリにやせてたな・・・。

「証人、証人は〃△△町のうら山のすみかを追われたタヌキA〃じゃな」

ようやくのことのでえいようしつちょうのタヌキが右手のリングゴ箱の上に腰かけると、裁

判長タヌキがたずねた。証人タヌキは

「ハイ……」

って、ほんとに消え入りそうな声で答えたんだ。それだけでも苦しそうだった。

「裁判長！」

検事タヌキが立ち上がると、リング箱から下りて来て、証人タヌキの前に立ってたずねたんだ。

「証人、証人はなぜ△△町のうら山のすみかを追われてしまったのですか？」

証人タヌキは書記タヌキに支えられながら、体から声をしぼり出すようにして答えたんだ。それを見ているだけでも、イタイタしく感じちゃったよ。

「ハイ……私どもは代々、△△町のうら山に住んでいたのですが、ある日、いきなりチェーンソーで木が切り倒され、ブルドーザーが入って土を掘り返し、うら山はけずられてゴルフ場の造成現場になってしまったのでございます。私どもは、命からがら逃げてきたのでございます」

ゴルフ場の工事現場って……あ！ノゾミちゃん家のうら山じゃないか。ボクはハツとしてノゾミちゃんの顔を見たけど、ノゾミちゃんは黙ってタヌキの方を見ていた。

「それからあとは、どうされたんですか」

「ハイ・・・近くの土管に逃げこんで、そこをネグラにしております。食べる物は、お恥かしい話ですが、物ごいに頼っております」

証人タヌキは顔を伏せるようにして言った。ボクは胸がドキドキしてきた。あのタヌキはもしかして・・・

「被告たちにはもちろん」

検事タヌキはクルリとボクたちの方を向くと、目を光らせながら鋭い声で言ったんだ。

「証人の件に関して、何らかの責任があるわけではありません。しかしながら、道を歩いている『ジャマだから抜いちゃえ』と言ってアオキの木を抜いてしまうのも、多くの生きものが生きている緑の森を、そんなことにはおかまいなしにブルドーザーで踏みつぶしてしまうのも、その根は一つなのであります。それはひとことで言えば、人間たちがタマシイへのイケイの念をなくしてしまったためなのですが、人間たちはそれに気づかないばかりか、ああ、なお悪いことに、自らの手を汚しながら、ギゼンの行為にでているのでございます。私はこのことを次に、明らかにしていきたいと思えます。証人の証言に関して、被告たちには思いあたる点があると思えます。特に被告ノゾミには――

「ノゾミ、おまえはこのタヌキを知っておるのかね」

裁判長タヌキが検事タヌキの言葉を引きとるようにしてノゾミちゃんにたずねたんだ。

ボクもタケシくんも思わず横を向いてノゾミちゃんを見ていた。

「ウウン、知らない」

ノゾミちゃんは、心なしか力のない声で答えたんだ。検事タヌキはそれを聞くと、勝ちほこったように証人タヌキにたずねた。

「証人、証人はもちろん、ノゾミをご存知ですね」

「エエ・・・」

「ノゾミとは、どれくらい会っていますか」

「もう、数えきれぬくらい・・・」

証人タヌキが弱々しく答えると、検事タヌキは裁判長に向かって言ったんだ。

「裁判長、被告ノゾミの発言は、あえてギシヨウとは申しませぬが、証人の発言を裏つけるものとして、証拠を採用していただきたいと思えます。これは、凹凸新聞×月×日付けの記事でございます」

そう言うと、検事タヌキは紙きれを裁判長席に持って行って差し出した。裁判長タヌキは円ぶちメガネを持ち上げて「フム、フム」ってうなずきながら見てたけど

「書記、被告たちにもこれを見せてやりなさい」って命じたんだ。書記タヌキがすぐにボクたちのところに紙きれを持って来た。タケシくんがそれを受けとったんだけど、書記

タヌキが紙きを差し出した時にね、フウツという生ぐさいニオイがしたんだ。満月の光に照らされて、新聞の切りぬきはボクのところからもよく見えた。それにはこう書いてあったんだ。

×月×日(△△発)○○県△△町の公務員・佐藤寛雄さん(39)方の裏庭に夜ごとタヌキの親子が現れて町内の評判を呼んでいる。佐藤さんによればタヌキが初めて現れたのが去年の冬。裏庭のヤブかげにギラギラ光る目玉が四つ見えたので、奥さんの範子さん(35)が捨て犬か捨て猫かと思つてブタ肉を投げてみたところ、出て来たのは何とタヌキ!それ以来夜ごと裏庭に現れてはエサをねだるようになった。春さきには子育てのためかオスだけの一匹になったが、夏まえになるとかわい子ダヌキ三匹を連れてゾロゾロやって来るようになった。佐藤さんはタヌキの好物を知ろうと、肉や魚、イモ類、なっば、ミカンなどのくだもの、さらには子どもたちの買ってくるスナック菓子まで与えて調べたところ、何とタヌキの好物はリンゴだということ。リンゴを庭に置いておくと、人間さまが神社に参拝する時のようにタヌキは、うやうやしく両手(両足?)でささげ持つてヤブに引き下がる。もっかの佐藤さんの悩みは、冬場にしか出回らないリンゴをどうやって夏も食べさせてやろうか、ということにあるそうなの……。

ボクはその記事を見たことがあった。佐藤さんて、ノゾミちゃんのお父さんなんだ。幼稚園でノゾミちゃんからタヌキのことは聞いてたけど、夏まえ、タケシくんとノゾミちゃんと鈴木のおばあちゃん家へ野菜の仕分けの手伝いに行った時、新聞記事のことが話題になって、野崎のおじさんがボクたちにも読んできかせてくれたんだよ。でもノゾミちゃん、新聞に出てからはタヌキはパツタリ来なくなっちゃったって言ってたけどな・・・。

ボクは新聞の切りぬきをタケシくんから受けとると、写真のタヌキとリング箱の上にすわってるタヌキを見くらべてみたんだ。でも、どう見ても同じタヌキには見えなかったよ。だって、新聞のタヌキは丸々と太っててえいようがいいように見えたし、それに証人席のタヌキは耳が片っぱう折れてたんだもん。ボクが切りぬきをノゾミちゃんに渡そうとしたら、ノゾミちゃんは「いらぬい」って言うように首を振ったんだ。ボクがどうしていいかわからなくてこまっぺしていると、書記タヌキがやって来て切りぬきを持って行った。書記タヌキが手を差し出した時、またあの生ぐさいニオイがしたよ。

「ノゾミ、どうじゃな」

裁判長タヌキがさぐるような目できくと、ノゾミちゃんは

「ウン」

って言ったまま、黙りこんじゃったんだ。今にも泣きだしそうな顔になってた。ボクも

どうしたらいいか分からなくて手が震えてきちゃったけど、何にも言えなかった。そうしたらタケシくんが

「どうして、エサやるのが、いけないの。やらないと、死んじゃうで、しょ」

って言ったんだ。ボクもそうだって思ったけど、また検事タヌキが叫び出すんじゃないかって思って首をすくめたんだ。そうしたら思いがけず証人タヌキがシクシク泣き始めたんだよ。

「あんまりです・・・あんまりです・・・そんな言い方は・・・。わたしらは代々、ノゾミちゃん家のうら山で、ひっそりとつましく生きてきたのに、いきなり、すみかを追われて、食べる物がなくなつて・・・。それを、おまえたちはカワイソウだからごはんの残り物をやるうなんて、あんまりです。まるで、身ぐるみはいだオイハギが、カワイソウだからパンツの一枚でも返してやるうか、って言ってるようなもんです。そんなハズカシメを受けるくらいなら、いっそ死んだ方がマシです」

そう言うのと証人タヌキは、ほんとに気を失って倒れちゃったんだ。

「書記、証人を退廷させなさい」

裁判長が命じると、書記タヌキが抱きかかえるようにして証人タヌキを連れて行った。ボクたちの周りからは、タヌキたちのすすり泣きが聞こえてきた。ボクたち三人とも、気

まぶしくなってモジモジしちゃったんだ。タケシくんは下を向いたまま足をブラブラさせているし、ノゾミちゃんはクシユンて鼻をかんでた。

「裁判長」

左手のリング箱の上にもどった検事タヌキがボクたちの方を見ながら言った。

「被告たちにもようやく反省のイロが見えてきました。が、まだまだ不十分なものと言わざるをえません。また、先ほどの証人の証言で、『それくらいなら死んだ方がマシだ』という発言が被告たちにまちがって受けとられるおそれがあります。よって、もう一人、五十年前の戦争で苦しめられたタヌキB”を我々の歴史考証館から証人として呼んでいただきたいのですが」

「ウム、そうじゃな・・・それがよいじゃろ」

裁判長タヌキは何だか眠そうに答えると

「書記、今の証人を連れてきなさい」

って命じてから、リング箱の上でゴロンと横になっちゃったんだ。ボクたちはポカんとしてそれを見てた。ボクは、五十年前のタヌキって、タヌキはそんなに長生きするのかわかって不思議に思っていると、右手の方からつえをついたヨボヨボのおじいさんタヌキが現れてきたんだ。それを見たタケシくんが

「ウチの、コロ、みたいだ、ね」

ってボクの耳もとでささやいた。ボクもうなずき返した。コロっていうのはタケシくん家で飼ってるマルチーズの名前なんだけど、ほんとにコロそっくりだったよ。耳から足もとまで、長く垂れ下がった毛でおおわれてたんだ。ボクはこれなら五十年生きててもおかしくないなって思った。タヌキの毛も、五十年もすればあんなに長く伸びるんだろうなって、ね。そのヨボヨボタヌキの後ろから、書記のタヌキが大きな卵のようなものをかかえてきたんだ。その卵はね、ボクたちがストローで吹いて遊ぶポリバルーンのようにユラユラゆれてたんだ。ヨボヨボタヌキのおじいさんが右手のリング箱のわきまで来ると、タヌキたちがみんな立ち上がって礼をしたんだ。ボクたちもタヌキにならって礼をした。裁判長タヌキだけはリング箱の上でイビキをかいて寝てたよ。

「館長先生、それではよろしくお願いします」

検事タヌキがうやうやしく言って頭を下げてたんだ。館長先生って、さつき検事の言ってた歴史ナントカ館の館長かなって思っていると、ヨボヨボタヌキが

「フム」

ってうなずいてから、書記タヌキがリング箱の上に置いた大きな卵に向かって手を合わせたんだ。それから右手でつえを持ってコンコンっていう感じで卵にあてたんだよ。そう

したらね、卵のカラがプシューっていう音をたてて割れると、中からタヌキが

「フアーア、よく寝た」

ってのびをしながら出てきたんだ。卵のカラは消えてなくなってた。ボクたちもう、ポカント口を開けたまま見てたんだ。

「さいばん——」

って言いかけた検事タヌキが、リング箱の上でイビキをかいて寝ている裁判長の姿を見ると、あわてて右手のリング箱の方に向きなおって言ったんだ。

「証人、証人は、五十年前の戦争で苦しめられたタヌキB」ですわね」

「ハイ」

卵から出てきたタヌキが、まだ目をシヨボシヨボさせながら答えたんだ。あのタヌキ、五十年間も卵の中で生きてきたのかな……。

「五十年前に人間の起こした戦争で、証人たちはどれほど苦しめられたのですか」

検事はリング箱から下りてくると、証人タヌキに向かつてたずねたんだ。

「ハイ、そりやもうタイヘンな時で。何しろ百姓たちは兵隊さんに米を送るんだって、アワやヒエもとられて食べる物がなくなつて、小学校の校庭を掘り返してサツマイモを植えていやしたよ。あつしらの住むうら山の雑木林にも入つて来て、あつしらの食べる木の

実や草の根はとるわ、雑木はマキにするんで切り倒すわで、あつしらが食べる物がなくなつてフラフラになつて里に下りて行くと、待つてましたとばかりに人間の手におちて、あつしの仲間が何匹もタヌキ汁になつて食われやしたよ」

「そうですか、そこまで追いつめられていたのですね……。証人、証人は幸い飢えてのたれ死にすることもなければタヌキ汁になることもなく生きのびられたわけですが、証人の仲間たち——タヌキ汁になつた仲間たちは、人間に殺されて食べられる時に、どれほどくやし涙を流したことでしょうねえ」

「そりやもう、顔じゆう涙でクシヤクシヤになつていやしたよ。こんなガリガリのあつしらでも、人間が食べてくれるんでジョウブツできるつて、喜んで——」

「喜んで?!それまた、どうしてですか?」

検事タヌキは思いもよらないことを聞いたように、おどろいてきき返したんだ。

「どうつて言われたつて……」

証人タヌキはとほうにくれたように頭をかきながら横にすわつてる館長タヌキの方を見たんだけど、館長タヌキはね、つえの上に両手を置いてあごをのせたまま動かなかったんだよ。「あつしらはそうやつて、生きてきたんだし……。食うか、食われるかで……。のたれ死にすりゃあ、それでもう終わりでやすから——」

「それなら、あのタヌキも食べればよかつたって言うの」

ノゾミちゃんがいきなり言ったんだ。少し涙声になってた。検事タヌキも証人タヌキもハツとしたようにノゾミちゃんの方を見た。まるい目がね、大きく見開かれたようだった。ボクもタケシくんも横を向いてノゾミちゃんを見た。ノゾミちゃんの顔は、少しこわばっているようだった。

「いや、そういうことじゃないんだよ、ノゾミ」

館長タヌキがノゾミちゃんを見つめたまま静かな声で言うと、証人タヌキに向かって「おまえももう帰りなさい。長いこと休んでおったから、疲れたじゃろ」

って声をかけたんだ。証人タヌキは「ハイ」って言うようにうなずいたよ。館長タヌキもうなずき返すと、右手に持ったつえを振りかざして

「イタチ、イタチはどこじゃ」

って見回したんだ。そうしたら裁判長席と検事席の間を通って、子ダヌキくらいのね、小さな動物が走ってきたんだ。ボクはイタチ、初めて見たよ。リスを大きくしたようだった。イタチは館長先生の前に来てペコリと頭を下げると、証人タヌキにお尻を向けて

プシュー

って、七色に輝く虹のようなオナラをしたんだよ。

「ア、イタチのサイゴツペ、だ！」

ってタケシくんが声を上げた。イタチのオナラはね、キラキラ光りながら証人タヌキを包みこむと、だんだんと輝きを失って大きな卵のようになったんだ。書記タヌキがそれを持ち上げると、両手でかかえて右手に消えて行った。イタチもあとからついて行った。館長タヌキは書記タヌキの後ろ姿を見送ってたけど、ボクたちの方に向きなおって

「どうも役者の力不足のようだな……」

ってニガ笑いしたんだ。

「イケイの念……タマシイへのイケイの念なんじゃが……おまえたちに分かるようにするには、どう話したらよいものかな……。ウム、そうじゃ、クモ……空の雲のことから話してみよう」

館長タヌキは一人であなずくと

「おまえたち、空の雲は何でできてると思う？」

って、やさしそうな声できいてきたんだ。ボクたち、顔を見合わせちゃった。だって、いきなりそんなことをきかれたんだもん。ボクが何だろうなって頭を振っていると、タケシくんが何か言いたそうにした。そうしたら

「タケシ、どうかな」

つて、館長タヌキがタケシくんの名前を呼んだんだ。タケシくんは足をブラブラさせながら答えたよ。

「ワタアメだ、よ。雲はワタアメでできてるん、だ。フワフワして、似てるじゃない、か。お祭りの時、ボク、ワタアメめ売りのおじさんにきいたん、だ。ワタアメって、おさとうで作るんだ、よ。だから、空の雲も、おさとうでできてるん、だ」

ボクはタケシくんの答えてるのを聞きながら、タケシくんちがうよ、もし雲がおさとうでできてたら雨は甘くないといけないよって頭の中で言ってた

「フムフム、なかなかおいしそうな雲じゃな。カズオ、おまえはどう思う」

つて、館長からきかれちゃった。ボクは、お父さんがフトンの打ち直しの時に言ってたことを思い出したんだ。

「ボクのお父さん、フトンのワタが空の雲になるって言ってたよ」

しきブトンのがわをはずしながらね、お父さん、ワタをちよつとつまんでボクの方にフツツて吹きかけて、笑いながら言ったんだよ。

「これが空に上って行くとね、雲になるんだよ。でも途中で落ちちゃうと、汚いワタばかりになっちゃうんだ」

お父さんが吹いたワタはね、ユラユラゆれながら開けてあつた窓から庭の方へ飛んで

行っただ・・・・。

「ホウ、ワタか。ワタはワタでも食べられない方のワタじゃな」

館長タヌキはボクに向かつてうなずくと、最後にノゾミちゃんにきいたんだ。

「ノゾミはどうかな」

「ノゾミのおばあさん、もう死んじゃったけど、ノゾミに教えてくれたことがあるの。おばあさんやおじいさんの髪の毛が、お空の雲になるんだよって」

ノゾミちゃんの声はいつもの明るい声にもどってたから、ボクはホツとしたんだ。

「夜になると天人がお空から降りて来て、寝ているおばあさんやおじいさんの枕もとから、ぬけ落ちたしらがを集めて回るの。でもその天人、もう長いことその仕事をやってるから目を悪くしちゃって、時々、しらがじゃなくて黒い毛も集めちゃうのよ。天人が集めてきた髪の毛を、空の天女がはたでおって雲を作るんだよって、おばあちゃん、ノゾミに教えてくれたの」

「ホホウ、わしのようなしらがをな」

そう言うと、館長タヌキは長く垂れ下がった毛をつまんでみせたんだ。

「おまえたちの答えは、みな、よい答えじゃ」

そう言われてボクはうれしかったし、ノゾミちゃんは手をたたいてた。

「ノゾミの言うように、雲は空で神さまが作っておるのだよ。じゃが、はたおり機でおるのではなしに、神さまの息でいろいろ吹き流してな。雲もワタアメと同じで、タケシの言うように原料がいる。それがタマシイなんじゃ。神さまはおさとうのようにタマシイを使つて、ロクロを回すんでなしにフーフー息を吹いて、あのワタアメのような雲を作つてるんじゃよ。それではタマシイとは何か？それはカズオの言つたように——おまえのお父さんはよいことを言うたな」

館長タヌキはボクに向かつてうなずいてみせたんだ。

「ワタと言うのは——フトンのワタのことじゃが——ワタという植物からできるのじゃ。畑にまかれたワタの種は、やがて芽を出し花を咲かせて実をつける。その実に、あのフワフワしたワタができるのじゃよ。人間たちはそれを集めて、フトンに入れたり、おまえたちの着ている服をおったりしているのじゃ。ワタの実はそうやって、自分が死んではじめてたくさんの実をつけることができる。タマシイもな——タマシイというのは、おまえたち人間やわしらタヌキだけでなく、生きとし生けるものに宿っておる力のことなんじゃ。生命あるものが死ぬと、体に宿っていたタマシイは空に帰つて、神さまの息に吹かれて雲になるのじゃよ」

「それなら——」

ノゾミちゃんが考えこむようにしてたずねたんだ。

「人間も死んだら、お空に上って、雲になるの？」

「そうじゃな」

「でも、ノゾミのお父さんとお母さん、人間は死んだら天国へ行って、みんなでプリンを食べながら楽しそうに話をするんだよって、言ってたわ」

ノゾミちゃんのお父さんとお母さんはクリスマスチャンで、ノゾミちゃんも教会の日曜学校に通ってるんだ。

「ホウ、そうか。おまえのお父さんとお母さんはそう言っておったか……。じゃが、ノゾミ、その天国とやらに、わしらタヌキも入れてもらえるのかな」

「ウウン、分かんない」

ノゾミちゃんは小さな声で答えた。館長タヌキは二、三度うなずくと、遠くを見るような目でつぶやいたんだ。

「人間は死んだあとのことを、いろいろ夢見るようじゃな。テーブルを囲んで楽しくプリンを食べてみたり、夜空に上って星になってみたり」

ボクは胸をつかれたようにハツとしちゃった。だって寝る時ボクはいつも、夜空のお星さまになってお母さんの力になってやれたらなあって、思ってるんだもの……。

「わしが言ったことも、わしらタヌキが見ている夢かもしれん・・・」

「おじさんの言った神さまって、地球を作った神さまのこと？」

ノゾミちゃんがまたたずねた。館長タヌキはイタズラっぽい目をボクたちに向けると

「いいや、わしらの神さまは地球を作った神さまではない。わしらの神さまは、今、ここにおるのじゃ」

って言ったんだ。ボクはタケシくんにつられて思わずあたりを見回しちゃったけど、館長タヌキ、自分のことを神さまって言ってるのかなって思ったんだ。

「いいや、わしじゃない。ここじゃ、ここじゃよ」

館長タヌキはそう言うと、両手でつえをにぎってトントンたたいたんだ。

「地球じゃ。地球が、わしらの神さまなんじゃよ」

「ボクのお父さん、地球は石ころでできてるって、言ってた、よ」

タケシくんがイスから身を乗り出すようにして言ったんだ。

「地球は石ころでできておる。じゃが、地球は一人の神さまでもあるのじゃ」

館長タヌキはそう言うと、リング箱から立ち上がってお月さまに向かつて手を合わせたんだ。それから右手でつえを持って月に向かって差し出すと、トントンってたくようなしぐさをしたんだ。そうしたらね、ボクたちの上の夜空が、ルリ色から少しずつ青色に変

わっていったんだよ！今はもう、澄みきった青空が広がってたんだ。

「空はどこまでも青く澄んでおる。ここに、タマシイが帰ってくるのじゃ。じゃが、タマシイはひとつでは目に見えん。タマシイは力じゃからな。それを地球の神さまが、強く吹いたり弱く吹いたり、たわむれに息を吹きかけてタマシイを集めて、いろいろな雲を作って遊んでおるんじゃよ」

抜けるような青空にはね、満月が白く残ってたんだ。館長タヌキはその満月に向かって手を合わせてから、またつえでトントントンってたたいたんだ。そうしたら月の中からね、白い雲が次々に生まれてきたんだよ。絹の糸のようにたなびいたり、羊の群れのように広がったり、モクモクした夏の雲のようにふくらんだり・・・ボクたちみんな上を向いたまま、青空を流れて行く雲たちのドラマに心を奪われていたんだ。

ほんとうにそれはドラマだったよ。ボクはこんな近くで雲を見るのは初めてだった。雲たちはね、一瞬も同じ姿をしなかつたんだ。ボクたちが幼稚園でやるおゆうぎのように、手をとったり離れたり、輪になったりみんな走ったり・・・そうやって青空を流れて行きながら、少しずつ消えて行ったんだ。

「神さまはこうやって、青空のカンバスに雲でいろいろな絵を描いて、楽しんでおられるんじゃよ」

館長タヌキの声が、どこか遠い世界から来るように聞こえたんだ。ボクたち三人とも上を向いたままだった。少し首が痛くなってきたけど、雲のドラマは、ほんとにいつまで見ても見あきなかったよ。

「地球は生きておる神さまじゃ。おまえたち、生きてることは息をすることのほか、どんなことがあるかな」

ボクたち三人とも、うわのそらだったんだ。館長タヌキはそんなボクたちの姿を見て笑いながら

「空を見たままでよいから、手を左の胸にあててごらん。どうかな」
ってきいたんだ。

「ドキドキしてる、よ」

タケシくんが答えた。

「心臓が、みやくを打ってるんだ」

ボクもタケシくんに続けて言った。

「そうじゃ、そうじゃ。生きとるものはみやくを打つとる。心臓がドキドキして、血を送つとるんじゃ。地球の神さまにも、血が流れておる。次はそれをおまえたちに見せてやろう」

館長タヌキがうれしそうに言うと、青空から雲が消えて、空の色がまた濃い青にもどつ

ていったんだ。ボクが顔を横に傾けると、館長タヌキはまた月に向かってつえを差しのべていた。ボクはルリ色の夜空にもどすのかなって思ったけど、そうじゃなかった。深い湖のような色で止まったんだ。湖・・・お母さん・・・。

「地球の神さまにとつては、水が血なんじゃ。水は空から雨になって降り、雨は川となつて海に流れこむ。海の水は、また空に上つて雨になるのじゃよ。こうやって水は、地球の神さまの体の中をめぐるおるのじゃ。神さまは水という血を波打たせながら送っておる。おまえたちも海へ行つた時に、砂浜に波が打ち寄せているのを見るじゃろ。あれが、地球の神さまが心臓をドキドキさせてみやくを打つとるあかしじゃよ」

そう言うのと館長タヌキは、また月に向かって手を合わせると、つえを差し出してトントんとたたいたんだ。そうしたら湖の中に白い影を落としている月から、波が起きてきたんだよ。波は少しずつ広がって、この広場をおおう空いちめに伝わったんだ。ボクは不思議な気になっちゃった。だつて、海の波を、下から見上げてたんだもん。ボクたちは頭を上げたまま黙っていた。海にもね、こんなにくささんの表情があるなんて、ボク知らなかった。同じように見える波がね、ひとつひとつちがってたんだよ。大きな波や小さな波、横にゆれたり輪を描いたり・・・ほんとうに波たちがダンスを楽しんでいるようだった。

「水にはもう一つ大きな役わりがある。それはタマシイを運ぶことなのじゃ。タマシイ

というのは生まれたばかりの赤んぼうのようなものでな、自分では歩けんのじゃよ。それでどうしても水の助けがいる。空から雨が降る時、水はタマシイをいつしよに連れてくるのじゃよ。そして大地に一つの生命せいめいが生まれると、タマシイは水から離れてその生命せいめいの中に宿るのじゃ。生命いのちあるものが死ねば、タマシイはまた水の力を借りて空へ帰って行く。タマシイにとって水は、ゆりかごのようなものじゃな……」

館長タヌキの声を聞きながら、ボクは来る時に山道でオシッコをしたのを思い出してハツとなっちゃったんだ。ボクたちのオシッコも川に流れて地球の神さまの体を汚しちゃったんだ。いけないことをしちゃった……。

「いいや、おまえたちのオシッコくらいは、神さまも許してくれるじゃろ」

館長タヌキが笑いながら言ってくれたので、ボクはホッとした。ノゾミちゃんはクスツツて笑った。タケシくんが空を見上げたまま

「地球の神さまって、死ぬことはないんだ、ね」

って、カンシンしたように言ったんだ。

「そうあってほしいものじゃが……」

館長タヌキが声をひそめて言うと、空の海がね、急に波立ってきたんだ。

「地球の神さまもカゼをひかれることはある。そうすると、海は荒れ、空の雲はちぎれ

るように飛んで行くのじゃ。神さまの息が荒くなつてな。じゃが・・・じゃが今はちがう。神さまが力ぜをこじらせて、とうとう胸を悪くされてしまったのじゃよ。神さまは呼吸こなんにおちいつておられるんじゃ・・・」

ボクのお母さん。お母さんも胸を悪くして、夏まえに、湖のそばの療養所へ入院しちゃったんだ。ボクが心配してお父さんに

「お母さん、どうしちゃったの」

って何度きいても、お父さんは

「ウン、心配しなくてもいいんだよ。お母さんはね、胸を少しわずらつて、空気がきれいで静かなところで体を休めてくるだけなんだから」

ってしか教えてくれなかつたんだ・・・。

「神さまが胸を悪くされてしまったのは、タマシイが減ってきたためなんじゃよ。神さまはタマシイを呼吸されておるのじゃ。わしやおまえたちが空気を呼吸して生きておるようにな。そのタマシイが減ってきたために、呼吸こなんにおちいつてしまったんじゃよ・・・」

お母さん。お母さんも、そんなに苦しんでいるの・・・。

「先ほどわしはおまえたちに、タマシイは生命いのちあるものが死ぬと空へ帰ると言うたが、その生命あるものが殺されてしまうと、タマシイは永遠に失われてしまうのじゃよ。カズ

オのお父さんがよいことを言うておったが、ワタは空へ上れば雲になるが、落ちてしまう
とワタぼこりになってしまふ。タマシイもそれと同じでな、生命あるものが殺されてしま
うと、そのタマシイはワタぼこりのようになって地球の神さまを苦しめてしまふんじや。

五十年前の戦争の時も、地球の神さまは呼吸こんなんにおちいられた。戦争でたくさん
の人間が殺された。わしらタヌキはそんなことはせん。人間以外のどんな生きものも、仲
間どおしで殺し合うようなことはせん。わしらが殺すのは、生きるためにほかの生命を食
べる時だけじやよ、それもイケイの念をこめてな……。殺されたのは人間だけではない。
わしらの歴史考証館のタヌキが証言しておったように、わしらの仲間も人間に食べる物を
奪われて、数多く死んでいった。それは飢え死にじやが、戦争で殺されたようなもんじやよ。
数えきれぬほどの生命あるものが戦争で殺され、限らないタマシイが滅びていった……。
悪夢のような戦争も終わって、ようやく神さまも胸の痛みをいやされてきたのじやが、今
度は、こともあるうに、おまえたち人間がヤマイにかかってしまった。ハンエイという名
前の、おそろしいヤマイにな……。

わしらの住むうら山の雑木林に、またおまえたち人間が入りこんできた。わしらはまた
戦争か、と恐れたが、そうではなかった。あの時のように、おまえたちは食べる物を求め
て森へ入ってきたのではなかったのじや。あとは、先ほどのタヌキが証言したとおりじや。

わしらは森を追われて、食べる物がなくて夜のマチへ下りて行った。そこでわしらが目にしたのは、ありあまるほどの食べ物じゃった。じつさい、まだ食べられる物がくさるほど捨ててあったよ。わしらはこの目が信じられなかった。なぜかと言うて、わしらはな、おまえたち人間が食べる物がなくなつてわしらを森から追い出したものとはばかり思いこんでおつたからじゃ。それが、おまえたちのところには、くさるほど食べ物があふれておつた……。おまえたち人間が森へ入つて木を切り倒したのは、何も今が初めてではない。昔から人間はそうやってきた。じゃがな、それは生きるためにしてきたことなのじゃ。人間は強いようで弱い生きものでな、たとえばおまえたちにはわしらのような毛がないから——

そういうと館長タヌキは、足もとまで垂れ下がった長い毛をつまんでみせたんだ。

「体を暖めるにしても、木を切つてマキにして火にくべなければ、寒さで死んでしまう。昔の——と言っても、遠い昔じゃが——人間たちは、そうやって木を切らなければならぬ時には、必ず祈りをささげていたものじゃよ。木のタマシイは、切つて燃やしてしまえば、永遠に失われてしまうからな。自分たちがほかの生命あるものの力で生かされていることをかた時も忘れなかつたからこそ、遠い昔の人間たちは、タマシイへのイケイの念を失うことはなかつたのじゃな。」

それが、今は……。今はどうじゃ。おまえたちが切り倒した木は、誰もかえりみる者も

なく、野積みにされて腐り果てておる。おまえたちは、遠い昔の人間のように、その木を切らなければ生きていけないから切ったのではなかった。食べるためでもなければ、生きるためでもない。それでは何のために？ そんなわしらのギモンをよそに、おまえたちは森をつぶし、山をえぐり続けた。何かにとりつかれたように、とどまるところを知らずにな。そんなおまえたち人間の姿を見て、わしらは「ハンエイのヤマイにとりつかれてる」と名づけたんじゃないよ。ハンエイというのは、食べる物が満ちあふれていることなんじゃないよ。うしてそれがヤマイなのか？ それはな、ありあまるほどの食べ物に囲まれておると、自分たちが生命あるものの方で生かされていることを忘れて、タマシイへのイケイの念をなくしてしまうからじゃ。そうすると、自分たちのタマシイも腐らせてしまふんじゃないよ……」

見上げると、海は波立ったままだった。ボクは教会のバザーのことを思い出してた。「アフリカなんみんな救援」のために教会で開いたバザー。お父さんたち「ポランの広場」でも、無農薬野菜のお店を出したんだ。お父さんは

「こんな時じゃないと、会のお手伝いができないから」

って言って、一日じゅう店の売り子をしてたんだよ、野崎のおじさんや恵子姉さんといっしょに。でも、お父さんたちのお店には、客はサッパリだったんだ。みんな、掘り出し物イチヤモギ店の方に流れちゃってね。ボクもタケシくんとノゾミちゃんと遊びに行つて、

金魚すくいや輪投げをしてべっこうアメを買ってなめながらお父さんたちのお店に帰ってくる、手もちぶさたなようすでイスにすわってた野崎のおじさんが、お父さんや恵子姉さんに向かってグチをこぼしてたんだ。

「アフリカに毛布を送るためのバザーもいいけどね、オレたちもこうやって店を出して売り上げをカンパしようっていうんだから。でも、ナンカ変だよなあー。金を送るのもいいけどさー、日本人、もつと身近なところで見なおす必要があるんじゃないの。アフリカの人たちが飢えてるのは、オレたちが食べる物を奪ってるからなんだよな。それをおいといて、慈善だ、慈善だっていうの、オレ、好きじゃないなあー」

「野崎さんのいつも言ってる、身土不二シンドフニの思想ね。身近なところでとれたものを食べるっていう・・・」

恵子姉さんが、お客でにぎわっているモギ店の方を見ながらタメ息まじりに言った。野崎のおじさんは

「アア」

って言ったまま頭をかかえこんじゃった。それを見てボクのお父さんもポツンとつぶやいたんだ。

「人間って、身近なことが、一番遠い問題なのかもね。人と人とのあいだでも」――

「でもノゾミたち、食べないと生きてゆけないわ」

ノゾミちゃんが悲しそうな声で言った。ボクも思わずうなずいてた。タケシくんは足をブラブラさせながら聞いていた。

「そうじゃ。わしらタヌキも、ほかの生命いのちを食べていかなければ、一日も生きてゆけん。じゃがわしらはな、少なくともタマシイへのイケイの念は失わずにおる。わしらはほかの生きものを殺して食べる時には必ず感謝の祈りをささげておるし、もしわしらがのたれ死にでもしそうになったら、わしらは喜んで人間やほかの生きものにわしらの生命を差し出すのじゃ。それはなぜかと言うとな、生命あるものが殺されてしまうとタマシイは滅びてしまうが、食べられる時だけは別なのじゃよ。食べられたもののタマシイは、食べた方に宿って生き続けるのじゃ。わしらがのたれ死んでしまえば、わしらのタマシイだけでなくわしらが食べてきた生命あるもののタマシイも滅びてしまうが、わしらがほかの生きものに食われれば、タマシイはみな生き続けていっしょに空に帰ることができるからじゃ。わしらの歴史考証館のタヌキが言っておったのは、そのことなんじゃ。

おまえたちも畑の手伝いに行つとるから分かるじゃろうが、あの畑には、ひとにぎりの土の中に、数えきれない生命が生きておるんじゃよ。わしらの目には見えない生きものたちがいて、それを食べるミミズや地虫ぢむしのようなのがいて、またそれを食べるモグラやネズ

ミがいて、わしらがいて……。生きものの世界はな、そうやって食うか食われるかで成り立っておるんじゃ、ひとつの輪のようにな。おまえたち人間もその輪の中におる。じゃが幸か不幸か、おまえたち人間が食べる生きものはあつても、おまえたち人間を食べる生きものはいないのじゃよ。わしらはな、おまえたち人間がどうしてこれほどタマシイへのイケイの念をなくしてしまったのか、おまえたちを食べる生きものがおれば、そんなこともないかもしれんと思うこともある――

「ボクたち、食べても、おいしくない、よ」

タケシくんが足をブラブラさせながら言ったから、ボクとノゾミちゃんは吹き出しちゃったんだ。周りのタヌキたちも、クスクス言つて笑つてた。ボクは笑いながら、子どもも図書館で見た恐竜の絵を思い出してた。あの恐竜なら人間を食べちゃうけど、恐竜はもう滅びちゃつたからダイジョウブなんだ……。

「ホホホホ、そうか、そうか。そういうことがないようにな……」

館長タヌキは笑いながら言うつと、リングゴ箱の上ですわりなおしてから目を光らせて言ったんだ。

「わしらの願いはただひとつ。おまえたち人間が一日も早くタマシイへのイケイの念をとりもどして、わしらも人間たちも、生きとし生けるものがみな生き合える世界にしてほ

しいということじゃ。おまえたち人間にはそうするギムがある。なぜかと言うと、おまえたち人間はそれだけほかの生命あるものを殺して食べておるのじゃからな。それに、それだけの力もある。タマシイは力じゃ。おまえたちの中には、おまえたちが食べてきた生命あるもののタマシイが満ちみちておるのじゃ。その力を、戦争で殺し合ったり、ハンエイのヤマイにとりつかれてタマシイを滅ぼすことに使わないで、みなともに生き合える世界をつくるためにつくしてほしいものじゃよ。地球の神さまが、これ以上苦しまなくてもよいようにな・・・」

館長タヌキはそう言うのと、立ち上がって海の中の月に向かって手を合わせた。空の海はね、いつの間にか波がおさまって、鏡のようになめらかだったんだ。月はその中で、静かな光をはなっていた。館長タヌキが月に向かってつえを差し出すと、空の色が少しずつ濃くなって、またもとのルリ色にもどったんだ。お月さまも、黄色のアップリケのように浮かんでいた。

「どれ、わしの出番もそろそろ終わりじゃろ。あとは——」

館長タヌキがそこまで言った時、タケシくんがいきなり口をとがらせて言ったんだ。ボクもノゾミちゃんもタケシくんを見つめた。

「おじさんの言った、こと。ボクたちが、アオキの木ぬいちゃったの、悪かったけど、

ボクたちまだ、子どもだ、よ。そんなこと、オトナに言つて、よ」

館長タヌキは二、三度うなずくと、またリング箱の上にすわつて話し始めた。

「そうじゃ、タケシの言うとおりじゃ。おまえたちには何のセキニンもないからな。じゃが、じゃがな・・・おまえたちはまだ幼稚園じゃが、学校へ上がつて読み書きを習い始めると、もうわしらと話をするのができなくなつてしまふんじゃよ・・・」

ボクはハツとしちやつた。だつてボクは、よく子ども図書館へ行つて絵本や小学生の読むような本を借りてきて、夜、お父さんに話してやるんだもん・・・。

「いいや、学校に行くなど言つてるんじやない。そんなことをすれば、おまえたちが人間社会で生きてゆけんからな。読み書きを習つてチシキを身につけることも、おまえたちには必要じゃ。じゃが、ともすれば人間たちはチシキを得ると、タマシイへのイケイの念を失つていくようだな・・・。わしらタヌキは読み書きがでкин。わしらには文字というものがないのじゃよ。『それならどうやつて古い時の記録を残しておくの』とノゾミはギモンに思つたようじゃが——」

ノゾミちゃんはコックリとうなずいた。

「わしらは歴史考証館というものを持つておる。そこにはな、毎年一匹ずつタヌキを、イタチの力を借りて保存してあるんじゃ。わしらが何か昔のこと知りたくなつたら——

何か忘れてしまったようなことがあったら——そのタヌキをよみがえらせて直接きいてみるんじゃない。さっきの証人タヌキの時のようにな。おまえたち人間のように文字に書いて残しておくのと、わしらのように直接耳からきくのと、どちらが——

「今は、ビデオもある、よ」

タケシくんが足をブラブラさせながら口をはさんだ。タケシくんのお父さんはビデオにこつてて、この前の運動会の時も、一生けんめいタケシくんの姿をとってたんだ。

「ホホウ、そうじゃったな。おまえたち人間は、わしらタヌキには及びもつかないものを作り出してきおった。チシキの力で……」

じゃがな、おまえたち人間もわしらタヌキも同じ生命いのちあるものだということ、地球の神さまのひとつのタマシイを、いっしょに分け合っているのだということは、いつまでも忘れないでいてほしいものじゃよ。今日はそのことをおまえたちに伝えたくて、呼んできてもらったんじゃないよ。わしの言ったことは、分かってくれたかな」

「ウンー！」

ボクたち三人ともいっしょに声を出してた。館長タヌキはうれしそうにうなずくと

「どれ、あとは裁判長と検事におまかせしよう」

って言いながら立ち上がったんだ。裁判長タヌキはあいかわらずイビキをかいて寝てた

けど、検事タヌキは「分かりました」って言うように館長にうなずいてみせた。周りのタヌキといっしょにボクたちも立ち上がった。館長タヌキは、書記タヌキに支えられるようにしてゆつくりと右手から消えて行つた。ボクたちは自然に頭を下げてたんだ。館長タヌキの姿が見えなくなると、ボクたちはイスに腰を下ろした。ケシくんが

「センニン、みたいだ、ね」

ってボクの耳もとでささやいて、ボクもうなずいた時

「フアツ、ハツ、ハアー」

リンゴ箱の上で横になつてた裁判長タヌキが、のびをしながら起き上がったんだ。

「どれ、シンリを再開することにしよう」

裁判長タヌキが鼻水を手でふきながら言ったから、ボクたち、それ見て吹き出しちゃつたんだよ。

「セイシユクに、セイシユクに。それでは検事にキュウケイを述べてもらおう」

「キュウケイって、ナーニ？」

タケシくんが足をブラブラさせながらきいた。

「おまえたちのバツのことじゃ」

「ムザイだ、よ。ムザイだ、よ」

タケシくんが言うのと、ノゾミちゃんも

「そうよ、そうよ」

って続けた。ボクも、館長先生があんなにやさしく話してくれたんだからムザイに決まってるよって、思ったんだ。検事タヌキは立ち上がったままトホウにくれてるみたいだったけど

「ごらんのとおりの状態なので、あえてこちらからは申しません。裁判長のご判断におまかせします」

って言うのと、腰を下ろしちゃったんだ。

「ウム、それでは・・・」

裁判長タヌキは「コホン」てセキばらいをすると、円ぶちメガを持ち上げて言った。

「判決を下す。被告たちは、シケイー」

「エ?!」

ボクたち三人とも、思わず声を上げていた。死刑だなんて・・・ボクは何にも考えられなくなっちゃった。

「ヤダーイ、ヤダーイ、死刑なんて、ヤダーイ」

タケシくんとノゾミちゃんが声を合わせてダダをこねてた。そうしたら裁判長タヌキは見るからにあわてたようすで

「コラコラ、よく聞くんじゃ。シケイではなくて、チケイじゃ
って言ったんだ。」

「チケイ？」

タケシくんとノゾミちゃんは、キョトンとして顔を見合せてた。ボクは思わず立ち上がってたんだ。

「ボク、知ってるよ。ズボンをぬいで、お尻をムチで打たれるんだ！」

お父さんが読んでくれたグリム童話にのってたんだ。お尻を血が流れるまで打たれるんだ。

「そんなの、イヤーダ、イヤーダ」

ノゾミちゃんがベソをかき始めた。そうしたら裁判長タヌキはね、ほんとにこまったよ
うです。検事タヌキの方を見て言ったんだ。

「ちがう、ちがう。わしらタヌキはそんなことはせん。チケイのチは、ムチのチでもな
ければ赤い血のチでもない。知恵のチじゃよ」

「チエのチって？」

泣きやんだノゾミちゃんがたずねた。

「知恵の輪という遊びがあるじゃろ。アレじゃ。今日はおまえたちにな、知恵のバツを
受けてもらおうと思って呼んだんじゃよ」

「何だ、やっぱり、バツじゃない、か」
タケシくんが口をとがらせた。

「いいや、これはバツと言うよりも――」

裁判長タヌキはそう言うのと、検事タヌキと顔を見合わせてニヤツとしたんだ。

「旅行と言った方がよいな。知恵への旅じゃよ。その旅におまえたちを招待したのじゃ。これは、誰でも招待するものではないぞ。おまえたちは、とくべつ、わしらのメガネにか
なつたのじゃ」

「どうして、ボクたち、ショータイされた、の？」

タケシくんがきくと、裁判長タヌキはいきなり指をパチン！と鳴らして
クワルンバ！

って叫んだんだ。そうしたらね、しゃがんでいた子タヌキたちがいつせいに立ち上がると、教会の聖歌隊のような声で歌いだしたんだ。

いまは――

ときが

みちる

ときが

みちる

たたかいの

とき

いまは—

ときが

みちる

ときが

みちる

たたかいの

とき

美しいソプラノの声だった。歌い終わるとまたしやがみこんだんだけど、ボクたちはね、もうアツケにとられて見ていたよ。

「なぜおまえたちを招待したのか。それは、検事から説明してもらおう」

裁判長タヌキが目くばせすると、検事タヌキが勢いよく立ち上がってしゃべりだしたんだ。

「地球のキキを救うために——虹の作戦その一〈ヘリンゴの歌〉。先ほど館長先生が申されましたキキの事態を打開するために、われわれはナントカ人間たちにイケイの念をとりもどしてほしいと、あえて物ごいの姿で人間たちの庭に下りて行きました。そして、ほんとうはわれわれタヌキはリンゴはそれほど好きではないのですが、リンゴが好物であるかのようにふるまうことによつて、人間たちに気づいてほしかったのです。なぜリンゴなのか？それは、リンゴが知恵の実だからです。五十年前の戦争が終わった時、人間たちはリンゴの実を見て涙を流しながら歌を歌っていました。愚かな戦争でどれほどの血が流され、タヌキが奪われたのか、それを思つて泣いていたのですが、ノドモト過ぎればアツサ忘れる。今またハンエイというヤマイトりつかれてしまった人間たちに、われわれはリンゴの実を示して気づいてほしかったのですが・・・何ということか！人間たちはわれわれの姿を、新聞の三面記事にとりあげてオモシロオカシク笑いものにするだけだったのです！」

「ノゾミちゃん、あのタヌキ、サクセンだったんだ、よ」

タケシくんがノゾミちゃんに向かって言うと、ノゾミちゃんは

「ウウン、もういいの」

って明るい声で答えたんだ。

「ウソもほうべんと言っじやろ。あれじゃよ」

裁判長タヌキはそう言うのと、また指をパチン！と鳴らして

クワルンバ！

って叫んだんだ。子ダヌキたちが立ち上がって、さっきの歌をまた歌った。ボクはね、歌を覚えちゃったよ。子ダヌキたちが歌い終わると、検事タヌキが続けたんだ。

「地球のキキを救うために——虹の作戦その二（夢の招待状）。前回の作戦の失敗にかんがみて、われわれはもう少し長期戦でのぞむことにしました。人間のオトナたちは重症なので、まだそれほどハンエイのヤマイにおかされていない子どもたちをターゲットに選んだのであります。それなら子どもなら誰でもよいのか？そうではありません。先ほど館長先生が申されましたように、小学校に上がってしまうと、もう子どもたちはわれわれとは話ができなくなってしまうのです。われわれには、コトバが理解できてしかも小学校へ上がっていない子どもたちしか残されていません。しかしその子どもたちも、生まれた時から食べる物に満ちあふれていたのです、はたしてわれわれの語ることが分かってもらえるかどうか、ハナハダ不安でありました。そこでわれわれは、全国の自然食の共同購入を行っている団体を調べ、その中から先にあげた条件に合う子どもたちをピックアップしたので

す。なぜ自然食なのか？それは、食べるということに関してイシキの高い家庭の子どもの方が、われわれの語ることに耳を傾けてくれるのではないかと期待したからであります。そしてその期待は――

検事タヌキがそこまで言うくと、裁判長が後を引きとったんだ。

「かなえられたようじゃな」

「じゃあ、お野菜がなくなったのも――」

ノゾミちゃんがきいた。

「そうじゃ」

「あのアオキの木や――」

「ホコラも？」

タケシくんとボクが続けてきいた。

「そうじゃ、そうじゃ。おまえたちに来てもらうためのな、ほうべんじゃよ。わしらタヌキにも、それくらいのことではできる。イタチの力を借りてな」

「ナーンダ、ボクたち、タヌキに、ばかされてたんだ、ね」

タケシくんが言うのと、みんな吹き出して笑ったんだ。タヌキたちの中にはね、楽しそうにポンポコおなかをたたいてるのもいたよ。

「虹というのは――」

裁判長が口を開くと、タヌキたちはまた静かになったんだ。

「雨が降って上がった時に空に立つじやろ。あれは、タマシイが空から雨といっしょに降りて来て生命せいめいに宿ったのを見て、神さまがもらされるよろこびのタメ息なんじやよ。わしらもそれにあやかろうと思って、〈虹の作戦〉と名づけたんじや。神さまのよろこばれる顔がもう一度見たくてな……。それではわしらの招待旅行、誰から先に受けてくれるのかな」

「ボクがイチバン、だ！ボクがイチバン、だ！」

タケシくんが手を上げて飛び出したんだ。

「ホホウ、やはりおまえからか」

裁判長タヌキはカンシンしたようにうなずくと

「では、準備にとりかかろう」

って言って立ち上がったんだ。そうしたらボクたちを囲んでいたタヌキの輪がくずれて、リング箱やボクたちのすわっていたイスがすぐに片づけられると、書記タヌキがタケシくんのところにやって来て、目に何かはりつけたんだ。

「じゃあ、ね」

つて言つて振り向いたタケシくんの顔には、イチヨウの葉っぱが二枚、目にはつてあつたんだよ、目かくしのように。タケシくんは書記タヌキに連れられて、館長タヌキの消えた方に行つてしまった。タヌキたちはみんな、オシクラマンジュウをするようにボクたちの前に集まつてきた。ボクとノゾミちゃん、それに裁判長タヌキだけがその輪の外にいたんだ。

「タケシ、そこから飛び下りるんじゃない！シキュウがおまえを守つておるぞ！」

裁判長タヌキが声をかけた方にボクも顔を上げると、思わずアツ！つて叫んじゃつた。ボクたちの右手にはね、いつの間にか高いガケができて、タケシくんはその上に書記タヌキと立つてたんだ。ボクは、シキュウつて何だろう、裁判長タヌキ、またチとシを言いましがえたのかなつて頭の片すみで思いながら、タケシくんあぶない！つて声を上げようとした時、タケシくんは両手を前に出して飛びこみ選手のように飛び下りたんだ。

キヤー

ノゾミちゃんが叫んで手で顔をかくしちゃつたけど、指の開からはね、しつかり見てたんだよ。ボクもかたずをのんで見守つた。タケシくんの体は、飛びこみの選手のように空中で一回転すると、下で手を上げているタヌキたちの上に落ちてきたんだ。ボクは思わず目をつぶっちゃつた。次の瞬間、タケシくんの体はトランポリンの網のようにタヌキたちの手の中に沈んでたんだ。反動でまたはねるのかなつて思つてたら、そうじゃなかつた。

タケシくんの体はタヌキたちに抱きかかえられてたんだ。

「アー、よかった」

ノゾミちゃんがホツとしたようにタメ息をついた。ボクも胸をなで下ろした。タケシくんは地球の神さまに守られていたんだ……。

書記タヌキからイチョウの目かくしをはずされたタケシくんは、ボクたちに向かって

「気もちよくて、オシッコ、もらしちゃった、よ」

って言うのと、半ズボンのまたのところに手をやったんだ。それを聞いてタヌキたちがクスクス笑ったよ。ボクも笑いながら

「タケシくん、すごかったね。あんな高いところから——」

って言いながら顔を上げたら、もうあのガケはなくなってたんだ。

「ヘッチャラ、さ。ボクは、まいばん、お父さんとプロレスごっこ、やってん、だ。フトンの上、で」

タケシくんは胸をはって言ったんだ。

「次は……カズオ、行ってみるかな」

裁判長タヌキがボクを見つめて言った。

「ウン」

ボクは少し不安だったけど、うなずいてた。タケシくんに来たんだし、それに地球の神さまが守っていてくれるんだ……。

「カズオくん、気をつけてね」

ノゾミちゃんの声に送られて、ボクはタヌキたちの輪の中に入って行った。タヌキの生ぐさいニオイはもう気にならなくなってたんだ。書記タヌキがイチヨウの葉っぱを目にはりつけると、タヌキたちがボクの周りを囲んだようだった。

「カズオ、そこで回るんじゃ！おまえのお母さんに会いに行くために！」

裁判長タヌキの声が聞こえると、タヌキたちのやわらかな手がボクの体にふれたようだった。そうしたらね、ボクの体が回り始めたんだよ。はじめはゆっくりと、それから少しずつ回転が早くなって、コマのように回っていったんだ。目は回らなかつたけど、どこまで回るのかなって不安に思ったら、いきなりグイッって体が持ち上げられたんだ。ボクはね、竹トンボのように舞い上がってたんだよ！ボクは鈴木のおばあちゃん家の裏庭チから舞い上がったんだ。ボクの住む町が見えて、ゴルフ場の緑の芝生が見えて、となり町が見えてきて……ボクは少しずつ上って行ったんだ。そうしたら遠くに湖が見えてきたんだよ、山の中に。湖の水面は、鏡のように光ってた。ボクの体は湖の方に流されて行ったんだ。その湖はね、お母さんの入った療養所のある湖だったんだ。湖を見下ろす山の斜面に

ね、大きく、「大」の字が描かれていたんだもん……。

——夏、ボクはお父さんとお母さんを見舞いに行った。お母さんは胸を悪くして、夏まえにあわただしく入院しちゃったんだ。夏休みに入ってお父さんも会社の休みがとれて、ボクは初めてお母さんを見舞いに行くことができたんだよ。夕方、湖の岸にたつ療養所に着くと、お母さんがユカタ姿でボクたちを待っていた。ボクは、お母さんがユカタを着てるのを初めて見た。ボクたちは食堂のすみのテーブルにすわって、お父さんが作って持って行った五目ずしを食べたんだ。お母さんは顔色が少し青白くて声もかすれてたけど、でも子どものようにハシャイでたんだよ。そんなお母さんの姿を見て、ボクはかえって不安になつちやっただ。食事が終わったあと、大文字焼つていうのが見られるつて言うから、ボクたちテラスに出てみたんだ。ボクはお父さんとお母さんにはさまれて立つた。お父さんとお母さんに手をにぎってもらつてね。湖の向こう岸の山の斜面に、大きな「大」の字の火が赤く燃えてたんだ。

「お父さん、あの火、何燃やしてんの？」

ボクはお父さんにきいてみたんだ。

「ああ、あれはね、松のタイムマツを燃してるんだよ。お盆で亡くなった人のタマシイが帰ってきたのを、またああやって火をたいて送っているんだよ。帰り道が分からなくならない

ようにね」

「フーン」

ってボクがうなずいてると、お母さんが

「人が燃えてるようだよ」

ってつぶやいたんだ。ボクはドキッとしちゃった。

「生きなさい、生きなさいって、励ますように・・・」

そう言うよね、お母さんはくずおれるようにボクを抱きしめると泣き続けたんだ。ボクがどうしていいか分からなくてお父さんを見たら、お父さんは黙って大文字の火を見たままだったんだ――

湖の上まで来ると、ボクの体は少しずつ落ちていった。湖のほとりに、大きなイチヨウの木が一本立ってた。鈴木のおばあちゃん家のつくりのような家の庭にね。イチヨウの木には、もう葉が二、三枚しかついてなかった。えんがわに、女の人がすわってるのが見えた。それはね、ボクのお母さんだったんだ！お母さんは、赤ちゃんをあやしなからオツパイをあげていた。ボクは

「アレ、お母さん、いつ赤ちゃん生んだらろう？ボクは、ボクはどうなっちゃうの？」
って叫びながら落ちていった。風が吹いて、イチヨウの木に残っていた葉っぱがみんな

散っちゃったんだ。お母さんが顔を上げた。お母さんはニッコリ笑うと、ボクに向かって「いいのよ、いいのよ。おまえはどこにいても、お母さんの子だからね」

って言うてくれたんだ。ボクは泣きながらお母さんの胸に飛びこんで行くと、オッパイにむしゃぶりついたんだ。お母さん、早く帰ってきて・・・・。

やわらかいものがボクの顔にふれて、ボクは目を開けた。書記タヌキがボクの目からイチヨウの葉っぱをはがしたんだ。タケシくとノゾミちゃんがボクを見ていた。

「カズオくん、すごかったわ」

「お月さまに、チュ、してきたんだ、よ」

タケシくんが言うと、周りのタヌキたちがほほえんだんだ。ボクは顔を上げて月を見た。お母さん・・・・。

「さあ、最後はノゾミの番じゃな」

「ハイ」

ノゾミちゃんがうれしそうに答えた。ボクはボンヤリしたままタヌキたちの輪の外に立ってた。ノゾミちゃんはイチヨウの葉っぱはしないで目をつぶると、胸のまえで手を組んでから少しづつ体を後ろに倒していったんだ。タヌキたちの手がそれを支えて持ち上げた。ボクは何だか、お葬式の行列のようだなって思った。ボンヤリ見ていたボクの目に、さつ

き証人で出たタヌキの姿が映ったんだ。あの時のようにやせてはいなかったけど、片っぼ
うの耳が折れてたから、確かにあのタヌキだよ。証人タヌキはボクと目が会うと、片目を
つぶってウインクしてみせた。

「ノゾミ、そこで眠るんじゃ。生命いのちを宿すために」

裁判長タヌキが静かに言うと、タヌキたちはノゾミちゃんの体を差し上げた。

ルー

ララララ

ルー

ルー

ララララ

ルー

野原のススキの穂を渡る風のようにタヌキたちが歌うと、ノゾミちゃんの体は横になっ
たまま上って行ったんだ。タヌキたちの歌声に送られてノゾミちゃんの体は満月の中へす

いこまれるようにして入ると、ノゾミちゃんはね、三日月のような姿で眠ったんだ。まるでお月さまを、ゆりかごにしているみたいだった。タヌキたちが歌いやむと、裁判長タヌキが月に向かって手を合わせて

「生命がふたたびよみがえりますように……」

って祈ったんだ。その姿を見ていたら、歴史考証館の館長先生と重なって見えたよ。

ルー

ララララ

ルー

ルー

ララララ

ルー

タヌキたちがまた歌い始めた。ノゾミちゃんは月の中で立ち上がると、両手を差し上げて、カエデの種のように舞い降りてきたんだ。ノゾミちゃんの体はね、月の光をおびたよ

うに輝いていた。ボクはまぶしくて手をかざしたんだ。

サヨウナラ

サヨウナラ

サ・ヨ・ウ

ナラー

サヨウナラ

サヨウナラ

ア・リ・ガ

トオー

タヌキたちの歌声が遠くから聞こえた。ボクの目の片すみで、裁判長タヌキがマントをぬぐと、バツとボクたちに投げかけたようだった……。

目を開けると暗くて何も見えなかった。ボクが頭を回すと

「イタイ！」

つて、ノゾミちゃんの声がしたんだ。

「カズオくん、気をつけて」

ボクはノゾミちゃんのお尻に頭をぶつけてたんだよ。上を見ると、遠くに小さな穴が開いてて光がさしこんでいた。ボクたちはね、暗い土のトンネルの中を、モグラのように四つんばいになって進んでたんだよ。

「もう少し、だ、よ」

タケシくんの声が聞こえた。タケシくんが先頭にいたんだ。土はぬれてもしめつてもいなくて、かわいてた。それに何となく温かったんだ。出口に近づくにつれて明るくなってきた。チラチラ、木の葉がゆれるのも見えてきたんだ。

「ヨイショ！」

つてかけ声をかけながら、タケシくんがまるい穴から飛び下りた。ノゾミちゃんが続いてボクもそのあとから飛び下りようとした時、ボクは穴のふちにつまずいてころんじやつたんだ。幼稚園でやるおゆうぎの Denguri 返しのように一回転しながら、ボクの目に落ち葉が見えて、大きなお地藏さんが見えて——お地藏さんのおなかにはまるい穴が開いてて

ね、ボクたちはそこから出てきたんだよ——空の木の枝が見えて、と思つたら、一瞬で夜の星空に変わったんだ。

ボクは大の字に寝て、星空を見上げてた。ボクはお母さんの胸に抱かれてるようにやすらいでいた。ほんとうにお母さんに抱かれてるのかなって思つたら、静かな波の音が聞こえてきたんだ。ボクはね、海の上のゆりかごの中でゆられてたんだよ。空には満天の星が輝いてた。ボクはサソリの赤い目をさがしたけど、なかなか見つからなかった。サソリはもうかくれちゃったのかなって思つてると、左の方からブルートレインが現れてきたんだ。

それはね、七色に輝く虹のブルートレインだったんだよ！ブルートレインは音もなくボクの上を走って行つた。先頭の機関車から、誰かがボクに向かって手を振つたんだ。タケシくんとノゾミちゃんだった。二人はブルートレインを運転しながら、ボクに手を振ってくれたんだよ。機関車の後ろには、客車は何両も何両も貨物列車のように続いてた。その窓からはね、ボクのお父さんや「ポラン」の人たち、鈴木のおばあちゃん、幼稚園の先生、それにボクの知らない人たちが何人も何人も、笑いながら手を振っていたんだ。人間だけじゃなかった。ボクがさつきまで裁判を受けてたタヌキたち、それにキリンやゾウ、ライオンの動物たちも、窓から顔を出して手や首を振つたんだ。動物のあとには、木や草の乗つた車両が何両も続いた。

ボクはほほえみながら、あのブルートレインは地球の周りをまわってるんだ、みんなに地球の神さまの姿がよく見えるように、って思ったんだ。ボクはもう、サソリのように空に上って星にならなくてもいいんだ。ボクの体は、海の上でも輝いて、みんなの目に見えたんだから……。

「カズオ……カズオ……」

遠くからお母さんの声がして、ゆりかごがやさしくゆれた。ボクがお母さんの顔を思い浮かべた時、夜空が二つに割れて、ノゾミちゃんとタケシくんの顔が現れた。二人はボクの肩に手をかけて、心配そうな顔で見てたんだ。

「カズオくん、だいじょうぶ？」

ボクは頭を振ってみたけれどナントもなかった。立ち上がってみた。

「ウン、だいじょうぶだよ」

ボクが振り返ると、ボクたちの出てきたお地蔵さんがプシューって白い煙を吹き上げて消えちゃったんだ。

「イタチのサイゴツペだ、ね」

ってタケシくんが言っつて、ボクとノゾミちゃんも笑った。ボクたちはね、来る時にオシッコをしたとこに立っつてたんだよ。

「カズオくん、走れる？」

ノゾミちゃんからきかれてボクはうなずいた。

「ウン、だいじょうぶだよ」

ボクはもう泣かなくていいんだ。どこにいても、ボクはお母さんの子どもなんだから……。

「駅まで、キョーソーだ、よ」

タケシくんが言つて、ボクたちは横に並んだ。

イチ、ニー、ノー、サン！

ワアー

かん声を上げながら、ボクたちはかけだした。もう日がかげってきたから、遅くならないうちに家に帰らなくちゃ。ボクはタケシくんのとを走りながら、ズボンのポケットに手をつっこんでみた。ダイジョーブ。カエデの葉は、ちゃーんと入ってた。今日は帰ったら、家でお父さんに報告だ。ボクたちへポランのたんてい団の初仕事を。それに、お母さんにも話さなくちゃ……。

お母さんは、夏に一度、お見舞いに行ったただけなんだ。それからは毎週、お父さんが療養所に電話をかけてる。お父さんが話したあとボクも電話口に出るんだけど、電話をする前はお母さんにアレも話そう、コレも言っておこうって思ってるんだけど、イザ受話器を

とるとボクは何にも言えなくなっちゃって

「カゼひかなかった？幼稚園はどお？」

っていうお母さんの質問に、「ウン」とか「だいじょうぶだよ」ってしか答えられないんだ。今度冬休みにお父さんとお見舞いに行ったら、ボクもチャント話すよ。

お母さん、ボクはブルートレインの運転士になるんだ。地球をまわる虹のブルートレインのね！

カラスの死

ガラガラッと戸を開けて先生が入って来ました。生徒たちはイスや机をガタガタいわせて自分の席にもどりました。康夫も持っていたトランプの札を友だちに返すと、自分の席に着きました。

「転校生だ」「転校生だ」

どこからともなくささやく声がして教室の中をかけめぐりました。見ると、ドアのところに女の子が一人立っていたのです。女の子は見るからに緊張したようすでした。

「キリーツ」

康夫は号礼をかけて立ち上がりました。康夫はこのクラスの級長なのです。みんなも立ち上がりました。康夫は一呼吸おいてから

「レイ」

と号礼をかけました。みんなは頭を下げながら

おはようございます

と言いました。教卓の前に立った綾子先生も一呼吸おくれて

「お早うございます」

と言ってから、みんなは席に着きました。

「今日はみなさんに新しいお友だちを紹介します。シミズヨシコさんです」

綾子先生はドアのわきに立っている女の子の方をチラッと見てからクルリと後ろを向くと、黒板に大きな字で

清水芳子

と書きました。みんなは女の子と黒板の字を見くらべたり、近くの子とヒソヒソ話したりして落ち着きません。女の子の方も緊張のためか、うつ向いたままでした。

「清水さんはお父さんの仕事の都合でこちらへ越してこられたのです。清水さんは——」
綾子先生は少し言いよどんでから続けました。

「小さい時に病気にかかって左足が少し不自由なので、みなさんも気をつけてあげて下さい。それでは——」

綾子先生は教室の後ろの方にすわっている康夫の方に目をやると

「いっしょにごあいさつをしましょう。康夫くん、お願いネ」

と言いました。康夫はまた「キリッ」と号札をかけると、みんな

お願いします

とあいさつをしました。女の子は緊張したおももちでピョコンと頭を下げただけでした。あいさつが終わると、綾子先生は康夫のとなりの席を指さしながら

「芳子さん、席はあそこが空いてますから、あそこにすわって下さい。康夫くん、お願いネ」

と言いました。康夫のとなりの席はいつも空いていて、みんなからは「ハカセの別荘」と呼ばれていました。それは、授業中何か分からないことがあつたらその席へ移つて、康夫から教えてもらつてもよいことになっていたからです。転校生は「ハイ」というようにうなずくと、歩き始めました。その時誰もが初めて気づいたのですが、女の子は左手に金屬の杖を握つていて、杖でバランスをとりながら歩いたのです。杖の先が床にあたるたびにコツコツと音がして、女の子の肩が大きく上下に揺れました。教室の中にサツと緊張のようなものが走り、女の子はそれをかき分けるようにして康夫のとなりの席に着くと、腰を下ろしました。

「さあさ、それではみなさん」

綾子先生は子どもたちの注意を引きつけようとするように、手を二度打つてからいちだんと大きな声で話し始めました。

「今日は最初に、夏休みの宿題のことを話しておきます。自由研究です」

「エーッ」

みんなはいっせいに不平の声を上げました。康夫は見るともなしにとなりの席の女の子の左足を見てしまいました。膝が曲がらないのか左足は机の下に入らず康夫の席の方に向かって伸ばされ、足の甲が「く」の字形に曲がっていました。あれではとても歩きづらい

でしょう。女の子は緊張のためか青ざめた顔のままでした。

夏休みが始まる一週間前だったので授業は少なかったのですが、芳子が教科書を持ってなかったのも、康夫は授業のたびに机をつけて自分の教科書を見せてやりました。芳子の教科書は二期期にならないと入らないというので、綾子先生からそうするように頼まれていたのです。康夫が見るともなしに見ていると、芳子は机に顔をつけるようにして一生けんめいノートをとっていました。小さくて薄い字でした。芳子はどうも勉強のできる方ではなさそうでした。授業が終わると、芳子は康夫に向かって小さな声で

「アリガトウ」

と礼を言いました。

終業式の二日前、夕飯の時に母が康夫に向かって

「康夫、先生がね、フゾクを受けてみたらどうかって、言ってたよ」

と言いました。フゾクというのとはなり町にある国立大教育学部の附属中学のことなのです。母は父母会に出て、綾子先生からフゾクの受験をすすめられたのでした。

「ウン・・・」

と康夫がナマ返事をしていると、父が

「いいんじゃないか。せつかく先生がそうやってすすめて下さるんだから・・・。一郎

のこともあるし・・・」

と言いました。一郎というのは康夫の兄で、今は市の私立高校に通っています。一郎は小さい時からガリ勉で、中学もほんとうは私立中学に行きたかったのですが、家からでは通えないので両親が反対して、やむなく町の公立中学に行ったのです。一郎が今行ってるのはその中学の高等部で、大学受験で有名なカトリック系の男子校した。そこは中高一貫教育の六年制なのですが、高等部からも少数の入学者をとります。一郎は難関と言われるその入試に合格して入ったのですが、休みなどで帰省するたびに——一郎は学校の近くにアパートを借りて一人で下宿生活をしていました——家の者に向かつて

「アア、オレは公立中学なんか行つてソクをした。あそこはバカばかりだからな、レベルが低い。中等部から上がってくるヤツラにはどうしてもかなわん」

とグチをこぼしていたのです。実際、小中を通じて学校一の秀才だった兄も、高校の成績はクラスで下位の方でした。そんなことを聞かされていたので、父が康夫に向かつて兄の例を引いたのでした。

「夏休みの間に、家で話しておいてくれつて、先生、言つてたよ」

康夫が黙ったままなので、母が水を向けるように康夫に言いました。康夫の気持ちは半々でした。兄から言われれば「そうかな」とも思うのですが、となり町まで一人で汽車通学

してまで、という気持ちもありました。小さい時から勉強ばかりしている兄を見ていたからかもしれない。一郎は友だちと遊びに行くこともなければクラブ活動をすることもなく、いつも部屋に閉じこもっていました。試験の点数や成績に一喜一憂してはまた机に向かっている兄の姿は、康夫の目には、勉強の虫にとりつかれたガリ勉強者に映っていたのです。自分は兄のようにはなりたくない、と康夫はいつも思っていました。それに、受験といつてもまだ半年以上さきのことです。考える時間は十分あるでしょう。今は目前にせまった夏休みのことで頭がいっぱいで、康夫はナマ返事ばかりくり返していました。

夏休みに入りました。終業式の日には康夫が持ち帰った通信簿には、いつものように「優」が並んでいました。その日の夕方には、市で下宿している兄も帰って来ました。夏休みは家で過ごすのです。康夫は兄に頼みごとを一つしていました。市のデパートで顕微鏡を買ってきてもらったのです。お金は、今までためていた小づかいやお年玉をあてました。兄の買ってきてくれた顕微鏡を受け取ると、康夫は夕飯もそこに二階の自分の部屋へ上がって行き、ためつすがめつ顕微鏡をのぞきこんでいました。康夫は一学期の授業の時に顕微鏡の魅力にとりつかれてしまい、自分でも顕微鏡を買って夏休みの宿題の自由研究を試みようと思ったのです。

それは理科の時間でした。みんなで中庭にある池まで行って、ピーカーで池の水を汲ん

できました。池はコンクリートで作った長方形で、まん中で二つに仕切っておりまして。片方には下級生の植えたイネが伸び始め、もう一方にはスイレンの花が咲いて金魚が泳いでいました。綾子先生は金魚池の水を汲んでみんなに見せたのですが、池の水は緑色にごってよく見えなかったのです。そのあと先生はみんなを理科室へ連れて行くと、スポイトに池の水をとってからプレパラートの上に一滴たらしめました。それを顕微鏡で見せてくれたのですが、肉眼では何も見えなかった水の中にリョクソウやケイソウの藻が茂り、その間をゾウリムシが泳ぎ回っていました。みんなは我さきに顕微鏡をのぞきこんでいたのですが、康夫も初めて目にするミクロの世界に心を奪われてしまったのです。

そのあと授業で光合成のことを勉強しました。植物は昼間、太陽の光を受けて葉の表面で光合成という活動を行い、必要な養分を自分で作りだしているのです。そのさいに必要な二酸化炭素は、葉の裏にある気孔という穴を通して空気中から取り入れているということでした。気孔からは逆に、酸素が吐き出されています。植物はまた、気孔を通して呼吸も行っているのです。そんな説明を綾子先生から受けながら教科書の気孔の顕微鏡写真を見ていた康夫は、植物の種類によって気孔の形や大きさが違うんだろうか、もし違わないら、それは植物の生えている場所——例えば湿った所と乾いた所とか、日あたりのいい所と悪い所とか——によって影響を受けるんだろうか、という疑問を持ちました。夏休み

の自由研究では、実際にそのことを調べてみたかったです。

康夫はすぐにでも“研究”にとりかかりたかったのですが、はやる心を押さえて、まずほかの宿題を終えてしまうことにしました。夏休みの課題帳は数日で、読書感想文は一週間で終わらせることができました。あとは毎日つけなければいけない日記と自由研究だけです。康夫は押し入れから父の古いシオルダーバックをさがしだすと、その中にピンセットやプレパラートなどの用具を入れて標本採集に出かけて行きました。もう八月に入っていました。その間康夫は何もしていません。庭の花だんの花を使って、プレパラート作りの練習をしていました。もちろん勉強ばかりではなく、友だちとよく小学校の校庭でソフトボールをしたり、プールに入って泳いでいました。

康夫はまず、家の近くの水辺の植物から調べてみることにしました。康夫の家は町を流れる大川の土手ぞいにあります。裏庭から細い路地を通って十数メートルも行けば、大川の堤防にぶつかりました。ブロックで作った階段を上ると土手の上に出ます。夏の盛りなので、水は広い河原の中央をわずかに流れているだけでした。土手のすぐ下には近くのお年寄りたちが耕している。“一坪農園”があります。康夫はそのお年寄りたちが踏みならした小道を下りて行きました。

道のわきには“血止め草”が密生していました。康夫は小さいころ、よくおばあちゃん

に連れられて大川へ遊びに来たことを思い出しました。川で水遊びをしていて足を切った時など、おばあちゃんがこの草を傷口にはつけてくれたものです。その当時は、子どもたちはみんな川で遊んだものですが、今では誰も川遊びなどしません。何年か前に上流にダムができて水量が減り、水も汚れてしまったのです。学校でも川遊びは禁止されていました。

康夫はそんなことを思い出しながら土手を下りると、河原のところどころにできている水たまりの方に歩いて行きました。そこには、今日採取しようと思っっているマツヨイグサやツユクサなどの夏草が生えていたからです。水たまりのふちまで来てシヨルダーバックを肩から下ろすと、康夫は中から安全カミソリを取り出して、手にした葉の裏に正方形の切れこみをつけました。それからピンセットでつまんでプレパラートの上にのせると、スポイトで水を落としてからカバークラスをかけてバックにしまいこみました。手なれたものです。練習の“成果”がでているようです。何種類かの草の標本採集を終えて手帳に日時や場所を書きこむと、康夫は水の流れている川の中央部へ歩いて行きました。そこに行けば、別の種類の標本が手に入るのではないかと思ったのです。

大川は、康夫の家のあたりでは大きく蛇行して流れ、深い淵を作っていました。水辺にはアシが生い茂っています。その淵の近くまで来た時、康夫はアシの茂みの向こうに人がげを見てハッと胸をつかれたようになりました。それは康夫のおばあちゃんだったのです。

おばあちゃんは水ぎわの大きな岩の上にへたりこんで、川面を見つめていました。その岩は、おばあちゃんの“指定席”だったのです。おばあちゃんは夏でも冬でもここに来てすわっていました。康夫はアシの間をぬって、おばあちゃんの方に歩いて行きました。たとえおばあちゃんに通じなくても、何かひとこと言葉をかけてやりたかったのです。

おばあちゃんのすわっている岩の後ろまで来ました。おばあちゃんの白髪まじりのびんが、川面を渡る風でゆらぎました。おばあちゃんは目を細めて水面を見つめたままです。川の水は、夏の光を浴びてキラキラと輝いていました。

「おばあちゃん」

康夫はおばあちゃんの背中にそつと声をかけました。おばあちゃんは気づいてないようです。

「おばあちゃん」

康夫はもう一度、今度は前よりも大きな声で呼びかけました。するとおばあちゃんはクルリと振り向いて曇った目で康夫の方を見ながら

「アタシはほかの男となんか寝ていませんよ」

とつぶやくと、また川の方を向いてしまいました。おばあちゃんの胸には、キービーちゃんがつかりと抱かれています。いつの時からかおばあちゃんが河原で拾ってきて、自分でそう名づけた人形です。康夫は前に一度、母にキービーちゃんの“いわれ”について

きいたことがあります。

「ねえ、お母さん。おばあちゃん、どうしてあの人形のこと、キービーちゃんて呼んでるの？」

「さあねえ……お母さんにも分かんないんだけど……。おばあちゃんのお母さんが岡山出身で、岡山って昔キビの国って言ったでしょ。だからかなって思ってたみたい……。おばあちゃん、戦争中は食べるものがなくて、アワやヒエも食べたって言ってたから——今では鳥のエサだけ——あのキビかなって思ってたみたい……。おばあちゃん、何にも答えたくないけどね……」

母は台所で洗いものの手を休めると、フツとため息をついたのでした——

康夫はおばあちゃんの言葉を聞くと悲しくなると、それでも自分に言い聞かせるように「おばあちゃん、そんなところで帽子もかぶらずにいると、日射病になっちゃおうよ」

と言うと、静かにそこから離れて行きました。家にもどる時に康夫が土手の上から振り返って見ると、おばあちゃんはまだ岩の上ですわったままでした。康夫の目にチクツと痛みのようなものが走って、康夫はなぜか、子どものおばあちゃんに目のゴミをとってもらった時のことを思い出しました。目がチクチクして康夫が泣いていると、おばあちゃんが「ドレドレ」と言って顔を近づけてきて、康夫の頭を両手でつかむと、いきなりベロで目玉をなめまわしたのです……。

こうして康夫は、バスに乗って海岸まで行って浜辺に生えている草を集めたり、半日ばかりで近くの山まで歩いて行って森の下草の標本をとったりして「研究」を続けていきました。康夫は自然に生えている植物だけでなく、比較のために庭の花だんの花からも標本を集めていましたが、畑の野菜でも調べてみようと思いました。康夫の家では誰も畑をやっていないので、顔なじみの源兵衛さんに頼んでみることにしました。

源兵衛さんというのは康夫の祖父の幼なじみで将棋の良きライバルでもあるのです。源兵衛さんと祖父は、毎日ハンで押したように康夫の家の縁側で将棋をさしていました。それも何年もです。ハタから見ればよくもあきずに、と思えるのですが、二人はそれぞれ相手には負けまいと、本を買って勉強したりテレビの将棋講座を見たりして「研究」をおこならないのです。康夫の祖父は人一倍負けん気が強く、またいつも源兵衛さんを見下したような態度をとっているのですが、将棋で源兵衛さんに負けるとムツツリしてしまい、源兵衛さんは祖父のキゲンをそれ以上そこねないようにソツと家に帰って行くのです。逆に源兵衛さんの形勢が不利で「マツタ」をしようものなら、祖父は口にくわえているキセルを床にトントンとたたいてレツカのごとく怒るのです。

源兵衛さんは何年か前に連れ合いに先立たれて、それからひとり者の手なぐさみで、神社の近くに畑を借りて野良仕事に精を出していました。同じころ、どこからかカラスが

一羽神社の柱にすみついて、それ以来源兵衛さんとは「きゅう敵」のような関係になっていました。というのも、このカラスは、源兵衛さんがせつかく畑にまいた豆や野菜の種はほじくり出してしまえば、葉ものには穴を開けるは、熟れて食べごろになった果菜はおいしいところだけをついばんでしまうといったワルサの限りをつくしていたからです。源兵衛さんはそれに対抗して、カカシを立ててみたり網を張ったり大きな目玉のフーセンをブラ下げてみたりしたのですが、カラスのワル知恵の前には何の効果もありませんでした。カラスはいつも源兵衛さんのウラをかいて、笑いものにして楽しんでるようでした。源兵衛さんは時々畑でとれた野菜を康夫の家に持ってきてくれましたが、そのたびに「いちばんイイところはカー公にやられちゃまってよおー」とグチをこぼしていました。

その日も康夫が朝御飯を食べ終わってから居間の方へ行ってみると、縁側に台を出して祖父と源兵衛さんが将棋を打っていました。将棋盤のそばには母が入れたものでしょうか、カルピスの入ったコップがお盆にのっていました。康夫はタタミをききませないよう二人に近づいて行くと、源兵衛さんに向かって

「源兵衛さん、夏休みの自由研究で気孔のこと調べてるんだけど、畑の野菜の葉っぱ、少しもらってもいい？」

とききました。源兵衛さんは将棋盤に目を落としたまま

「キコウ?・・・天気予報でもやるのかい?」

とウワのソラの調子でいき返してきました。

「そうじゃないんだ。植物の葉っぱの裏にあるでしょ、小さい穴が。あれを顕微鏡で見
て調べてるんだ」

康夫がそう説明すると、源兵衛さんは分かったのか分からないのか、おそらく分からない
かったのでしょうか、一、二、三度うなずいて

「ああ、いいよ。いくらでも持つてきな」

と言つてくれました。祖父の方はキセルをくわえたまま腕組みをしています。康夫は将
棋は分からないのですが、どうやら今日は祖父の方が優勢のようです。康夫がそう思つて
立ち上がろうとした時、源兵衛さんが

「カー公にだけは気をつけなよ。アイツはこの前、神社に捨ててあつた子猫の目玉をえ
ぐり出して、殺して食べてたからな」

と言うと、盤の上のコマを一つ動かしてからあわてて元にもどそうとしました。源兵衛
さんがコマに手を置いたまま上目づかいに祖父を見ると、祖父はキセルをくわえたまま
ゆっくり首を横に振りました。それからキセルでトントンと床板をたたいてから

「動物はそうでなくちゃいかん。闘争本能がなくなったら、食われるだけだから。人

間も同じことよ。この食うか食われるかの世の中で、闘争心がなければ生きて行かれない……。どうもウチのムコどにはそれが欠けてるようだな……。康夫も父親に似おったか、ワシの目から見るとやさしすぎるようで……」

と言うと、ピシヤリ！と音をたててコマを動かしました。康夫は「またか！」と言うと、祖父のグチを聞くのがイヤで黙ってその場を離れました。

康夫の父は入りムコでした。祖父は戦後外地から帰って来ると、この町で材木問屋を起こして手広く商売を営んでいました。祖父はあとつぎに男の子が欲しかったのですが、生まれたのは女の子ばかり三人。それでやむをえず末の子（康夫の母）にムコ養子をとったのです。父は祖父の会社の従業員でした。母もそこで事務の手伝いをしていて、二人は結婚したのです。父は今は社長になっていますがそれは名目だけのことで、会社の実権は引退した祖父が握っていました。康夫の二人のおばは他県に嫁いでいました。

康夫は部屋にもどると、用具一式の入ったショルダーバックを肩から下げて家を出ました。日差しが強くないうちに源兵衛さんの畑へ行つて採集してこようと思ったのです。神社は、康夫の家から大川の堤防を十分ほど下流に向かつて歩いた土手ぞいにあります。康夫は堤防の上の道を歩きながら川の中のおばあちゃんの「指定席」の方に目をやりました。その日はおばあちゃんの姿は見えませんでした。家を出てくる時にもいなかったの

で、おそらくまた家のまわりでも歩いているのでしょう。

向こうに神社の杜もが見えてきました。中でもひときわ目につくのがクスの木です。このクスの大木は樹齢八百年と言われていて、町の人はとてもたいせつにしています。カラスのカー公は、この大クスを寝ぐらにしていたのです。時々クスの木のとっぺんで鳴いているカー公の姿を見かけることがありましたが、今日はいないようです。鳴き声も聞こえてきませんでした。

康夫は土手から下りると、路地を通って神社の方に歩いて行きました。神社といっても氏神さまをまつた小さなもので、初もうでや七五三の時ぐらいしか社務所が開いていませんでした。鳥居をくぐると、神社の境内は夏でもヒンヤリしていました。参道のわきにクスの木が立っています。そのクスの横は空き地になっていて、さびたプランコとシーソーが置いてあります。時々近所の若奥さんたちが小さな子どもを遊ばせている姿を見かけるのですが、今日は誰もいませんでした。康夫は本殿のわきを通りぬけて源兵衛さんの畑に歩いて行きました。

十坪ほどの小さな畑でした。手入れが行きとどいているのは一目で分かりました。夏草の生い茂る時期なのに、畑の中には雑草が見あたらないのです。雑草は引きぬいて、敷きワラ代わりに野菜の根元に敷いてありました。カー公対策は、今は銀色のテープのよう

す。畑の何か所かに竹ザオを立ててテープを張っていたのですが、その効果のほどは——畑の中へ一歩足を踏み入れた康夫は、思わず吹き出しそうになってしまいました。と言うのも、大きなフサをつけているトウモロコシや赤く色づいたトマトのあちこちに、これ見よがしにカー公がくちばしで開けたと思われる穴が開いていたからです。

（源兵衛さん、どうしてこんなところで畑をやつてんだらう。カー公にやられたのも、捨てないで食べてんのかな）

康夫がそんなことを思いながら肩からシヨルダーバックをはずしてトウモロコシの葉の採集にとりかかろうとした時、どこからともなく

クツクツクツクツクツ

とカラスの鳴き声がしました。康夫が顔を上げると、いつの間に現れたのか、カー公が大ダスののでつぺんにとまってこちらを見ながら、あざけるように首を上下に振っていたのです……。

お盆に入っていました。康夫が家にもどつて部屋で標本の整理をしていると、おばさん達がそれぞれ一家で帰省してきました。そのたびに康夫は階下から呼ばれてあいさつに行きました。おばさん達は子どもも連れて来たのですが、みな康夫より年上の中学生や高校

生たちで——しかも都会育ちなので康夫はハダが合わず、二階の自分の部屋に引きこもっていました。兄の一郎も部屋で勉強しているのか、離れから姿を見せませんでした。

いつもは静かな康夫の家も、この時ばかりはにぎやかな話し声が絶えませんでした。夕食はみんなでお膳を並べて食べました。ふだん祖父とおばあちゃんは康夫たちとは別に早めに食事はすませているのですが、この日はみんなと同じ席にすわって同じものを食べました。人が集まる場ではおばあちゃんはなぜかいつも静かにしています。うつ向きかげんの姿勢で、黙々とハシをつけていました。祖父はとてもキゲンがよく、お酒を飲み続けていました。母が給仕をし、父がおしゃくをして回っていました。お酒を飲まない康夫のいとこたちも、ジュースで話はずんでいるようでした。康夫と一郎だけが座のはしにすわって、黙って食事をしていました。

次の日も康夫は、自分の家にいるのに一日中きゆうくつな感じがしてなりませんでした。それで夕食は早めに切りあげて、盆踊りに行くことにしました。兄の一郎が食べ終えて黙って席を離れると康夫も続いて立ち上がり、忙しく給仕をしている母のところに行つて

「盆踊りに行つてくる」

と言いました。母はおじに向けていた笑顔をそのまま康夫に振り向けると

「アア、もういいの？ 投げタイマツにも行くんでしょ？ だったら、○○ちゃんや××ちゃ

んともいっしょに行ったら」

と言つて、離れた方にすわつていたいとこ達に声をかけたのでした。康夫はほんとうは一人で行きたかったのですが、母に声をかけられたいとこ達もいっしょに行くと言つたので、やむなく連れ立つて家を出たのです。

投げタイマツというのは、この地方のお盆の送り火の行事でした。河原に長い竹ザオを立てて上にワラをたばね、そこにタイマツを投げて火をつけるのです。会場は神社の横の大川の河川敷でした。ふだんはそこは老人会のゲートボール場なのですが、ほかに適当な場所がないので、青年団が使わせてもらつていたのです。

大川の土手の上を康夫たちが歩いて行くと、ちょうど投げタイマツが始まつたところでした。夏の夜空はまだ暗くなりきつていないで、星が数えるほどしか見えませんでした。土手の上にも河原にも、見物人がたくさん立っていました。康夫たちは河原に下りて行きました。数メートルおきに太い竹ザオが三本立っています。竹ザオの先には、サカズキの形にワラをゆつたものがのせてありました。青年団の人たちが、木ぎれの先に石油をしみこませて火をつけタイマツを作っています。それを子どもたちが投げ上げていました。竹ザオと言つても十数メートルあるので、なかなかワラまで届きません。タイマツが見物人の方に落ちると危ないので、子どもたちはみんな土手から川の方に向かって投げていました。上

投げではなく下投げで放るので、思わぬ方向に飛んでしまうタイムマツもありました。風車のように振り回してから投げた子のタイムマツは、水平に飛んで大川にポチャンと落ちてしまいました。見物席からドツと笑い声が起きました。照れ笑いを浮かべながら土手の方にもどつてきたその子の顔を見ると、康夫と同じカラスの吉田ゴン太でした。

康夫は小さい時から何度もやっているので珍しくも何ともありませんでしたが、都会から来たいとこたちはオモシロがつて、子どもたちの列に入つて行きました。これがうまく投げられるかどうかは力ではありません。康夫の従兄^{いとこ}たちがみな失敗したあと、高校生の従姉^{いとこ}の投げたタイムマツは、思いがけず竹ザオの一つにのつてワラに火がつかしました。観客席から拍手が起きました。やがてあとの二本にも火がつき、三本の竹ザオが勢いよく燃え上がりました。火がワラたばの奥まで回ると、パン、パンと音がして煙が吹き出しました。中にバクチクが入れてあつたのです。それからシューという音をたてて火花が滝のように降りそそいできました。

「きれいだねえー」、「きれいだねえー」

土手のあちこちから感嘆の聲が上がりました。康夫も土手にしゃがみこんで見ました。火花が終わつてワラが燃えつきると、みなゾロゾロと土手を上つて小学校の方に歩いて行きました。投げタイムマツのあとは小学校で盆踊りが行われるのです。康夫たちも神社

の前を通って、あとについて行きました。

康夫は歩きながら、友だちの見知った顔に何人も会って、言葉を交わしました。小学校は神社から歩いて五分ほどの畑の中にあるのですが、遠くからでもグラウンドにこしらえられたヤグラのちようちんが明るく見えました。裏門のところには、裸電球をブラ下げた屋台が何台か出ていました。

「アッ、おばあちゃんじゃないか」

いっしょに歩いていたいこの一人が声を上げました。見ると、手前の金魚すくいの夜の店の前に、小さな子どもたちにまじっておばあちゃんがペタリとしゃがみこんでいたので。いつの間に着がえて家を出てきたのか、おばあちゃんはユカタを着ていました。

「おばあちゃん！」

その声に振り向いたおばあちゃんの顔は康夫が今までに見たことがないほど明るく、おばあちゃんは黙ってうなずくと、また金魚すくいに興じている子どもたちの方を向いてニコニコ見守っていました。キービーちゃんは家に置いてきたのか、抱いてはいませんでした。

金魚すくいのとなりにはヨーヨー釣り、それからラムネ売り、駄菓子屋、クレープ屋さん、いろいろ並んでいたの、いとこたちとはそこで自然に離れてしまいました。康夫は中でもひとときわ人だかりがしていた屋台の方に行ってみました。背伸びをして肩ごしに

のぞいてみると、ベッコウアメ売りでした。鉄板に水アメを流しこんだアメ売りのおじさんが、ヘラを器用に使つて子どもたちの注文したものを作りあげていました。康夫がその腕さばきに見とれていると、とつぜん後ろから

「康夫くんー」

と声をかけられました。康夫が振り向くと、そこには芳子が立っていたのです。投げたイマツの河原では見かけなかったので、直接こちらへ来たのでしょうか。芳子は白地に赤い花がらのユカタを着て、手にはウチワを持っていました。そして学校にいる時の芳子からは信じられないほど、明るい顔をしていたのです。芳子の輝くような姿に康夫がとまどっている、そばに立っていた女の人が

「芳子がいつもお世話になっています」

と、康夫に向かって丁寧に話しておじぎをしました。芳子のお母さんなのでしょう。上品な感じのする人でした。康夫もあわてて

「ハ、ハイ……」

と言いながら頭を下げました。芳子は母の着物のそでを引いて

「お母さん、アメ買って」

とねだるように言いました。芳子の母は「困った子ねえ」という表情を浮かべると、康

夫に向かつて

「康夫くんも食べるでしょ」

ときいてから、康夫の返事も待たずに

「オジさん、二つ下さいな」

とたのんでいました。アメ売りのおじさんは手ぬぐいで汗をふきながら

「へい、もう少し待って下さい」

と答えました。すると芳子の母は

「じゃ、お代を先に払っとくわ」

と言ってサイフを取り出すと、お金を渡していました。康夫は

「どうも、ありがとうございます」

と、口の中でモグモグ言いました。芳子の母は「アラ、いいのよ」という顔を康夫に見せると、芳子に向かつて

「芳子ちゃん、お母さん、先に中に入ってるからね」

と言って、門の方に歩いて行ってしまいました。康夫は芳子と二人でその場に残されてどうしていいか分からずに困っていると、アメ屋のおじさんが助け船を出すように

「お嬢ちゃん、何を作るんだい？」

ときいてくれました。芳子はそれを待つていたように

「アリ、それも女王アリ」

と明るい声で注文しました。

「アリ?・・・アリって、足は八本だった、それとも十本だった?」

アメ屋のおじさんが小首をかしげると、芳子は

「六本よ」

と教えてあげました。

「ホイキタ」

アメ屋のおじさんは水アメを流しこむと

「アリさん、アリさん、お宮のまーえで、お手々をつなぐの誰かいな、それエンヤレホー」
と鼻歌を歌いながらコテで形を整え始めました。康夫はアメ屋の器用なコテさばきを見ながら、ほかの子どもたちはパンダやドラエもんをたのんでいるのに、芳子がアリなんかたのんだので何だかオカシクなってしまうました。そして、何にしようかなと考えた時、ヒマワリの花が浮かんできました。庭で標本採集をしていた時に、ヒマワリの根元にアリが巣をつくっていたのを思い出したのです。

「ハイヨ、いっちょあり」

アメ屋のおじさんができあがったベッコウアメを手渡すと、芳子は目を輝かせて受け取りました。

「ダンナは何すんだい？」

アメ屋のおじさんから冗談めかしてきかれた康夫は

「ボクは、ヒマワリの花」

と答えました。

「アりにヒマワリ・・・夏だねえ」

おじさんはそう言うと、また鼻歌まじりにアメを焼き始めました。

康夫はベッコウアメを受け取ると、芳子と並んで校庭に入って行きました。友だちが何人も来ているので芳子と二人でいるところを見られるのは恥ずかしかったのですが、何となく芳子の母にはベッコウアメを見せなければ、という気持ちがあったのです。芳子に合わせてゆっくり歩きながら康夫がアメをなめていると、芳子が

「康夫くん、ヒマワリの花が好きなの？」

ときいてきました。康夫は

「そういうわけじゃないけど・・・」

と言葉をにごすと

「芳子ちゃんはどうなの、アリが好きなの？」

と逆にきき返しました。芳子の母は門の近くにいなかったため、康夫は芳子と並んで、ヤグラを遠巻きにしている人たちの前を歩いて行きました。

「今、アリを飼ってるの。夏休みの自由研究で」

芳子がアメから口を離して言いました。

「アリを飼うって・・・」

康夫が不思議そうにたずねると、芳子は

「アリさんて、地面の下でどんな生活してるか分からないでしょ。それで水そうに土を入れて、庭でつかまえてきたアリを入れて飼ってるの。エサはハチミツよ」

とイタズラっぽい目を康夫に向けました。

「フーン」

康夫はアメをなめながら、それもおもしろいかもな、と思いました。奥の方に芳子の母の姿を見つけた二人は、そちらに向かって歩いて行きました。二人に気づいた芳子の母に康夫がアメをチョット持ち上げてみせると、芳子の母は笑いながらうなずきました。その時あたりを地鳴りで揺らすように

ドドンガ ドン！

ドドンガ ドン！

太鼓がいせいよく打ち鳴らされると、ヤグラの上から笛やカネの音も聞こえてきました。盆踊りが始まったのです。ヤグラの周りには、そろいのユカタを着た女の人たちが十数人、小さな輪をつくって踊り始めました。舞踊愛好会の人たちなのでしょう。おハヤシとも合つて、踊り手全体が一つの波のようになって回つて行きます。見事な踊りでした。康夫のまわりからも

「上手ねえー」

という声が上がりましたが、それがかえつて足を引き止めさせてしまふのか、遠巻きにしている人たちの中からは、なかなか踊りの輪に加わる人がいませんでした。その時ユカタを着た女の人の手をへなへなさせながらヤグラに近づいて行くと、一人で踊り始めたのです。その人の踊りは手も足もメチャクチャで、幼稚園の子どものようにスキップしてみたり、足もとがよろけてつんのめりそうになったりしました。笑い声が起きました。康夫は思わず顔を伏せました。

「——さんのおばあさんだよ」

康夫の近くに立っていた人の言ってる声が聞こえました。体が熱くなってきました。康

夫はその言葉が二人の耳に入らなかったようにと願いました。康夫が顔を伏せたまま横目で芳子と母の方をうかがうと、二人ともその言葉が聞こえなかったように笑いながらヤグラの方を見ていました。康夫はホッとして顔を上げました。小さな子どもたちがバラバラとかけて行って、おばあちゃんといっしょに踊り始めました。それに勇気づけられたのか、見ているだけだった大人の中からも、ひとりふたりと踊りの輪に加わる人がでてきました。「楽しそうねえ」

芳子の母がつぶやきました。ほんとうに、おばあちゃんは楽しそうでした。子どもたちと手をとって踊りながら、愛好会の人たちは左回りに踊って行くのに、おばあちゃんだけ右回りにまわっていました。康夫は恥ずかしくなってきました。おばあちゃんが恥ずかしくなったのではなく、おばあちゃんを恥ずかしいと思った自分に対してハラが立ったのです。そんな康夫の心中を知ってか知らずか、芳子は明るい顔を向けたまま、いつまでも踊りを見ていました・・・。

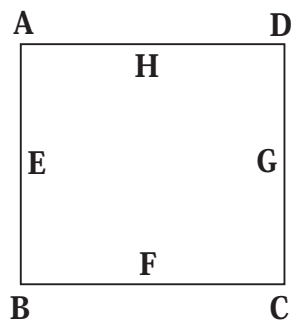
お盆も終わって親戚の人たちが帰ってしまうと、康夫の家はまた元の静けさをとりもどしました。盆踊りの翌日、康夫が居間で寝ころがってテレビの高校野球を見ていると、黙って入って来た一郎がいきなり康夫の目の前のタタミに本をポーンと放り投げて

「おまえもフゾクを受けんなら、遊んでばかりいないで勉強もしたらどうだ。この夏休

みがショウブだぞ」

と行って出て行ってしまいました。康夫は体を起こすと、兄の投げたよこした本を手にとってみました。赤い表紙の『全国有名国立私立中学入試問題』という問題集でした。×年版という数年前のものなので、おそらく兄が自分で使ったものなのでしょう。中をパラパラめくってみると、はたして兄のものらしいエンピツの書きこみがしてありました。目次を見ると、兄の受けたかった私立中学も、康夫が受けようかどうか迷っている附属中学の入試問題ものっていました。その当時は附属中学も市にあつて、兄は受験したくともできなかったのです。二年前となり町に国立大学が移転^{マテ}してきて、教育学部の附属中学も同時に移ってきたのでした。

康夫はテレビを消すと、問題集をめくりながら二階の自分の部屋に上がって行きました。兄に言われたように受験勉強を始める気などなかったのですが、兄の通つてる高校の中等部の入試問題を解いてみようと思つたのです。机にすわって国語、算数、理科、社会とひととおりやってみました。算数に一題だけ、自分でも答がアヤフヤな問題がありました。解答を見てみようと思つて後ろをめくると、答の部分だけナイフで切り取られていました。康夫は舌打ちすると、本棚から教科書とノートを取り出して、もう一度とりくんでみました。それはこんな問題でした。



右の図の四角形 $ABCD$ は正方形で、 $EFGH$ は各辺の中点です。今 A から H までの 8 点の中から 3 点を選んでそれを頂点とする三角形を作る時、合同なものは一つに数ええるとすると全部で何通りの三角形ができますか。

康夫がノートを広げて三角形をいくつか書いていると、窓の外でカーカーとカラスの鳴き声がしました。康夫が顔を上げてみると、向かいの家のテレビアンテナにカー公がとまって羽ばたきしていました。康夫がまたノートに目を落として頭をひねっていると、カー公がさかんに鳴きました。康夫はもうウンザリしたという顔で

「ウルサイなあ、集中できないじゃないか」

とブツブツ言つて「これでいいのかな」とつぶやいた時、カー公がそれを聞いてでもいたように

カーカーカー

と鳴いたのです。康夫は顔を起こすと

「ホントだな。間違つてたらしようちしないぞ」

と窓の外のカラスに言つてみました。するとカー公はまた

カーカーカー

と鳴いてよこしたのです。康夫はイスから立ち上がっていました。兄の一郎に答をきいてみようと思つたのです。離れで勉強している兄のジャマをするのはイヤでしたが、兄からもらった問題集の答をきいてみるのですから、兄もそんなにイヤな顔はしないでしよう。階段を下りて離れの前に立つた康夫は、ドアをトントンとノックして

「兄さん」

と声をかけました。

「何だ」

中から兄の声がありました。康夫は

「さっきもらった問題集やってみただけど、分かんないところがあつて・・・」

と言いました。兄からは「入れ」とも「入るな」とも声が返ってこないのです。康夫はそつとノブを回して顔だけ部屋の中に入れてみました。やはり勉強机に向かっています。康夫に後ろ姿を見せている兄の首がうなずいたようなので、康夫は問題集とノートを広げて兄のところまで持つて行きました。一郎は康夫が指で示した問題にサツと目を通すと

「何だ、こんな問題も分からないのか」

と言うように度の強いメガネ越しにチラツと康夫を見てから、康夫が差し出したノートを見てうなずいただけでした。そこには八とおりの三角形が描いてありました。

康夫は静かに兄の部屋から出て音を立てないようにドアをしめると、ホツと息をつきました。その時、向かいの家のテレビアンテナにまだとまっていたカー公が、康夫をあざけるように

カーカーカー

と三度鳴くと、羽ばたいて飛んで行ってしまいました。康夫はノートを手にしたまま、しばらくカー公の飛び去った方を見ていました……。

夏休みも終わって二学期が始まりました。始業式の日には康夫が学校へ行って教室に入ると、ナンダカみんなが康夫の方を見てニヤニヤしているのです。康夫が顔にゴハン粒でもつけてきたのかなと思つて頬をなで回していると、女の子の一人がそつと黒板の方を指さしました。康夫が振り向いてみると、黒板に康夫と芳子のアイアイガサが書いてあつて、おまけにカサの上にはヒマワリの花が咲き、大きなアリが一匹たかろうとしていたのです。康夫はその絵を見ると思わず体が熱くなり、急いで黒板のところへ行つて黒板ふきで消しました。

「康夫、赤くなつてら、赤くなつてら」

吉田ゴン太のはやす声が聞こえました。康夫は自分でも恥ずかしさで顔が赤くなつてるのを意識しながら、黙つて自分の席に歩いて行きました。幸い芳子はまだ登校していませんでした。康夫は席に着いてからも、みんなの好奇の目が自分にそそがれているように感じて落ち着きませんでした。そして吉田ゴン太がどうして自分に反感を持っているのか、一生けんめい考えてみましたが分かりませんでした。始業のチャイムが鳴る前、芳子が何も知らないようすで教室に入ってきました。芳子の顔には一学期の時のようなこわばりはもうなくなっていました。盆踊りの晩に見せた輝くような表情は、消えていました。康

夫は意識すまいと思うと逆に意識してしまって、となりの席についた芳子に声をかけることができませんでした。

二日目に自由研究の発表が行われました。一人ずつ前へ出て、自分の研究の“成果”をみんなにひろうするのです。もぞう紙に書いてきたものを黒板にはって説明したり、自分で作ったり集めてきたものを教卓の上に並べて“展示”したり——それぞれ工夫をこらしていました。やはり夏の植物や昆虫を採集したり観察したものが多かったのですが、半数の生徒は夏休みに遊んでしまっただけでやってきませんでした。康夫は盆踊りの時に芳子から聞いたアリの観察の発表を期待していたのですが、芳子はアリの巣の拡大図をもぞう紙に書いてきただけでした。おまけにみんなの前に立ってあがってしまったのか、一つ一つの部屋を指さしながら「これは・・・」「これは・・・」と言っただけでした。それくらいなら図鑑の絵を写せば誰にもできるでしょう。康夫は何かものたりない気持ちが残りました。康夫は自分の発表には、もぞう紙とプレパラートを用意して行きました。夏休みに集めた数多くの標本の中から代表的なものを選んで、その気孔のスケッチ図・植物の名前と種類・生えている場所などを一覧表にまとめてもぞう紙に書いたのです。プレパラートは念のためみんな持って行きました。黒板の前に立った康夫は最初に“研究”の動機を述べてから、もぞう紙を指さしながら一つ一つの観察例を説明し、最後に自分の結論のようなも

のを述べました。康夫が最初に予想したとおり、気孔の形や大きさは植物の種類によって違いましたが、それと植物の生えている場所との関係は——康夫の集めた観察例だけでは——明らかなことが言えないのでした。ただ、日あたりが良く乾いた所に生えている植物は気孔の数は少ないが一つ一つの気孔は大きいようである——康夫はそうしめくくって発表を終えました。

康夫は自分でも自分の発表はイマイチだと思っていました。思いがけず綾子先生から「優」の評価をもらいました。先生は、結論はともかく、康夫が一つの仮説を立ててそれを実際に証明してみせようとした研究の「姿勢」に評価を与えてくれたのです。康夫は「優」をもらってうれしかった反面、内心少し不安になりました。というのも、一学期の終わりに先生が自由研究の宿題のことを話した時に、先生はみんなに向かって

「自由研究の発表で『優』になった人には、秋の文化会のクラス劇のカントクになってもらいます」

と「約束」していたからです。

文化会というのは、毎年十一月の文化の日前後に康夫の小学校で行われる学芸会のことでした。一年生から六年生まで、学年ごとに決められたテーマをクラスで取り組んで発表するのです。下級生は合唱や詩の群読、人形劇などが多いのですが、上級生の五・六年生

は毎年劇を行うのが恒例になっていました。康夫はそのクラス劇の、脚本の選定から演出までを一人でまかされたのです。後で康夫は先生から何冊か、小学生用の脚本集を手渡されました。また自分でも図書室へ行って、何冊か劇の本を借りてきました。

二学期に入って班がえが行われたので、康夫は芳子とは離れた席になってしまいました。芳子はいかかわらず口数が少なかったのですが、それでも少しずつ友だちはできていったようです。芳子は特にカッチャンと親しくなっていました。カッチャンというのは、勝子というのが本名のクラス一おおがらな女の子でした。名前のとおり勝ち気な子で、クラスのイジメっ子の吉田ゴン太もイチモク置いている存在でした。勝子の父親は仕事中に事故で両眼を失明し、今は市のハリ・キユウ学校に通つてるといふことでした。康夫も時々大川の土手の上を、勝子が父親の腕を抱きかかえるようにして並んで歩いているのを見たことがあります。勝子にはアネゴはだのところがあつて、クラスの弱い立場の生徒をいつもかばっていました。足の悪い芳子がゴン太たちにいじめられなかったのも——芳子が女の子だからということもあるでしょうが——勝子が後ろにひかえていたためかもしれません。

九月の下旬に運動会がありました。芳子は開会式と閉会式にクラスの最後に並んだだけで、あとは応援席で一人ポツンと寂しそうにしています。芳子の参加できる競技がなかったのです。昼休み、康夫が見るともなしに見ていると、芳子の家は夏に会った母親と見る

からにかつぷくのいい父親らしい人が来て、三人で藤だなの下で弁当を広げていました。康夫の家は、市で下宿している兄を除いて、一家で来ていました。祖父はキゲンよく父と酒を飲み、おばあちゃんはゴザの上に足をそろえてすわって母め作ったノリ巻きを黙々と食べていました。膝の上にはキービーちゃんがついていました。

昼食後の最初の競技が P T A のタルころがしだったので、康夫は参加者の中に祖父の姿を見つけてビックリしてしまいました。祖父は毎朝竹刀しなの素振りをかかしたことはありませんが、走る方はニガテだったはずです。後で母から聞いたところによると、祖父も始めは出る気はなかつたらしいのですが、入場門に並んだ人の中に源兵衛さんの姿を見つけると

「オレもやってくるゾ」

と言って立ち上がったそうです。祖父と源兵衛さんは同じ組で走りました。源兵衛さんは手先が器用なのか、タルをコロコロと上手にころがして行ったのですが、祖父の方はどんどんコースからそれて、しまいには貴ひん席にとびこんでしまいました。祖父が腹立ちまぎれにタルをけつとばしたので、会場からは失笑をかいました。

康夫たち赤組は、午前中は白組にリードされていたのですが午後追いついて、応援にも熱が入ってきました。赤組の応援団長は吉田ゴン太で、副団長は勝子でした。ゴン太は中学生

から借りてきた学ランを着てバンカラ声を張り上げていました。勝子たち女子の応援団員は手にボンボリを持って、チアガールになっていました。運動会のハイライト・騎馬戦は総大将吉田ゴン太の活躍で赤組が勝ち、大いに氣勢が上がったのですが、赤組は最後の対抗リレーで白組に負けて逆転されてしまいました。赤組のアンカーだった康夫が、後ろから追いついてきた白組の選手と接触して転倒し、ゴールの手前で追い抜かれてしまったのです。康夫がすりむいた足を引きずりながら応援席にもどると、応援団の女の子たちが泣いていました。ゴン太も腹を立てて康夫にくっついてかかってきたのですが、カッチャンが

「みんな、一生けんめいやったのよ。康夫くんも一生けんめい走ったんだから」

と言って、間に入ってくれたのです。康夫は自分がころんで負けてしまったのでシヨボンとしてしまいました。文化会の際はほかのクラスに負けない劇を作るゾ！と思いついて、自分をなぐさめていました。

脚本はメーテルリンクの『青い鳥』にしました。名前だけは知っていたのですが、まだ読んだことはなかったのです。康夫は役者になった経験はなかったので、脚本を読みくらべてみてもどれが良いのか分かりませんでした。それで『世界の名作』と書かれていた『青い鳥』に決めたのです。綾子先生に話すと、先生も賛成してくれました。ただ、『青い鳥』は六幕十二場の長い劇なので、とても一クラスに割りあてられた時間（四十分）には収ま

りそうもありません。それで第二幕第三場の〈思い出の国〉、第五幕第十場の〈未来の国〉、第六幕第十二場の〈目ざめ〉の三つの場面上演することにしました。内容から言っても欠かせない場面でしたし、ほかの幕では、魂の精たちがたくさん出てきて、キャストや衣裳の面で難しかったからです。省略した場面は、ナレーターの説明で補うことにしました。そんなことを綾子先生と打ち合わせていた時、話の合間に先生が

「康夫くん、フゾクのことはどうするの？」

ときいてきました。康夫は

「まだ、決めていません」

と答えておきました。実際、家でも夏休みに話してなかったのです。先生は

「そう・・・」

と言っただけでした。

運動会も終わって最初の「話し合い」の時間に、一人一人の役割分担を決めることになりました。脚本を『青い鳥』にしたことは前もって康夫からみんなに言っていました。その日はまず綾子先生が図書室の本を複写して印刷してくれた台本を配り、それから康夫が前に出て『青い鳥』のおおよその内容を話しました。そして役割を役者／衣裳／大道具／効果の四つに分けてどれか一つに必ず入ることにしたあと、級長でもある康夫が引き続

き進行役になって役割分担を決めていきました。

最初は立候補から受けつけました。立候補した人は、優先的にその役につけることにしたのです。するとまっ先に吉田ゴン太が手を上げて大道具役になりました。ゴン太のグループの男の子たちも何人か、大道具に入りました。それから衣裳は女の子たち、効果は音楽好きの男の子や女の子が立候補しましたが、かんじんの役者の方はナカナカなり手がいませんでした。康夫が壇上で困っていると、綾子先生が

「チルチルとミチルは一人で通してやったらタイヘンだから、それぞれの幕で分けて六人でやってみたら」

とアドバイスしてくれました。そうしてみると、ほんとうは目立ちたがり屋で舞台に立つてみたかった女の子や男の子たちが何人かずつ手を上げて、役者も少しずつ決まってきました。あとの役にもついてない子は十人くらいでしょう。康夫は

「立候補いませんか？立候補がなければ推せんも受けつけます。役者であと残ってるのは」と、黒板の方を振り向きながら

「祖父と祖母、第三・第四の青い子ども、それに九遊星の王です」と言った時

「祖父って、ピッコじゅん」

という声が聞こえました。康夫はドキッとしました。確かに『青い鳥』は二回読んでそのことは知ってたのですが、それほど気にとめていなかったのです。康夫が振り返ってみると、声を上げたのはどうやら吉田ゴン大のとなりですわっている竹山くんのようなのでした。ゴン太が「ドレドレ」といった顔をしながら台本をめくり、竹山くんが指さしているのです。康夫はイヤな予感がしました。竹山くんはゴン太のグループに属しているのですが、いつもゴン太たちにいじめられていました。綾子先生は、前の方の席の生徒から質問を受けて何やら小声で話しています。ゴン太が竹山くんをにらみつけながら「オマエ、言えよ、言えよ」とおどしていました。竹山くんは綾子先生の方を盗み見ながらオドオドしたようすで手を上げると

「祖父は、清水さんがいいと思います」

と仰いました。クスクスという笑い声が起きました。前の席の勝子が振り返ってゴン太をにらみつけましたが、ゴン太は「ヒュッ、ヒュッ」という口笛を吹くまねをしてトボケてみせました。芳子は体をかたくしています。康夫がどうしていいか分からずに綾子先生に助けを求めると、先生は芳子に向かって

「芳子さん、どうします？イヤなら受けなくてもいいのよ」

と仰いました。何人か振り向いて芳子の方を見えています。緊張で目を大きく見開いた芳

子は——康夫が意外だったことに——うなずいてみせたのでした。康夫は黒板の方を向くと、チョークで「祖父 清水」と書きました・・・。

十月に入っていたので、本番まであと一月もありませんでした。それから放課後や、押しつまってきてからは午後の授業もつぶして準備が進められました。作業は四つに分けた班ごとに別れて行いました。康夫はカントクということで全体を見る立場だったので、実際は各班の間をコマネズミのように回って連絡係のようなことをしていました。舞台の演出の方は綾子先生がやってくれました。先生は台本読みから始まって立ちげいこりハーサル・本番にいたるまで、めんみつなスケジュールをたてて役者班を指導してくれたのです。康夫はただ先生の横にいて、時々自分の考えを先生に言うていどでした。康夫は芳子のが気がかりだったので、芳子はそれほどイヤがってやってくるようには見えませんでした。ほかの子たちも練習中の芳子を笑ったりはしませんでした。

むしろ康夫の頭を悩ませたのは大道具班の方です。大道具といってもできるだけ校内にあるものを使って、あとはもぞう紙に絵の具で絵を描いてつい立てに貼ることにしました。康夫はイチオウ自分で下絵を書いて大道具班の班長に渡したのですが、ゴン太たちはそれをムシして自分たちで好き勝手に描いていました。それで〈思い出の国〉の祖父父母の家の窓からドラエもんがのぞいていたり、チルチルとミチルの小屋の中でネコがネズミを捕っ

ているような絵になってしまったのです。それでもゴン太たちは八百屋さんに行つてダンボール箱をもらつてきてカシの木を作つたり、用務員のおじさんから木ぎれをもらつて「未来の国」の子どもたちの発明品を組み立てることに熱中していました。

『青い鳥』では鳥が重要な役目をはたしています。それは幸福の象徴なのですが、幸福の青い鳥を求めてさまざまな国を旅したチルチルとミチルは結局鳥をつかまえることができずに家へもどります。そこでチルチルの飼っていたキジバトが「青い鳥」だったことに気づくのです。康夫たちの演じる三幕では、第五幕「未来の国」では登場人物の「光」がマントに鳥を隠しているので必要ないのですが、あとの二幕ではつぐみとキジバトが出てきます。康夫はイロイロと考えたすえに、第二幕「思い出の国」のつぐみは人形にし、第六幕「目ざめ」のキジバトは、劇の最後でもあるので盛り上げるために本物のハトを使うことにしました。幸いクラスのお兄さんがレース鳩にこつていて、一羽貸してくれることになったのです。レース鳩なら体育館で放してもチャント家にもどれるでしょう。それから康夫は第二幕のつぐみも自分なりに「演出」してみました。台本では、「思い出の国」のおじいさんとおばあさんをチルチルとミチルが訪ねた時はつぐみも鳴いていて青い色をしているのですが、二人が持ち帰ろうとした時には黒い色に変わつてもう鳴かないのでした。康夫にはそれが、幸福の鳥の「死」を暗示するように思われたのです。

というのも、チルチルとミチルのおじいさん・おばあさんはもう死んでいて、〈思い出の国〉
というの（過去の国）のことだったからです。過去の思い出にどんなに幸福を求めても、
そこにはほんとうの幸福は存在しない——作者のメーテルリンクがそう語っているように
康夫には思われました。そのことを強調するために、二人が持ち帰る時はカラスに似せた
黒い鳥の人形を使い、テープでもカラスの鳴き声を流すことを思いついたのです。

康夫がそのことを先生に話すと、先生は

「フーン、おもしろそうねえ。カラスは不吉な感じがするし……。でも、どうしてカ
ラスに四回鳴かせるの？」

ときいてきました。康夫が

「人が死ぬ時にカラスが鳴いたっていうのを聞いたことがあって。それに数字の4はシ
とも読むからよく不吉な数だって言うから……」

と答えると、先生は

「アハハハハハ」

と言って笑っていました。康夫は先生から笑われると自分でもバカらしく思えてきまし
たが、それなりに「根拠」はあったのです。

運動会も終わってしばらくたったころでした。康夫が学校からもどつてみると、庭に源

兵衛さんの古ぼけた自転車が置いてありました。何かの用事のついでに寄ったのでしょうか。居間で母と源兵衛さんがお茶を飲んでいました。祖父の姿は見えませんでした。康夫も部屋にカバンを置いてくると、階下^{した}におりて来て、二人の間にすわりました。母が

「源兵衛さんからもらったのよ」

と言つて、カキをむいてくれました。源兵衛さんはセンペイをかじりながら

「この前、神社のとこの土手にすわつてゲートボールを見てたらヨ、少し離れた堤防の上でカー公が舞い上がったり舞い降りたりしてんだヨ、何度も。どうもおかしなことをすると思つて見に行つたら、貝がらの破片が散らばつてたんだ。ヤッコさん、貝をコンクリートの上に落として、割つて食べてたんだナ」

「落として割るくらいなんだから、大きな貝なんだろうねえ」

母がむき終つたカキを康夫に差し出しながら言いました。

「ありやあ、アサリやハマグリじゃねえな。おおかた、海の方でも、めつけてきたんだろ……」

「カラスつて、賢いんだね」

康夫が口をはさみました。

「賢すぎても、困るワナ」

源兵衛さんがトボケたように言うと、三人とも笑いました。畑のことを言ってるのが分かったのです。

「おばあちゃんが正月によく言ってたんだけど・・・おばあちゃんのお父さんの方ではねー北国だけどー子どものころ、お正月にカラスにおモチをやって豊作をうらなってたんだって・・・」

「へえー、そうかい・・・」

康夫は白いつしよくの世界に、黒いカラスがモチをくわえて飛んで行くさまを想像してみました。源兵衛さんがしみじみとした声で言いました。

「そーいやあ、バアさんが死んだ時も、カラスが鳴いてたなあ・・・。バアさん、夜に、『あしたの朝、庭の木の下で、白い小鳥が死んでますから、埋めてやって下さい』って言ったんだ。オカシナことを言うなあと思ってたら、バアさん、朝には死んでた・・・。小鳥はいなかったけど、ホオノキにカラスがとまってなあー・・・」

康夫は夏休みに入試問題を解いていた時のことを思い出しました。三角形を作る問題で、カー公は三度ずつ鳴いていたのです・・・

康夫はその時の連想から四回鳴かせるのを思いついたのですが、綾子先生に話してもまた笑われるだけだと思って黙っていました。それでも先生は、日曜日に効果班の生徒を連

れて神社でカー公の鳴き声を録音してきてくれました。ツグミのさえずりは、鳥好きの先生のレコードからテープにとりました。

こうして準備が進むにつれて、各班の作業にも一段と熱が入ってきました。本番一週間まえになると、教室での舞台げいこに効果音も入れてくり返しリハーサルを行っていきました。みんなの気持ちも一つに盛り上がってきた時、ある晩、康夫は不思議な夢を見たのです。

それはこんな夢でした。康夫が校舎の中を走り回っています。文化会の劇の練習を行わなければいけないのに、康夫が何か脚本のようなたいせつなものを忘れてしまったので、みんなは練習にとりかかれなさいのです。康夫はゲタ箱の中を調べたり、あちこちの教室をのぞいてみましたが、どうしても見つかりません。ほかのクラスは全員で合唱の練習をしたり舞台げいこをしていました。とうとう康夫は走りだしました。廊下にかかっていた柱時計を見ると、もう十五分しかありません。十五分ではもう何もできないと思つた康夫は、さがすのをやめて教室にもどることにしました。教室ではみんなが康夫を待っていました。康夫は脚本か何かたいせつなものをどこかに置き忘れてしまったこと、今までそれをさがして遅くなつてしまったことをわびてから

「キャンデーかチョコレートで許してくれない？」

とみんなにこびました。するとみんなは

「許せない、許せない」

と口々に言いました。「頭を丸めろ」という声もしました。

「あと六分しかないのよ」

という声が聞こえて、康夫は目を覚ましました。康夫はしばらくフトンの中で今見た夢のことを考えていました。寝汗をかくようなイヤな夢ではなかったのですが、ナントナク気になったのです。本番を数日後にひかえて、おそらく康夫の気持ちもたかぶっていたでしょう。失敗してはいけない、失敗してはいけないという意識が強すぎて、そんな夢を見たのかもしれない。「頭を丸めろ」という言葉を思い出した康夫は、髪の毛に手をやって思わず吹き出しそうになってしまいました。母から

「康夫、髪が伸びてきたから、床屋に行ったら」

と言われていたからです。

「あと六分しかないのよ」

という言葉が耳の底に残っていました。六という数字に意味があるようだったのですが、よく分かりませんでした。しばらくアレコレ思いめぐらしていた康夫は、数日前に見たテレビのことを思い出しました。それは「核時計」というドキュメンタリー番組でした。核兵器の危険性を訴えて活動している海外の市民団体を紹介したものです。その団体は、核

戦争一步てまえのような現在の状況を、分かりやすく時計の針で示していました。十二時ちょうどになると、核戦争がぼつ発して人類は滅亡してしまうのです。今は十一時五十四分をさしていました。残された時間は、あとわずかしかないのです……。

康夫の小学校では、夏休みに「平和学習」を行っていました。全校登校日に担任の先生から、戦争や原爆についての話を聞くのです。綾子先生は、原爆で亡くなった人の詩を読んでもくれました。たくさんの人たちが、水を求めて川で死んでいったのです。広島、長崎と二つの原爆が落とされて、次は――

「次はもう人類の破滅しかないのですから、みなさんも平和の尊さをよく考えてみて下さい」

と綾子先生は言っていました。康夫はそのことが頭にあつたので、「核時計」というテレビ番組を見てみようと思ったのです。

「あと六分か……」

康夫は天井を見上げたままつぶやきました。頭の中は、目前にせまった上演のことではないでした。

本番の日がやって来ました。文化会は二日間の日程で開かれます。一日目は一・二年生と五年生、二日目は三・四年生と六年生の発表が行われました。会場は体育館で、全校生

徒の前でひろうするのです。康夫は一日目の五年生の劇を見ながら、自分たちも去年はあんなだったのかなと思っていました。五年生は舞台の経験がないためか、どうしてもドタバタ劇になってしまったのです。二日目、四年生の人形劇の発表が終わると、いよいよ六年生の番になりました。康夫たちは一組なので、最初の発表です。休けい時間に入ると、みんなで舞台へ上がって、体育館のわきに用意しておいた大道具を運びこみました。楽屋では役者たちが衣裳に着がえています。女の子たちが

「どうしよう」「どうしよう」

と言いながら、おたがいどうし手を握ったりして不安をはずめていました。大道具のすえつけが終わったゴン太たちがそこにも顔をのぞかせて

「みんな、落ちつくんだ。さあ、深呼吸して。イチ、ニイ、サン！」

と、康夫のお株を奪ってしまったようにみんなを落ち着かせていました。

康夫は舞台の上で最後の指示を行っていました。舞台の奥にはつい立てが並べられ、そこに大道具役の男の子たちが描いた〈思い出の国〉の祖父母の百姓家の絵が貼ってあります。窓の下には机が置かれ、鳥カゴの中に青いつぐみの人形が入れてありました。舞台の下手にはテーブルが出されてイスが二つ置いてあります。そのイスに、祖母役の光子と祖父役の芳子がすわりました。光子はカッポウギを着て頭には白い頭巾をかぶっています。

芳子はオーバーオールをはいて毛糸の帽子をかぶっていました。舞台の上手には、ダンボールで作ったカシの木が立ててありました。裏はベニヤ板で補強してあるのですが、枝の方が大きくてユラユラしてしまい、何だかオバケのように見えます。チルナルとミチルはそのカシの木のかげから登場するのです。

チャイムが鳴って、生徒たちが席につき始めました。康夫は照明係と効果係の子からOKの合図をもらおうと、司会役の女の子に準備ができたことを告げました。

「静かにして下さい。次は六年一組の劇、メーテルリンク作『青い鳥』です」

舞台の下に置かれたマイクで司会役の女の子が言うと、ザワザワしていた観客席が静かになりました。まだ幕は上がりません。ナレーター役の子がマイクの前に立って、省略した第一幕の内容を語り始めました。

「クリスマス・イブの晩でした。貧しい木こりの子、チルチルとミチルの兄弟の家に、不思議な妖婆が訪れて来たのです。その妖婆は……」

ナレーターの説明が終わると、静かに幕が上がって、舞台の照明が少しずつ明るくなってきました。康夫は舞台のそでに立ってカーテンで体を隠しながら、舞台と客席の両方を見ていました。

「おじいさんや、今日あたり孫たちが訪ねてきてくれるような気がするんですが……」

光子と芳子の会話が始まりました。二人とも緊張のためか、声がうわずっているようです。そこへカシの木の後ろからチルチルとミチルが飛び出して行きました。

「カワイイ！」

観客席から声がかかりました。二人とも女の子がやっていたのですが、チルナルは青い半ズボンに赤いシャツ、足には白い長くつ下をはき、ミチルはレースの飾りのついたドレスを着て頭には赤い頭巾をかぶっていました。祖母役の光子がイスから立ち上がって二人を出迎えに行きました。芳子も立ち上がると、杖について歩き出しました。芳子の肩が大きく上下に揺れました。その時

「ピノキオだ、ピノキオだ」

という声でした。笑い声も起きました。その声が芳子の耳に聞こえたのか、芳子はいよいよ立っての足につまづいてころんでしまったのです。笑いのウズが広がりました。康夫は見ていられなくて、思わず目をつぶりました。その時また客席から

「芳子ちゃん、ガンバッテ！」

という声がかかったのです。何人かの女の子たちがいっしょに出した声でした。康夫はその声の中に、確かに勝子の声を聞いたように思いました。勝子たち衣裳係の子は、観客席にもどって見ていたのです。その声援に励まされるように芳子は杖を拾って起き上がる

と、演技を続けました。必死で演じているのが見る者の胸を打つような演技でした。もう笑い声もやんでいました。最後にテープからカー公の鳴き声が四度流れて、ナントカ第二幕を終えることができました。幕が下りて舞台のそでの方にもどってきた役者たちを、いつの間そこに来ていたのか、綾子先生が

「みんな、良かったわよ」

と拍手をして迎えていました。先生は首からカメラをブラ下げて、観客席の方から写真をとっていたのです。康夫も芳子に何か声をかけてやりたかったのですが、青白い額をしてうつ向いたままの芳子を見ると、何もできませんでした。第五幕〈未来の国〉のセツティングが終わってナレーターの説明が始まった時、康夫は舞台から下りて楽屋の方にまわってみました。おおがらな勝子の胸に顔をうずめるようにして芳子が泣いていました。まわりで何人かの女の子たちがもらい泣きをしていました。そのそばで吉田ゴン太が

「ピノキオだなんて言ったヤツ、あとでオレが見つつけ出して、ブンなぐってやるから」と、さかんに息まいていました。芳子の髪をやさしくなでながら、勝子が子どもをあやすように

「もういいのよ、吉田くん。ねえ、芳子ちゃん」

と言うと、芳子も泣きじゃくりながらうなずいたようでした。それを見てゴン太も黙っ

てしまいました。康夫はまた舞台にもどりました。

出だしでつまづいた康夫たちのクラスでしたが、最後は盛り上げて終えることができました。第六幕へ目ざめの幕切れは、チルチルが自分のキジバトをとりの病気の女の子にやろうとして手渡そうとした時、ハトが逃げてしまふところで終わるのです。舞台では、チルチル役の子が鳥カゴから白い鳩を出して体育館に放ちました。ドツとどよめきが起こり、生徒が見上げる中を、鳩は悠然と体育館を二周して開いていた窓から外へ飛んでいってしまいました。幕が下りて、体育館は大きな拍手に包まれたのです。

大道具を運び出す前に、みんなが舞台で記念写真をとりました。役者の子は衣裳を着たままで写ったのですが、その時には芳子も涙を流して気が晴れたのか、明るい顔つきになっていました。ゴン太たちは自分たちの描いた背景の絵の前でポーズをとって、カチャリ！と綾子先生のカメラに収まっていました。六年生の発表が終わったあと表彰式が行われました。康夫たち六年一組は演劇の部で「優秀」に選ばれました。クラスを代表して康夫が壇上にのぼって校長先生から表彰状を受け取ったのですが、康夫は晴れがましかった半面、背中に芳子の視線を受けてるような気がしたのです。校長先生は

「いろいろな障害があつたのですが、それを乗り越えて、クラスいちがんととなって取り組んでいて、良かったと思います」

と述べていました。

文化会が終わって、またふだんの学校生活にもどりました。康夫は劇のことを思い出すたびに、自分が間接的に芳子を傷つけてしまったのではないかと思って悩んでいました。芳子に直接そのことをきいてみたのですがどうしても言葉かけることができず、康夫はズルズルと目を過ごしていました。いつしか木の葉が散って、ストーブが恋しい季節になっていました。そんなある日の朝、康夫はけたたましいカラスの鳴き声で目が覚めたのです。

フトンの中で耳を澄ましてみると、確かにカー公の鳴き声です。康夫ははね起きると、雨戸を開けてみました。向かいの家のテレビアンテナにカー公がとまって、さかんに鳴き叫んでいます。下を見ると、庭に祖父とおばあちゃんと母の三人が出ていました。祖父は白いトレーニングウェアを着て足踏みをしています。おばあちゃんはキービーちゃんを胸に抱いて、祖父に向かって何度も頭を下げていました。母は、そんな二人をとほうにくれたように見えています。康夫は寝まきのまま部屋を出て、階段を下りて行きました。玄関でサンダルをつっかけた時、祖父がどうしてそんな格好をしているのか、康夫にもようやく思いあたることがあったのです。

それは文化会も終わって一週間ほど過ぎた日曜日のことでした。康夫が朝御飯を食べ終

わって新聞でも見ようと居間に入って行くと、縁側で祖父がムツツリと腕組みをしてすわっていました。将棋盤は出したままです。康夫が源兵衛さんはまだ来てないのかなと思いなから奥の方へ歩いて行くと、戸袋のかけに隠れていた源兵衛さんの姿が目に入りました。康夫は思わず声を上げそうになりました。いつもの薄汚れた野良着すがたからは想像もできない格好を源兵衛さんはしていたのです。源兵衛さんは明るいクリーム色のトレーニングウェアを着て、頭にはマツカな野球帽をかぶっていました。手には何か細長いものを入れたケースを下げています。そんな源兵衛さんを、祖父は見下すように見たままです。源兵衛さんは康夫の姿を見ると、救いの神を得たように話しかけてきました。

「畑仕事も一段落したからゲートボールでも始めようと思つてヨ……。運動会のタルころがしの時に『源^{ゲン}さん、あんなにタルころがすのがうまいんなら、ゲートボールも上達すんじゃないかい』つてすすめられちまつてヨ……」

源兵衛さんはそう言うと、手に持つていたケースを開けてゲートボールのスティックを取り出してみせました。両手でスティックを握つてボールを打つまねをして、マンザラでもないようです。康夫はそんな源兵衛さんの姿をほほえましく思いながら、源兵衛さんの頭に目をやつて

「源兵衛さん、それ……」

と言いました。源兵衛さんは康夫の視線に気がつくと、照れくさそうに帽子をとって

「アア、これかい。ハデだとは思ったんだが、ゲートボールの刺しゅうがしてあってヨ……」

と言いながら、康夫に手渡しました。康夫が手にとって見ると、確かに帽子の正面にステイックとボールの絵が白い糸で刺しゅうしてありました。康夫は、源兵衛さんは祖父をゲートボールにさそいに来たのかなと思いつつ、帽子を返しました。案の定、源兵衛さんが足どりも軽く庭から出て行く後ろ姿を見送っていた祖父は

「あんなジジむさいもの、できるか！」

と吐き捨てるように言ったのです。康夫はタタミの上に寝ころがって新聞を見ながら、何事につけ源兵衛さんに負けるのが嫌いな祖父がこのまま黙って引き下がっているはずはないゾ、と思いました――

「行かないで下さい、お願いします。行かないで下さい、お願いします」

康夫がサンダルをはいて庭に出て行くと、おばあちゃんのこう言っている声が聞こえてきました。祖父は今は、脚の屈伸運動をしたりアキレスけんを伸ばしたりしています。これからどこか走りに行くのでしょうか？二人の間に困りはてた顔をして立っていた母は、康夫の方をチラッと見ると

「お父さん、けさは寒いですから、また別の日にしたらどうです」

と祖父に言いました。確かに祖父の口からは白い息が出ていました。祖父は母の言葉に耳を傾げるけはいはいっこうになく、準備体操を続けています。母は同意を求めるように康夫を見てから、心配そうな顔を向かいの家の屋根に向けて

「気のせいかな、あのー」

と言いかけた時、祖父が

「バカモン！おまえはバアさんがうるうるせんように、家に入れとけばいいんだ」

とイツカツすると、誰に向かつてともなく

「オレはな、満州で、チャンコロの首を切ってきたんだ。シベリアの寒さは、こんなもんじゃないぞ。シヨーベンが凍るんだよ、分かるか？負けてたまるか、クソツ！ヤマトダマシイがどんなものか、おまえらに見せてやる」

と吠えるように言うと、スタスタ走り出して行ってしまいました。母はあわてて家にかげこむと、どこかに電話をかけていました。おばあちゃんはいいかわらずブツブツ言いながら、祖父の走り去った方に向かって頭を下げていました。大川の堤防の上に一瞬祖父の姿が浮かび上がって、また庭木のかげに隠れてしまいました。康夫は胸が高鳴ってくるのを覚えました。ドキドキドキドキ、ドキドキドキドキという心臓の鼓動とカー公の鳴き声が、重なっているように感じたのです……。

祖父は戦争中、おばあちゃんと結婚して一月で兵隊にとられると、満州へ送られてしまいました。そこで終戦を迎えたのですが、進攻してきたソ連軍に捕えられてシベリアに送られてしまったのです。祖父がなかなか引き揚げてこないのも誰かが祖父は戦死したものだと思い、おばあちゃんの再婚話を進めていたところ、祖父がヒョッコリもどつて来たのです。祖父はシベリアで抑留生活を送っていたのでした。復員した祖父は材木問屋を起こして手広く商売を営んでいました。子どもも三人もうけてはた目には幸福そうな家庭に見えたのですが、一度ギクシャクしてしまったおばあちゃんとの仲は、もう元にはもどらないのでした。

おばあちゃんが再婚しようとした相手が源兵衛さんだったのです。源兵衛さんも兵隊にとられましたが、内地勤務で終戦を迎えていました。源兵衛さんと祖父は幼なじみで、そんなところからも源兵衛さんに再婚話を持ちこまれたのです。源兵衛さんも乗り気になつていたところに祖父が帰つて来て、縁談は流れてしまいました。その後源兵衛さんは土地の女性と結婚し、神社の近くに家を構えました。源兵衛さんには子どもができませんでした。数年前に連れ合いを亡くしてからは、一人暮らしが続いていました。

源兵衛さんと祖父の間に感情のモツレはありましたが、一人が幼なじみだったこともあって、それからも二人のつき合いは続いていました。特に源兵衛さんが長年勤めた小さ

な燃料具店をやめて年金生活に入ってから、源兵衛さんは毎日のように康夫の家へ将棋をさしに来ていました。祖父も同じころ隠居生活に入ってヒマを持てあましていたので、源兵衛さんはかつこうの「ヒマつぶし」の対象になったのです。源兵衛さんが康夫の家に来るようになって、逆におばあちゃんが源兵衛さんの家へ遊びに行くようになりました。それまではおばあちゃんと源兵衛さんの連れ合いの間にはそれほど深いつき合いはなかったのですが、おばあちゃんは毎日のように出かけて話しこんでいました。もともとおばあちゃんは外へ出歩く方ではなかったもので、源兵衛さんの連れ合いが唯一の茶飲み友だちと言ってもいいくらいでした。

おばあちゃんの気が違ってしまったのは、その連れ合いが病気で亡くなったあとでした。葬式も終わって数日後、ある日プイと姿が見えなくなってしまったのです。夜になっても帰ってこないで家族で手分けをしてさがしましたが見つかりません。朝まで待ってもどらないので、警察へ捜索願を出しました。警察では大川の川ざらえをしたり、町の有線放送で呼びかけたりして、小さな町ではチョットした騒ぎになりました。おばあちゃんが見つかったのはいなくなってから三日後のことです。家から十数キロ離れた山の中を山狩りしていた消防団の人たちが、沢で倒れているおばあちゃんを発見したのです。おばあちゃんにはだしで山の中を歩き回ったのか、足がキズだらけでした。衣服も泥だらけでしたが、

幸い生命いのちに別状はありませんでした。消防団の人に抱き起こされたおばあちゃんは意識を取りもどしたのですが、自分の名前を言えませんでした——記憶を失っていたのです。警察へおばあちゃんを引き取りに行った康夫の母は、魂が脱けてしまったようなおばあちゃんの姿を見ると

「お父さんがあんまり責めるもんだから・・・」

と言って泣きくずれてしまいました。それからのおばあちゃんは、いつも家の周りをフラついていました。そして家の者でも誰からでも声をかけられると

「アタシはほかの男となんか寝ていませんよ」

と答えるのでした。祖父はそれをとてもイヤがって母におばあちゃんを家の中へ入れておくように言っていたのですが、おばあちゃんは家の中に閉じこめられると、気が違ったネコのように障子や唐紙を引き裂いてしまうのでした。そんなおばあちゃんにとって、唯一の話し相手がキービーちゃんらしく、「キービーちゃん、キービーちゃん」と言っては肌身はなさず持ち歩いていました。寝る時もおフロに入る時も、いつもキービーちゃんといっしょだったのです・・・。

不安な思いで学校に行った康夫は、案の定、一時間目の授業のとちゅうで家から電話が入って呼びもどされました。一時間目は算数の小テストを受けていたのですが、事務の女

の人が教室のドアをノックすると、綾子先生に小声で何か伝えていました。先生はすぐに康夫の席へ歩いて来ると、身をかがめて

「康夫くん、すぐ荷物を持って事務室へ行つて。お母さんから電話が入ってるのよ」

と言いました。康夫がはやる心を押さえながら事務室へ行くと、先ほどの女の人が黙って電話を指さしました。康夫が受話器をとると、母の涙声が流れてきました。

「康夫、すぐ帰つてきて。おじいちゃんが倒れちゃったのよ」

康夫は学校を出ると、神社の前を通つて大川の土手の上を歩いて行きました。そちらの方が少し遠回りになるのですが、おばあちゃんのこと気がなつて仕方なかったのです。神社の柱にはカー公はいませんでした。そして走りながら見た大川の河原にも、おばあちゃんもりの姿は見えませんでした。康夫が息せき切つて家の中へかけこんだ時、祖父はすでに冷たくなつてフトンの上に寝かされていました。そして祖父の横で、おばあちゃんがキーピーちゃんのようちに小さくなつて添い寝をしていたのです。

第一発見者は源兵衛さんでした。朝、祖父が走り出したあと、心配になつた母が源兵衛さんに電話して自転車であとを追つてもらつたのです。祖父は大川の土手を下流に向かつて走つて行きました。神社を過ぎ、さらに下流に行くと、鉄橋と並行して木の人道橋がかかっています。祖父はその上まで来ると、急にフラフラして倒れてしまつたのです。源兵

衛さんがあわててペダルをこいでかけつけてみると、祖父は口からアワを吹いて体を引きつらせていました。心臓マヒでした。

康夫は祖父の枕もとに、源兵衛さんと並んですわっていました。急いで会社からもどつてきた父が、母と、親戚の家や葬儀屋に電話をかけていました。康夫のとなりにすわった源兵衛さんは、時々思い出したように

「何やなあ・・・何やなあ・・・」

とつぶやいては、鼻をグシュグシュいわせて目がしらを押さえていました。祖父の死顔を見つめていた康夫は、今さらながら、朝、祖父を引き止めなかったことを悔やんでいます。それは向かいの家のテレビアンテナにとまっていたカー公が

カーカーカーカー

カーカーカーカー

と、くり返しくり返し四度ずつ鳴いていたからです・・・。

その年の正月は、寂しいものになりました。モチュウということで、正月を祝えなかったのです。近所の人たちが年始まわりに来ることもなければ、元日に年賀状が配達されることもありませんでした。毎年学校では十二月に入ると、子どもたちが年賀状を出すのに住所をきき合います。康夫もカラスの女の子から住所をきかれて

「モチュウで年賀状をもらえないんだ。この前おじいさんが死んだでしょ、それで」

と答えていました。正月が静かだったのはそのためばかりでもありません。何より祖父がいなくなったので、家の中にポツカリ大きな空洞ができてしまったようなのです。それまでは、良くも悪くも祖父が一家の中心だったのですから。

おばあちゃんも、祖父が死んでからは前にもましてフヌケのようになってしまいました。もう以前のようにうろつき回ることはありません、家の中に閉じこもってばかりいました。祖父の葬儀や初七日、四十九日の時も、喪服に身を包んで黙って頭を下げ続けていました。「アタシはほかの男とー」という言葉も言わなくなり、あれほどたいせつにしていたキービーちゃんも、どこかに置き忘れたのか捨ててしまったのか、もう持つてはいませんでした。祖父が生きていた時は母が二人分の食事を別で作っていたのですが、今ではおばあちゃんも康夫たちと同じ食事をいっしょに食べていました。康夫が見ていると、おばあちゃんは背をまるめてお茶碗をお膳の下に隠すようにして持ち、時々もの思いにふけるのかハシ

を落としてしまいました。

祖父の死のあと、カー公の姿も見えなくなっていました。冬休みに入って源兵衛さんが畑でとれた大根を家に持って来てくれた時、康夫は源兵衛さんにきいてみました。

「源兵衛さん、このごろカー公の姿が見えないけど、どうしちゃったんだろう」

「カー公かい？アイツは冬場は市の方^{マチ}に行つてんだよ。このあたりのカラスはみんなそうさ。冬は市に集まつて過^ごすんだよ。春になりや、またもどつて来るだろ……」

源兵衛さんが答えると、流しでもらったばかりの大根を洗っていた母が

「源兵衛さん、冬はカー公にやられなくてイイのがとれるから、うれしいだろ」

と口をはさみました。源兵衛さんは首を横に振ると

「オレはなあ……もうカー公にやられても、メクジラ立てねえことにしたんだよ……」
と言いました。

「どうしてさ？」

「どうしてもこうしても……シンキョウの変化つて言うやつか……このトシになりやあ、いろいろ考えることもあるワサ……」

「へーえ、そうかねえ、そういうもんかねえ……」

タワシでゴシゴシ洗いながら母が言うと、二人とも黙りこんでしまいました。康夫は、

さっきの源兵衛さんの話を聞いて、たずねてみたいことがあります。

「源兵衛さん、冬はどうしてカラスは市マチに集まるの？」

「ウン、カラスかい……。おおかた、向こうの方がエサが多いんじゃないかねえか……」

源兵衛さんはそう答えましたが、どうも自信はなさそうでした。それを聞いた母が、大根を洗う手を休めて

「どうして都会はあんなにカラスが多いんだろうねえ。やっぱり残飯が多いのかねえ」

と言うと、源兵衛さんは

「それだけボンノウも多いんじゃないかねえか……。オレもヤツさんが死んで、さびしいよ……」
と、遠くを見るような目でつぶやいたのでした……。

正月、家族でコタツを囲んでお雑煮を食べていた時、康夫の受験のことが話題になりました。二学期は父母会はなかったのですが、暮れに母が学校へ電話した時——母は、康夫が祖父の葬儀の関係で何日か学校を休んでいたのをわびたのです——綾子先生から逆にフゾクのことを念を押されていたのでした。母がそのことを父に伝えていたのでしよう。煮豆をハシでつつきながらおちよこで酒を飲んでいた父は

「今年はおれもヤクドシだから、体にだけは気をつけんとな」
と言うと

「一年、みんなが健康で過ごせれば……」

と言葉をはさんだ母にうなずいてみせてから

「一郎も、来年は大学受験だな。康夫は、中学か……。康夫、おまえ、フゾクどうすんだ？」
ときいてきたのです。康夫はハシでお椀の中をかきまぜながら

「受けないかもしれない……」

と答えました。それを聞いた兄が意地悪そうに

「自信がないのか？」

とききました。康夫が何も答えないでいると、母が代わりに

「康夫、受けてみなければ分からないじゃないの。落ちたら、町の中学に行けばいいんだし」と言いました。康夫は

「そうじゃないんだ」

とつぶやきました。

「そうじゃないんだったら、どうなの？」

キツモンするような母の口調に押されて、康夫は

「みんなと別れたくないんだ」

と答えました。

「バカだな、おまえ」

一郎が笑いだしました。康夫は黙っていました。「みんな」という言葉を言った時、康夫の胸には芳子の顔が浮かんでいたのです。

「おまえのことなんだから、よく考えて、自分で決めなさい」
父がそう言ってくれました。

三学期が始まりました。願書の受付開始がせまっていたので、結論を急がなければなりません。康夫はその前に、どうしても芳子と話しておきたかったです。すると康夫の願いが天に通じたのか、始業式も終わって数日後、帰りがけに校門のところで

「康夫くん」

と、芳子から声をかけられたのです。ゲタ箱のところでは芳子の姿は見ていましたが、カラスの女の子といっしょでした。後から来る康夫を、わざわざここで待っていてくれたのでしょうか？

二人は並んで歩き始めました。どちらから言うともなく、二人の足は神社の方に向かっていました。康夫は神社から大川の上流の方に、芳子は下流の駅に近い方に住んでいます。二人とも遠回りになるのですが、この畑の中の道は人通りが少ないのです。前を歩いている生徒も、二、三人しかいませんでした。

康夫は芳子から声をかけられたので芳子は何か言いだすのを待っていました。芳子は黙ったままです。それで康夫は迷ったのですが、自分の方から話してみることになりました。芳子に聞いて欲しかった、受験の悩みです。

「芳子ちゃん、ボク今、先生から附属中学受けてみないかって、言われてるんだ・・・」
「そう・・・」

芳子はそう言っただけで、足もとを見つめたまま歩いて行きます。康夫は話のツギホを失ってしまいました。芳子のあまりにそっけない反応に、芳子に抱いていた期待がいつ頃にしぼんでしまうのを感じました。康夫は悩みを打ち明けたことを後悔し始めました。芳子の心の傷は、まだいえてないのでしょうか。康夫は言おうか言うまいか迷いましたが、思い切って芳子にきいてみることにしました。

「芳子ちゃん、文化会の時のことだけどー」

「あたしね、康夫くん」

芳子が康夫の言葉をさえぎると、下を向いたまま話し始めました。自分に語りかけるようにでした。

「クラスの話し合いの時康夫くんが二組では『青い鳥』を上演したいと思います」
って言った時、ビックリしちゃったの。だってあの本、あたしお母さんに買ってもらって何

度も読んだことがあるんだもん。あたしあの本読むたびにね、病気の子はあたしだなんて思ってたの。チルチルのとなりに住んでる女の子。あの子は病気で寝たきりで、あたしも病気で足が悪くなつて……。いつもね、誰があたしに青い鳥を持って来てくれるのかなあつて、思ってたの。チルチルとミチルのように、幸福の青い鳥を、誰が持って来てくれるのかなあつて……。

クラスで役割決めた時、あたし足が悪くなかつたら、「光」の役やつてたと思うな。光つて、スゴいわよね。チルチルとミチルをいろんな国に案内してやつて、危ない時は助けてやるし、最後には二人の目が見えるようにしてやるんだもん。ほんとうの幸福つてどんなことかを……。

そんなことを考えてたらいきなり竹山くんが手を上げてあたしの名前でしたでしょ。あたし、そんなこと初めてだったから、頭の中がボーッとしちゃつて、何が何だか分からなくなつちやつたの。先生にきかれてどうしてうなずいたのか、今でもよく分からないのよ」

芳子はその時のことを思い出したように、口の端に笑みを浮かべました。

「あたしずつとね、人の後ろに隠れて生きてきたの。小さい時からずつと……前の学校でも……足が悪いから、笑われないように、笑われないようにしようつて、いつもみんなの後ろに隠れてたの……。あたし、うらやましかつた……。康夫くんなんか、み

んなの前に立って……。カッチャンやゴン太くんも、運動会の時……。それにくらべてあたしなんか、勉強もできないし、何のトリエもないんだもん……。

でもあたしもね、自分の中のもう一人のあたしが、『そんなあたしじゃない』って言うてるの、気づいてたんだわ。いつまでも病気の女の子のように、誰かが青い鳥を持って来てくれるのを待ってちゃいけない。『自分でさがしに行きなさい』って言うてるの、分かったの。だから、あの時、うなずいたんだって思うの。あたしのやりたい役じゃなかったけど、でも、あたしには合ってた……。

芳子はそう言うと、下を向いたままほほえみました。

「夏休みに、康夫くんのおばあさんに会ったからかもしれないな、盆踊りの時。康夫くんのおばあさんて、スゴイのね」

（聞こえてたんだ！）

康夫は芳子の顔がこちらを向いているのを意識しながら、体がほてってくるのを感じました。

「そうじゃないんだ、芳子ちゃん！ボクだって、ホントは……。ホントは……」

康夫は喉まで出かかっていた叫びを飲みこみました。どうしても言えませんでした。そんな康夫を横から見ている芳子は、また前を向いて話し出しました。

「ピノキオって、何度も言われたことがあるの、小さい時からずっと……。だから、

もう気にならないって思ってたのに、舞台の上ではころんじゃって……。恥ずかしかった、死ぬほど恥ずかしかった……。ステージの床の上に倒れて、目で杖をさがして―あたしは杖がないと立てないから―体ではって行って、一生けんめい腕を伸ばして、杖を握って、体を起こして杖を立てて、右足を曲げてひざを立てて、体重を杖にかけて立ち上がった。……。ホントに長かったわ、あの時間……。その間、今まで何度も何度も思ってきたことをね、また思ってたの。どうしてこんな体で生まれてこなければいけなかったの！何にも悪いことしてないのに、あたしは悪いことなんかしてないのに、どうしてビッコになんかなっちゃったの！ってね……。『青い鳥』の〈未来の国〉で、子どもたちが生まれる時に何かひとつ地球に持つて行くことになってるでしょう。どうしてそれがアタシの場合、ビッコの足なの！って、叫びたかった……。あの時、舞台の上で……。でも、できなかった……。あたしの足が悪いのは、みんなのせいじゃないもんね。それはよく分かっているの。分かっても……。。

そうやって立ち上がった時、あたし、何だか不思議な感じになっちゃったの。初めて自分の足で立てたって言うような……。おかしいでしょ、杖をついてるのに。でもその時はそう感じたの。あたし、あとで泣いちゃった。でも泣いたのはね、悲しかったからでも恥ずかしかったからでもないの。あんなにオクビヨウだったあたしが、あんなにおおぜい

の人の前で、笑われても、最後までやりおおせたんだって思うと、うれしくなつて……」
康夫は誤解していました。芳子は、カッチャンになぐさめられていたわけではないのです……。

「最後に白いハトが飛んだでしょう。あたし、あのハトを見ながら、病気の女の子も自分で青い鳥をさがさなくちゃいけないわ、あたしのように。チルチルなんかに頼まないで。だから鳥が逃げたのよ、って思ってたの。そうしたら近くにいた男の子が

『ハト、飼いたいなあー』

って言ったの。あたし、その子の顔見てハツとしちゃった。竹山くんだったの。だってあたし、竹山くんに推せんされなければ、ゼツタイ自分から劇なんかに出ることはなかったんだもん……。

チルチルとミチルもそうなのよね。二人は自分からさがしに行こうとしたんじゃない、となりのおばあさんに頼まれたわけでしょ。病気の娘が青い鳥を欲しがってるって……。チルチルとミチルはいろんな国を旅して、けつきよく、自分たちが飼ってたキジバトが青い鳥だつていうことに気がつくんだけど、それは女の子が頼んだからなのよね。病気の女の子が二人に頼んで、二人は初めてほんとうの幸福が何なのかということを知ったの……。金岡くんの白い鳩が体育館の窓から外へ飛んで行くのを見た時、あたし、青い鳥って、誰の持ちものでもないのじゃないかなって思ったの。青い鳥って、誰も持てないもの……。

キジバトはチルナルが飼ってたんだけど、チルチル、それが青い鳥だつて知らなかったでしよ。病気の女の子から青い鳥をさがしてつて頼まれて、初めて幸福の青い鳥に気づいたのよね。あたし、青い鳥は最初、女の子のところにいたんじやないかなつて思うの。それをチルチルが受けとつて、またチルチルから女の子に手渡そうとした時に、飛び去ったの、青い鳥を求めている人のとこへ……。

あたしも舞台上に立つて、青い鳥を受けとつたのかもしれない。竹山くんや、いつしよにやつてくれたカラスのみんなから……。それに、あたしのこと笑った子たちからも……。あたしも、チルチルのように、誰かに青い鳥を手渡せたのかな……。足の悪いあたし、いつもみんなの後ろに隠れていたあたしが、〈思い出の国〉のおじいさんの役をやつて、歩きだしたんだ、あたしの足で！どんなに笑われても。病気の女の子もそうでしょ。チルチルがハトを渡そうとした時、ベッドから起き上がつて、歩いたのよね。あたし、あの時、ガンバツタんだもん！」

芳子はそう言うと、立ち止まつて上氣した顔を康夫に向けました。芳子の頬に、赤みがさしてきました。

「康夫くんがああ劇にしたから、あたしにもできたんだ。だから、康夫くんにも、お礼を言わないといけないな。ア・リ・ガ・ト・オ」

芳子はペコリと頭を下げると、クルリと振り向いて行ってしまいました。足早に歩き去る、芳子の肩が大きく上下に揺れていました。康夫はそこに立ちつくしたまま、芳子の姿を見送っていました。受験の悩みを打ち明けようとしたことなど、どこかに吹き飛んでいました。やがて芳子が畑の向こうの線路のガードをくぐって姿が見えなくなると、康夫はいきなり走り出しました。神社の前を過ぎて、大川の堤防をイッキにかけ上りました。遠く鉄橋越しに、夕陽が沈むところでした。太陽は、河口の方の西の空を赤々と染めていました。しばらく夕陽を見ていた康夫は、足はずませながら、土手を歩いて家に帰りました。フゾクには行かないことにしました。夜、家でそのことを両親に話すと、二人とも

「そう・・・おまえがそういう気持ちなら、仕方ないね・・・」

と言ったきり黙りこんでしまいました。理由は特にきかれませんでした。翌日学校に行つて綾子先生に話すと、先生は軽くうなずいただけでした。康夫が自分の進む道を決めて四月からの中学校生活に胸をふくらませ始めた時、思いがけぬことが起こって、康夫の夢も一時しぼんでしまったのです。

芳子と話して数日後のことでした。給食を食べ終わった康夫はおながモーレッツに痛み始め、保健室へ行って横になっていても良くならないので早退することにしました。ナントカ家まではたどりついたのですが、フトンに横になってセイロガンを飲んでも少しも痛

みは収まりません。腹イタは夜通し続いて、康夫は眠ることができませんでした。翌朝、会社を休んだ父の車で町立病院に行つて診^みてもらおうと

「盲陽炎で、すぐ手術をしなければ」

と言われて、その場で入院ということになってしまったのです。手術は午後行われました。背骨にマスイを打たれたのですが、手術台の上で康夫はまだおなかに感覚が残つてるようで、ジョリジョリというメスの音がするたびに、チクツと痛みのようなものが走りまわりました。手術が終わつたあと、先生が康夫に切り取つたばかりの盲腸を見せてくれました。康夫が

「タラコみたいだ」

と言うと、先生も看護婦さんもマスク越しに笑っていました。

康夫は四人部屋に入り、母が毎日つきそいに来てくれました。綾子先生も二、三日おきに見舞いに来てくれました。盲腸は手術して一週間もすれば退院できると言われていたのですが、康夫の場合は傷口がうんでしまい、思わぬ長期間の入院になってしまいました。傷口がうんだと言つても特に痛むわけではなく、毎日先生が診察に回つて来て看護婦さんがガーゼを取りかえてくれる時、チクツと痛みが走るていどでした。あとは食事も普通で体もどこも悪くありませんでしたから、康夫はかなり体力を持てあましていました。先生から歩くのが傷口がつくのがいいと言われたので、毎日病院の中をあちこち歩き回つてい

ました。あとは母が家から持って来てくれた本を読んだりラジオをイヤホンで聴いたり、同室の若い男の人が読み古した週刊誌を見せてもらったりしていました。

康夫の入院が長びいて、綾子先生がクラスでそのことを言ったのでしょうか。手術して十日後くらいから、クラスの仲間が見舞いに来てくれるようになりました。全員で一度に来たのではなく、友だちどうし連れ立って学校の帰りに寄ってくれたのです。みんな

「早く良くなってね」

と言ってくれました。女の子の中には小さな鉢植えを買ってきてくれたり、折り紙でツルを折ってきてくれた子もいました。康夫は女の子の声が廊下でするたびに、芳子の姿を想い描いていました。カッチャんたちは来てくれましたが、その中に芳子はいませんでした。午後何もすることがない時など、康夫はベッドの上に仰向けになって、よく白昼夢のようなものを見ていました。

白い建物が見えます。康夫の小学校です。グラウンドには誰もいません。みな教室で授業を受けているようです。そこへ康夫が空からヘリコプターのようなものに乗って下りて来ました。ヘリコプターが校舎に近づくと、中から縄バシゴが下ろされて、康夫はそれを伝わって降りて行きます。康夫は六年一組の教室まで来ると、そこで待っていた芳子を抱きかかえて、縄バシゴに吊り上げられるようにして飛び去って行きました。康夫は、どこか

別の惑星から芳子を迎えに来たのです……。

あるいはこんな“夢”も見ました。康夫が小さなハチになって芳子の家に飛んで行くのです。ハチになった康夫は芳子の部屋に入って、空中に止まったまま、一日じゅう芳子を見ているのです。康夫はハチなのに、人間のように部屋の中が見えるのです。芳子が夜フロに行くとき、ハチの康夫も気づかれぬようにあとをつけてフロ場に入ります……。

二月も終わろうかというころになって、ようやく康夫は退院することができました。すぐにも学校へ行きたくかったのですが、一日だけ家で休んでいました。入院中に髪も伸び、卒業式も近かったので、床屋に行ってきました。翌日学校へ行ってみると、カラスのみんなからは拍手で迎えられました。康夫はそんな重病ではなかったのにと思うと照れくさくなりましたが、うれしく思いました。もう授業はなく、みんなで卒業文集を作っていました。学校へ行けば芳子の顔が見られると期待していたのですが、芳子は欠席でした。次の日も休みました。康夫がそれとなくカツちゃんにきいてみると、康夫が入院した間は芳子も来ていたのに、康夫が出てくると交代でもするように休み始めたということでした。康夫は芳子が病気でもしているのではないかと心配になりましたが、綾子先生も芳子のことは何も言いませんでした。

芳子はその後も休み続け、学校に出て来たのは卒業式の前日になってでした。康夫は芳

子の姿を見るとひとこと言葉を交わしたかっただのですが、芳子は康夫と目が合うと、なぜか顔を伏せてしまうのでした。その日は卒業式の予行演習を行っていたので、康夫は芳子と話す機会を持ってぬまま翌日の式を迎えていました。

卒業式は講堂で行われました。ひとりひとり壇上へのぼって、校長先生から卒業証書を受け取ります。いつもは落ち着きのないゴン太たちも、この日ばかりは神妙な顔をしてすわっていました。芳子が卒業証書を受け取りに行く時、静かな講堂に、コツコツという杖のあたる音が響きわたりました。式が終わったあとは教室にもどって、担任の先生から通信簿や卒業アルバムを受け取りました。一組では、綾子先生がひとりひとりと握手をして手渡しました。それも終わると、最後に先生が

「みなさんも中学に行ったら、勉強にクラブ活動に、それぞれの力を伸ばして下さい」

と言いました。先生の顔は上気していて、少し涙声になっていました。康夫が立って号礼をかけて

「一年間、ありがとうございました」

と先生にお礼を言いました。みんなは口々に

「四月にまた会おうねー」

と言いながら帰って行きました。小さな町なので、四月になったらまた同じ中学で顔を

合わせるのです。康夫は校門のところで芳子を待っていました。講堂からもどる時に廊下で芳子から

「康夫くん、今日いっしょに帰らない」

と声をかけられたのです。康夫は思いがけず芳子から声をかけられてうれしかったのですが、芳子はナントナク寂しそうな顔をしていました。校門で待ち合わせることにしました。卒業式の終わった子どもたちが、次々と校門を後にして行きました。どの子も荷物をかかえています。友だちどうし連れ立って帰る子もあれば、着飾ったお母さんやお父さんといっしょに帰る子もいました。康夫の家では母が来ていたのですが、式のあとはPTAの祝賀会に出ると言っていました。芳子の家はどうなのでしょう？康夫がそんなことを考えていると、ようやく人波がとどえて、芳子が一人で歩いて来ました。二人は並んで歩きだしました。この前の時のように、神社の方に向かっていました。康夫は二ヶ月ぶりに芳子と話をすることができて、胸がおどるようでした。四月からの中学校生活のことを芳子と話したくてウズウズしていたのです。

「中学に行ったら、何のクラブに入ろうかなあ……。生物部もいいし、野球もやってみたいし。中学は上投げの、軟式野球なんだよね……。芳子ちゃんはこのクラブに入るの？」
康夫がほがらかな声でたずねると、芳子は

「まだ、分かんない・・・」

と答えました。中学は大川の河口の方にあります。康夫の家からは遠いので、バス通学にするか親に自転車を買ってもらうか迷っていました。芳子の家からは歩いて行けるのかなど思って康夫はきこうとしましたが、やめておきました。そんな時芳子が

「康夫くん、附属中学の入試、受けられたの？病院に入院してる時だったんでしょ」

ときいてきたのです。康夫はアレ？と思ってしまいました。芳子は、康夫が受験をやめたことをまだ知らないのでしょうか。康夫は何だかおかしくなつて、笑いながら

「フゾクはやめたんだ。芳子ちゃんと同じ中学に行くんだよ」

と言いました。芳子は

「そう・・・」

と言つたまま、目を伏せてしまいました。康夫はそんな芳子の態度をそれほど気にとめませんでした。このまえ芳子と歩いた時とはちがつて、畑には春野菜が芽吹いていました。神社のサクラの木のつぼみもふくらみ始めていました。二人の足は大川に向かい、土手の上にのぼりました。春の陽に、大川の流れが輝いています。土手の下の河原では、お年寄りが数人、ゲートボールの練習をしていました。源兵衛さんの姿は見えませんでした。

二人は土手の斜面に並んで腰を下ろしました。芳子が杖をついたまましゃがもうとした

時、康夫は枯れ草の中にハハコグサを見つけて

「芳子ちゃん、そこにハハコグサが生えてるよ」

と言いました。芳子はすわりかけていたのをやめて立ち上がると、近くの枯れ草を手でよく調べてからすわり直しました。そして、康夫の指さしているまだ花をつけていないその草に顔を近づけながら

「康夫くんて、植物のこと何でも知ってるのね。将来、植物学者になるの？」

ときいてきました。康夫は芳子の方に体を寄せながら

「ボクはなれないんだ・・・生物学者にはなれないんだ・・・」

とつぶやきました。

「どうして？」

芳子からきかれた康夫は、一月の時には言えなかった言葉が、春の雪解け水のように流れ出てきました。

「ボクは・・・ボクは色弱なんだ！」

「シキジャク?・・・シキジャクの人って、色が見えないの？」

芳子が康夫の顔を見てきました。康夫は必死になって弁解している自分を意識しながら答えていました。

「シキジャクとシキモウとは違うんだ。シキモウの人は犬のように白黒の世界しか分らないらしいけど、シキジャクは色がチヨット見えにくいだけなんだ。信号も見えるしフツの人と変わらないんだけど、シキシン検査の時に、あのゴチャゴチャした数字が少し読めないんだ・・・」

——正月、家族でコタツを囲みながらお雑煮を食べていた時のことを、康夫は思い出していました。あの時、受験のことで兄から笑われた康夫が黙りこんでしまうと、母が

「康夫、おまえ将来、何になりたいの？」

ときいてきたのです。康夫は

「生物学者」

と、ポツリと答えました。そんなに深く考えたことはなかったのですが、ナントナク生物のことに関心があつたのです。

「おまえは小さい時から生きものが好きで、イロイロ飼ってきたからねえ・・・。カエルとか、ヒヨコとか・・・」

と母が言っていると、父もうなずきながら

「生物っていうと、今、アレだろ、遺伝子とかバイオなんとかで、きやつこうを浴びてんだろ？」

と言ってきました。康夫にはよく分からないので黙っていると、兄が

「大学の入試の倍率も高くなってるよ」

と口をはさみましたが、急に思い出したように

「康夫、おまえ確か、色弱だったろ？」

ときいてきました。康夫は

「ウン」

とうなずきました。

「色弱だと、生物学科へは行けないよ」

兄が言いました。康夫は

「どうして？」

ときき返しました。

「受験できないんだよ、色弱だと。理工学部はみんなダメだろうな」

「どうしてダメなの？」

「だっておまえ、車を運転してて信号が見えなかったらタイヘンじゃないか」

「ボクは信号は見えるよ」

「バカ、たとえばよ」——

「そう……そうだったの……。康夫くんて、頭もイイし足も速いの……。分らないものね……」

目を大きく見開いて康夫を見つめていた芳子はそうつぶやくと、大川の方を向いてから目を閉じ、体をうしろに倒して枯れ草の中に仰向けになりました。康夫は、長年の胸のつかえが下りたようでした。毎年春の身体検査で、友だちがいないのを見はからってシキシンの検査を受けていた自分の姿が目には浮かびました。来月は、もうそんなことはしてないでしょうか。康夫は芳子の方を見ながら、ほがらかな口調にもどってきいていました。

「芳子ちゃんは、将来、何になりたいの？」

「あたし……分かんない……。看護婦さんになりたいと思ったこともあるけど……。足が悪いから……」

芳子は目をつぶったまま答えると、黙ってしまいました。康夫も口をつぐみました。大川の河原は、春の精気に満ちていました。まるで『青い鳥』の“魂の精”たちが、こここで踊りまわっているようでした。『青い鳥』では、どんなものにも魂が宿っているときされて、実際チルチルとミチルは、パンや水の精と青い鳥をさがしに行ったのです。遠くの鉄橋の上を、ゴトゴトと赤い気動車が行きました。康夫は、フゾクに行ったらあの汽車に乗って一人で通学してたんだな、とボンヤリ考えていました。

康夫の目は、見るともなしに芳子の胸に引きつけられていました。芳子の胸は、生命の力が芽吹こうとしている春の土のように、少し盛り上がっていました。芳子の胸に視線をそそいでいる自分を意識した康夫があわてて目をそらした時、手の甲にチクツと痛みのようなものが走りました。康夫は土手に両手をついていたのですが、右手を持ち上げてみると、アリがヒフをかんでいました。しばらく手の上をアリがはい回るのを見ていた康夫は、芳子にアリのことをきいてみようと思いました。

「芳子ちゃん、アリも冬はやっぱり冬眠してるの？」

「知らない……」

芳子はけだるそうに答えました。康夫は芳子の夏休みの自由研究のことを思い浮かべて言ったのですが、意外な答えだったのでまたきいてみました。

「芳子ちゃんの飼ってるアリはどんなの？盆踊りの時、言ってたでしょ」

「ああ、アレ……アリはもう飼ってないの……。庭のクロオオアリは働きアリと幼虫しか集められなくて、幼虫がサナギになったら、働きアリは何にもしなくなっちゃったの。あとで図鑑で調べたら、アリは女王アリをつかまえて飼わないと働きアリだけでは何にもできないって書いてあったから、夏休みが終わる時に、みんな庭に帰してやったの」

「そうだったんだ……」

康夫はつぶやくように言うと、手の上のアリをプツ！と吹き飛ばしました。枯れ草の中に落ちたアリは、芳子の手の方にはって行きました。康夫は芳子の手を見ました。フックラとして暖かそうなたのひらに陽を受けて、それは康夫の目の前に投げ出されていました。康夫は芳子の手を握ってみたくまりました。

その時、カーカーとカラスの鳴き声がしたのです。康夫が振り返ってみると、神社のダグスの木に、カー公がとまってこちらを見ていました。祖父が死んで以来初めて目にするカー公の姿でした。康夫は不吉な感じがしましたが、心の中でカー公の鳴き声を数えていました。三度ではありませんでした。四度でもなくて良かったのですが、カー公は六度ずつ鳴いたのです。康夫はその声を聞きながら、今、この時は、もう永遠に來ないのだと思うと、思い切って芳子のでのひらに自分の手を重ねました。芳子はビクツとしたようですが、康夫のするままになつていました。芳子の手は少し冷たく感じました。康夫は胸の中が幸福感でいっぱいになって、大川の流れを見ていました。カー公も鳴きやんでいました。芳子が口を開きました。

「あたしもこの前カッチちゃん家に誕生会で呼ばれて——カッチちゃんのお父さん、目が見えないでしょ。あたし、ああ、目が見えて良かったなって、思ったの。メクラより、足が悪い方が、まだイイな、って……」

康夫の胸の中を熱いものが流れました。あの時——あの時も、母が同じようなことを言ったのです。色弱では生物学者になれないと知って康夫が打ちひしがれていると、父が励ますように

「康夫、今からそんなに悩むことはないんだぞ。将来のことは、ユツクリ考えて決めればいいんだ」

と言ってくれました。母も「そうよ、そうよ」とうなずきながら

「上を見れば切りなし、下を見ても切りなし。世の中には目の見えない人もいるんだから——」
と言った時

ガタツ！

という音をたてて、おばあちゃんがお椀を落としてしまいました。おばあちゃんの喉につかえないようにと母が小さく切って入れたモチが、お膳の上にこぼれました。

「アラマア、おばあちゃんつたら！」

母が台ブキンを取りに立ち上がりました——

「どうして、そう思っちゃうのかしら……」

遠くから、芳子の声が聞こえてきました。芳子の目からは、涙が流れていました。康夫はどうしようもなく悲しくなって、芳子の手を握りしめました。芳子はそれに応えるかの

ように一度康夫の手を握り返すと、手を離して起き上がりました。芳子は康夫に背を向けたまま語り始めました。

「康夫くん、あたし、お父さんの仕事の都合で、引越すことになったの。□市へ移って、向こうの養護学校に行くの」

「ヨウゴ学校？」

康夫は初めて聞く学校の名前なので、いぶかしげにつぶやきました。

「そう・・・向こうでは、あたしのように体が悪いと、フツの学校に入れてもらえないの」
芳子はそう言うと、杖をついて立ち上がりました。

「康夫くん、サヨウナラ」

一度振り向いて康夫を見た芳子の頬には、涙が二すじ、流れていました。芳子は土手の上に出ると、下流に向かって足早に歩きだしました。康夫はあまりのことにボーゼンとなつて土手の斜面に立ちつくしていました。その時、神社の大グスの木からカー公が飛び立つと、鳴きながら康夫の頭の上を飛んで行きました。カー公は、土手の上を肩を上下に揺らしながら去って行く芳子の後を追うように、大川の下流に向かって飛んで行きました。まだ日は高かったのですが、大川の河口の西の空には、黒い雲がモクモクと立ち上っていました。カー公は、五度鳴きました。

サ・ヨ・ウ・ナ・ラ――

その晩から激しい雨になりました。康夫はナカナカ寝つけませんでした。ウトウトとするたびに、裏の物置の戸がバタバタいったのです。ようやく明け方近くになって寝つくことができませんでした。康夫は夢を見ました。

海の上です。遠くに陸地が見えます。島でしょうか。浜辺の集落も見えます。海の上では、漁船が二そう近寄って、網を揚げていました。カモメが群れています。漁師たちは「エイヤサー、エイヤサー」とかけ声をかけながら、網をたぐり寄せていきます。網の中には魚がおどっているのですが、康夫の目には、網の底が破れてて魚が逃げ出して行くのが見ええました。漁師たちは気づいてないようです。みな笑いながら網を引いています。康夫は船べりに立っているのですが、漁師たちには康夫の姿が見えないようです。網がしぼられてタモが入れられようとした時、康夫が網が破れていることを教えてやろうとすると、康夫は両肩をグイとつかまれて体を持ち上げられてしまいました。

康夫はアフリカの草原に着地しました。草原といっても乾いた赤土に草がまばらに生え、遠くに立ち木が数本見えるだけです。カゲロウが立って、景色がユラユラと揺れています。十数メートル先に、ジャコウジカが一頭います。耳をそば立てて何かを警戒している

ようですが、康夫に対してではありません。康夫はなぜだか分からずに「早く逃げろ！」と叫んでいました。その声が聞こえたのか、シカは右手に向かつて走りだしたのですが、後ろ足が一本、ビッコを引いていました。その時左手の方からメスのライオンがもうれつな速さで現れて、シカに襲いかかりました。康夫が「アッー！」と叫んで目をつぶった時、また両肩をグイとつかまれて持ち上げられていました。

康夫は高層ビルの建ち並ぶ都会の上空にいました。日本の都市のようです。スモッグがおわれていて、イヤな臭いがします。康夫はどこかでかいだことのある臭いだと思うのですが、思い出せません。下を見ると、ビルとビルの間の道路に、自動車がアリの群れのようにうごめいていました。康夫は息苦しくなって鼻を押さえました。その時、この臭いが、祖父が死んだ時焼き場でかいだ死臭なのに気がつきました。そのとたん、康夫には、高層ビルがガリバーのような巨人の死体で、自動車がそれに群がるアリののように思えてきました。胸がムカついて康夫が吐きそうになった時、また両肩をつかまれて体を持ち上げられました。

海の上です。大海原がひろがっていました。康夫は肩をつかまれたまま、勢いよく海に突っこんで行きました。康夫の体が海面にブチ当たろうとした時、海の水が左右に分かれて、道のようなものができたのです。康夫はそのままグングン、グングンと、海の中を突き進んで行きました。遠くに陸地が現れました。低い海岸段丘の丘でした。丈の低い草が

いちめんに生えていました。女の子が一人、向こう向きにすわっていました。康夫はその女の子のうしろに、静かに着地しました。康夫はひと目見た時から、芳子だと直感していました。そよ風が吹いて、草が風になびいています。おだやかな空、おだやかな海でした。女の子は、康夫に背を向けたまま草笛を吹いています。康夫は子どもころ、おばあちゃんがよく大川の土手で、ヨシの葉をまるめて草笛を吹いてくれたことを思い出しました。

おばあちゃん・・・

カラスの鳴く声が聞こえたように思って、康夫は目を覚ましました。しばらくフトンの中で耳を澄ませていました。もう雨の音はやんでいます。カラスの鳴き声も聞こえませんでした。空耳そらみみだったのでしょうか。枕もとの目覚まし時計を見ると、いつも起きていた時間（おぼろげに）に目が覚めていました。もう学校に行かなくていいのに、です。康夫は起き上がって雨戸を開けました。向かいの家のテレビアンテナにも、どこにもカラスの姿は見えませんでした。雨は上がって、空は晴れわたっていました。庭の白モクレンの花が散っていました。康夫は今見た夢の気持ちの整理がつかぬまま、大川へ行ってみたくなくなりました。寝まきのままで部屋を出て行きました。

雨を含んでやわらかくなった土に足をとられながら康夫が土手の下まで来ると、土手の上を、神社の方から源兵衛さんが歩いて来ました。源兵衛さんは雨ガッパを着て、トボト

ボとやって来ます。康夫は

「源兵衛さん」

と声をかけました。源兵衛さんはうつ向いたままで、気づかないようです。康夫はもう一度「源兵衛さん」

と声をかけました。今度は源兵衛さんも気づいて康夫の方に顔を向けました。康夫はブロツクの石段をかけ上りました。

「源兵衛さん、どうしたの？」

雨ガツパの頭巾は背中にたれて、源兵衛さんの薄い髪の毛はぬれていました。

「けさ、畑へ行ってみたら、カー公が死んでたんだ……。神社のクスの木の下に埋めてやったよ……」

源兵衛さんは寂しそうに言うと、大川の方に目をやりながらつぶやきました。

「みんな、死んじゃうんだ……」

大川は、昨夜の豪雨で水かさが増し、川幅いっぱいに流れていました。おばあちゃんの指定席の岩も、濁流にのみこまれて見えませんでした。